

香川県立丸亀競技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

平池南遺跡

2018.3

香川県教育委員会

序 文

本書には、香川県立丸亀競技場建設に伴い発掘調査を行った香川県丸亀市金倉町及び原田町に所在する平池南遺跡（ひらいけみなみいせき）の報告を収録しています。

環濠集落として著名な中の池遺跡と平池という溜池を挟んで南接する当遺跡からは、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての旧河道、弥生時代前期・後期の集落跡などが発見されており、当該地の地理的・歴史的な位置付けを考えるうえで貴重な資料を得ることができました。

弥生時代前期の遺構は、遺跡の北半で見つかり、溜池を挟んで北側に広がる中の池遺跡の南限になるものと考えられます。また、縄文時代晩期の遺物は、中半から末葉にかけてのものであり、この地が縄文時代晩期から弥生時代にかけて繁栄する自然条件にあったことが窺えるものです。また、丸亀平野の平野部ではあまり例を見ない弥生時代中期の遺構、遺物も見つかっています。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、関係機関並びに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げますとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成 30 年 3 月
香川県埋蔵文化財センター
所長 増田 宏

例 言

- 1 本報告書は、香川県立丸亀競技場建設に伴い発掘調査を実施した、香川県丸亀市金倉町及び原田町に所在する平池南遺跡（ひらいけみなみいせき）の報告を収録している。
- 2 発掘調査は、香川県教育委員会から委託され、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（当時）が調査担当者として実施した。
- 3 発掘調査期間及び担当者は次の通りである。
平成6年度 予備調査・本調査
期間 平成6年4月1日～平成7年3月31日
担当 係長 大山真充 主任技師 木下晴一 同 清水渉 同 吉田智
平成7年度 本調査
期間 平成7年4月1日～7月31日
担当 文化財専門員 蘆原秀稔 主任技師 蔵本晋司
- 4 調査にあたって、次の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい（順不同、敬称略、名称は調査時）。
丸亀市開発整備課、同 農林水産課、同 道路課、丸亀市教育委員会文化課、地元自治会、地元水利組合
- 5 報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は西村尋文、木下晴一が担当した。
- 6 報告書で用いる座標系は、国土座標第IV系(世界測地系)で、方位の北は国土座標第IV系による。また、標高は東京湾平均海水面を基準とした。
- 7 遺構は次の略号により表示した。
SB 掘立柱建物 SP 柱穴 SK 土坑 SD 溝状遺構 SE 井戸 ST 墓
SR 旧河道 SX その他の遺構
- 8 遺構の断面形については、緩やかな掘り込みで水平な底面をもつものを「皿」、もたないものを「椀」、急な掘り込みで水平な底面をもつものを「筒」あるいは「箱」、もたないものを「U」字形として表現した。
- 9 石器実測図中、輪郭線の周りの実線は潰れを表す。
- 10 遺構断面図中の注記の色調は、平成6年度調査については調査担当者の主観により記載し、平成7年度調査については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を参照した。なお、土層注記の記録の残らないものは記載していない。
- 11 土器観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 2010 版』を参照した。胎土中の砂粒の「粗」は径4mm以上、「中」は0.5mm以上、「細」は0.5mm未満を基準とした。また、残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。
- 12 縄文時代晩期の土器の年代観については、平井泰男「中部瀬戸内地方における縄文時代後期末葉から晩期の土器編年試案」(土器持寄会論文集刊行会『突帯文と遠賀川』2000年)、弥生土器については、

真鍋昌宏「讃岐地域」（菅原康夫・梅木謙一編『弥生土器の様式と編年－四国編－』2000年）を参考とした。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	4
第3節 調査体制・整理体制	4
第2章 遺跡の立地と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査の成果	13
第1節 調査の方法	13
第2節 土層序	13
第3節 遺構・遺物	20
1 縄文時代～弥生時代の旧河道	20
2 弥生時代前期～中期前葉	65
3 弥生時代中期後半～後期	116
4 古代	172
5 中世	174
6 近世以降	189
7 遺構外出土の遺物	216
第4章 自然科学調査の成果	219
第1節 サヌカイト製遺物の産地同定	219
第2節 花粉・珪藻・植物珪酸体分析	222
第3節 放射性炭素年代測定	235
第5章 まとめ	239
第1節 遺構の変遷	239
第2節 平池南遺跡の地形環境	240

挿図目次

第1図	遺跡位置図(1)……………1	第58図	SR IV 03 検出時 出土遺物実測図……………61
第2図	遺跡位置図(2)……………2	第59図	SR V 02 出土遺物実測図……………62
第3図	トレンチ配置図……………3	第60図	SR IV 04 出土遺物実測図(1)……………62
第4図	試掘トレンチ出土遺物……………4	第61図	SR IV 04 出土遺物実測図(2)……………63
第5図	丸亀平野等高線図……………8	第62図	SR IV 05 出土遺物実測図……………64
第6図	周辺の主な遺跡地図……………9	第63図	Ⅱ区弥生時代前期遺構 平面図……………66
第7図	中の池遺跡 遺構集成図……………10	第64図	SP II 01～II 05 出土遺物実測図……………67
第8図	遺跡付近10cm等高線図……………11	第65図	SP II 16～II 19 出土遺物実測図……………68
第9図	調査区割図……………14	第66図	SK II 01 平・断面図、出土遺物実測図……………69
第10図	報告区割図……………15	第67図	SK II 02 平・断面図、出土遺物実測図……………70
第11図	SR VI、Ⅶ 01 断面図……………16	第68図	SK II 03 平・断面図、出土遺物実測図……………70
第12図	Ⅱ区北壁断面図……………17	第69図	SK II 04 平・断面図、出土遺物実測図……………71
第13図	Ⅱ区西壁断面図……………18	第70図	SK II 05 平・断面図、出土遺物実測図……………71
第14図	Ⅳ区西壁断面図(部分)……………19	第71図	SK II 06 平・断面図、出土遺物実測図……………72
第15図	SR I 01 平面図……………20	第72図	SK II 07 平・断面図、出土遺物実測図……………72
第16図	SR I 01 断面図・出土遺物実測図……………21	第73図	SK II 08 平・断面図、出土遺物実測図……………73
第17図	縄文～弥生時代の旧河道 平面図……………22	第74図	SK II 09 平・断面図、出土遺物実測図……………74
第18図	石器集積遺構 平・断面図……………23	第75図	SX II 01 平・断面図、出土遺物実測図……………75
第19図	石器集積遺構 出土遺物実測図……………24	第76図	SX II 02 平・断面図……………76
第20図	SR II 01 出土遺物実測図(1)……………25	第77図	SX II 02 出土遺物実測図(1)……………77
第21図	SR II 01 出土遺物実測図(2)……………26	第78図	SX II 02 出土遺物実測図(2)……………78
第22図	SR II 01 出土遺物実測図(3)……………27	第79図	SX II 03 平・断面図、出土遺物実測図(1)……………80
第23図	SR II 01 出土遺物実測図(4)……………28	第80図	SX II 03 出土遺物実測図(2)……………81
第24図	SR II 01 出土遺物実測図(5)……………29	第81図	SX II 03 出土遺物実測図(3)……………82
第25図	SR II 01 出土遺物実測図(6)……………30	第82図	SX II 04 断面図、出土遺物実測図(1)……………83
第26図	SR II 01 出土遺物実測図(7)……………32	第83図	SX II 04 出土遺物実測図(2)……………84
第27図	SR II 01 出土遺物実測図(8)……………33	第84図	SX II 04 出土遺物実測図(3)……………85
第28図	SR II 02 断面図……………34	第85図	SX II 04 出土遺物実測図(4)……………86
第29図	SR II 02 下層 出土遺物実測図……………34	第86図	SX II 05 平・断面図……………87
第30図	SR II 02 中層 出土遺物実測図(1)……………35	第87図	SX II 05 下層 出土遺物実測図(1)……………88
第31図	SR II 02 中層 出土遺物実測図(2)……………36	第88図	SX II 05 下層 出土遺物実測図(2)……………89
第32図	SR II 02 上層 出土遺物実測図(1)……………37	第89図	SX II 05 下層 出土遺物実測図(3)……………90
第33図	SR II 02 上層 出土遺物実測図(2)……………38	第90図	SX II 05 上層 出土遺物実測図(1)……………91
第34図	SR II 02 上層 出土遺物実測図(3)……………39	第91図	SX II 05 上層 出土遺物実測図(2)……………92
第35図	SR II 02 上層 出土遺物実測図(4)……………40	第92図	SK II 10～II 12 平・断面図、出土遺物実測図……………93
第36図	SR II 02 上層 出土遺物実測図(5)……………41	第93図	SK II 13 平・断面図、出土遺物実測図……………95
第37図	SR II 02 最上層 出土遺物実測図(1)……………42	第94図	SK II 14 平・断面図、出土遺物実測図……………96
第38図	SR II 02 最上層 出土遺物実測図(2)……………43	第95図	SK II 15～II 18 平・断面図……………97
第39図	SR II 02 最上層 出土遺物実測図(3)……………44	第96図	SD II 01 平・断面図、出土遺物実測図……………98
第40図	SR II 03 下層 出土遺物実測図……………44	第97図	Ⅲ区弥生時代前期遺構 平面図……………99
第41図	SR II 03 中層 出土遺物実測図……………45	第98図	SK III 01 平・断面図、出土遺物実測図……………100
第42図	SR II 03 上層 出土遺物実測図……………46	第99図	SK III 02 平・断面図、出土遺物実測図……………101
第43図	SR II 03 最上層 出土遺物実測図(1)……………47	第100図	SX III 01 出土遺物実測図……………101
第44図	SR II 03 最上層 出土遺物実測図(2)……………48	第101図	SD III 01 断面図、出土遺物実測図……………102
第45図	SR II 03 最上層 出土遺物実測図(3)……………49	第102図	SD III 02 断面図、出土遺物実測図……………102
第46図	SR II 01 か02 出土遺物実測図……………50	第103図	SD III 03 断面図、出土遺物実測図……………103
第47図	SR IV 01 出土遺物実測図……………51	第104図	SD III 04 断面図、出土遺物実測図……………103
第48図	SR IV 02 出土遺物実測図……………52	第105図	SD III 05 断面図、出土遺物実測図(1)……………104
第49図	SR V 01 最下層 出土遺物実測図……………53	第106図	SD III 05 出土遺物実測図(2)……………105
第50図	SR V 01 出土遺物実測図……………54	第107図	SD III 06 断面図、出土遺物実測図……………106
第51図	SR IV 03、IV 04 断面図……………54	第108図	SX III 02 平・断面図……………107
第52図	SR IV 03 最下層 出土遺物実測図(1)……………55	第109図	SX III 02 出土遺物実測図(1)……………108
第53図	SR IV 03 最下層 出土遺物実測図(2)……………56	第110図	SX III 02 出土遺物実測図(2)……………109
第54図	SR IV 03 下層 出土遺物実測図(1)……………57	第111図	Ⅳ区弥生時代前期遺構 平面図……………110
第55図	SR IV 03 下層 出土遺物実測図(2)……………58	第112図	SK IV 01 平・断面図、出土遺物実測図……………111
第56図	SR IV 03 下層 出土遺物実測図(3)……………59	第113図	SK IV 02 平・断面図、出土遺物実測図……………111
第57図	SR IV 03 上層 出土遺物実測図……………60		

第114図	SK IV 03	平・断面図、出土遺物実測図	112
第115図	SK IV 04	平・断面図	112
第116図	SK IV 05	平・断面図、出土遺物実測図	113
第117図	SK IV 06	平・断面図、出土遺物実測図	114
第118図	Ⅱ区弥生時代後期遺構	平面図	115
第119図	SP Ⅱ 21～Ⅱ 26	出土遺物実測図	116
第120図	SK Ⅱ 19	平・断面図、出土遺物実測図	117
第121図	SK Ⅱ 20	平・断面図、出土遺物実測図	118
第122図	SK Ⅱ 21	平・断面図、出土遺物実測図	119
第123図	SD Ⅱ 02	平・断面図、出土遺物実測図	120
第124図	SX Ⅱ 06	平・断面図、出土遺物実測図	121
第125図	SX Ⅱ 07	平・断面図、出土遺物実測図	122
第126図	SX Ⅱ 08	平・断面図、出土遺物実測図	122
第127図	SK Ⅱ 22、Ⅱ 23、SD Ⅱ 03、SX Ⅱ 09	平・断面図、出土遺物実測図	123
第128図	SP Ⅱ 27～Ⅱ 35	出土遺物実測図	124
第129図	SK Ⅱ 24	平・断面図、出土遺物実測図	125
第130図	Ⅱ区弥生時代後期の包含層	出土遺物実測図(1)	126
第131図	Ⅱ区弥生時代後期の包含層	出土遺物実測図(2)	127
第132図	Ⅱ区弥生時代後期の包含層	出土遺物実測図(3)	128
第133図	Ⅱ区弥生時代後期の包含層	出土遺物実測図(4)	129
第134図	Ⅲ区弥生時代後期遺構	平面図	130
第135図	SP Ⅲ 01	出土遺物実測図	131
第136図	SK Ⅲ 03	平・断面図、出土遺物実測図	131
第137図	SK Ⅲ 04	平・断面図	132
第138図	SK Ⅲ 05	平・断面図、出土遺物実測図	132
第139図	SK Ⅲ 06	平・断面図、出土遺物実測図	133
第140図	SE Ⅲ 01	平・断面図、下層出土遺物実測図	134
第141図	SE Ⅲ 01	上層出土遺物実測図	135
第142図	SE Ⅲ 02	平・断面図、出土遺物実測図	136
第143図	SD Ⅲ 07、Ⅲ 08	平・断面図	137
第144図	SD Ⅲ 07	出土遺物実測図	138
第145図	SD Ⅲ 08	下層出土遺物実測図	139
第146図	SD Ⅲ 08	上層出土遺物実測図(1)	140
第147図	SD Ⅲ 08	上層出土遺物実測図(2)	141
第148図	SD Ⅲ 08	出土遺物実測図(1)	142
第149図	SD Ⅲ 08	出土遺物実測図(2)	143
第150図	SP Ⅲ 02	出土遺物実測図	144
第151図	SD Ⅲ 09～Ⅲ 19	平・断面図、出土遺物実測図	145
第152図	Ⅳ区弥生時代後期の包含層	出土遺物実測図	146
第153図	SD V 01	断面図、出土遺物実測図	147
第154図	Ⅶ区弥生時代中～後期遺構	平面図	148
第155図	SK Ⅶ 01	平・断面図、出土遺物実測図	149
第156図	SK Ⅶ 02、Ⅶ 03	平・断面図、出土遺物実測図	150
第157図	SD Ⅶ 01	平・断面図(上層遺物出土状況図)	152
第158図	SD Ⅶ 01	下層遺物出土状況図	153
第159図	SD Ⅶ 01	出土遺物実測図(1)	154
第160図	SD Ⅶ 01	出土遺物実測図(2)	155
第161図	SD Ⅶ 01	出土遺物実測図(3)	156
第162図	SD Ⅶ 02	平・断面図、出土遺物実測図	157
第163図	ST Ⅶ 01	平・断面図、出土遺物実測図	158
第164図	ST Ⅶ 02	平・断面図、出土遺物実測図	159
第165図	ST Ⅶ 03	平・断面図、出土遺物実測図	160
第166図	ST Ⅶ 04	平・断面図、出土遺物実測図	161
第167図	ST Ⅶ 05	平・断面図、出土遺物実測図	161
第168図	SD Ⅶ 03	平・断面図	162
第169図	SD Ⅶ 03	出土遺物実測図	163
第170図	SD Ⅶ 05	平・断面図、出土遺物実測図	164
第171図	SX Ⅶ 01	平・断面図	165
第172図	SR Ⅶ・Ⅶ 01	上層包含層(3層) 出土遺物実測図(1)	166
第173図	SR Ⅶ・Ⅶ 01	上層包含層(3層) 出土遺物実測図(2)	167
第174図	SR Ⅶ・Ⅶ 01	上層包含層(3層) 出土遺物実測図(3)	168
第175図	SR Ⅶ・Ⅶ 01	上層包含層(3層) 出土遺物実測図(4)	169
第176図	SR Ⅶ・Ⅶ 01	上層包含層(3層) 出土遺物実測図(5)	170
第177図	SR Ⅶ・Ⅶ 01	上層包含層(3層) 出土遺物実測図(6)	171
第178図	SR Ⅶ・Ⅶ 01	上層包含層(1層) 出土遺物実測図	172
第179図	Ⅱ区古代～近世以降遺構	平面図	173
第180図	SK Ⅱ 25	平・断面図、出土遺物実測図	174
第181図	SD Ⅱ 04、Ⅱ 05	断面図、出土遺物実測図(1)	175
第182図	SD Ⅱ 04、Ⅱ 05	出土遺物実測図(2)	176
第183図	SD Ⅱ 04、Ⅱ 05	出土遺物実測図(3)	177
第184図	Ⅳ区中世遺構	平面図	178
第185図	SD Ⅳ 01	断面図、出土遺物実測図	179
第186図	SD Ⅳ 02	断面図、出土遺物実測図	180
第187図	SX Ⅳ 01～Ⅳ 04	出土遺物実測図	180
第188図	Ⅴ区中近世以降の遺構	平面図	182
第189図	SD V 02	断面図、出土遺物実測図	183
第190図	SD V 03	断面図、出土遺物実測図	184
第191図	SD V 04～V 07	平・断面図	185
第192図	SD V 04～V 08	出土遺物実測図	186
第193図	Ⅵ区中近世以降の遺構	平面図	187
第194図	SD Ⅵ 01	平・断面図、出土遺物実測図	188
第195図	SD Ⅱ 06	断面図、出土遺物実測図	189
第196図	SK Ⅲ 07	平・断面図、出土遺物実測図	190
第197図	Ⅳ区近世以降の遺構(主要部)	平面図	191
第198図	SB Ⅴ 01、SK Ⅳ 07	平・断面図、出土遺物実測図	192
第199図	SP Ⅳ 01～Ⅳ 08	出土遺物実測図	193
第200図	SK Ⅳ 10～Ⅳ 16	断面図、出土遺物実測図	194
第201図	SK Ⅳ 17	平・断面図、出土遺物実測図	195
第202図	SK Ⅳ 18～Ⅳ 22	平・断面図、出土遺物実測図	196
第203図	SK Ⅳ 23、Ⅳ 26～Ⅳ 28	平・断面図、出土遺物実測図	197
第204図	SE Ⅳ 01	出土遺物実測図	199
第205図	SX Ⅳ 05、Ⅳ 06	出土遺物実測図	200
第206図	SD Ⅳ 03～Ⅳ 08	断面図、出土遺物実測図	201
第207図	SP V 01、SD V 09～V 11	断面図、出土遺物実測図	202
第208図	SK Ⅵ 01～Ⅵ 03、SD Ⅵ 03	断面図、出土遺物実測図	203
第209図	Ⅶ区 近世以降の遺構	平面図	205
第210図	SD Ⅵ 04、SK Ⅶ 04～Ⅶ 06	断面図、出土遺物実測図	206
第211図	SD Ⅶ 06、Ⅶ 07	断面図、出土遺物実測図	206

第 212 図	SD VII 08 断面図、出土遺物実測図	207	第 222 図	IV～VI区遺構外 出土遺物実測図(2)	216
第 213 図	SE VI 01 平・断面図	208	第 223 図	VII区遺構外 出土遺物実測図	217
第 214 図	年代不明の遺構 平・断面図、出土遺物実測図(1)	209	第 224 図	試料採取地点断面図	222
第 215 図	年代不明の遺構 平・断面図、出土遺物実測図(2)	210	第 225 図	花粉分析処理フローチャート	223
第 216 図	年代不明の遺構 平・断面図、出土遺物実測図(3)	211	第 226 図	花粉ダイアグラム	223
第 217 図	II区遺構外 出土遺物実測図(1)	212	第 227 図	珪藻分析処理フローチャート	225
第 218 図	II区遺構外 出土遺物実測図(2)	213	第 228 図	珪藻ダイアグラム	225
第 219 図	II区遺構外 出土遺物実測図(3)	213	第 229 図	珪藻総合ダイアグラム	225
第 220 図	III区遺構外 出土遺物実測図	214	第 230 図	植物珪酸体分析処理フローチャート	227
第 221 図	IV～VI区遺構外 出土遺物実測図(1)	215	第 231 図	植物珪酸体ダイアグラム	227
			第 232 図	暦年較正結果	236
			第 233 図	洪積層と沖積層の関係	240
			第 234 図	遺跡周辺の地形分類	241

表目次

第 1 表	調査体制・整理体制 一覧(1)	5	第 34 表	土器観察表(22)	268
第 2 表	整理体制 一覧(2)	6	第 35 表	土器観察表(23)	269
第 3 表	試料一覧及び同定結果	219	第 36 表	土器観察表(24)	270
第 4 表	新たに加えた原石群と遺物群	220	第 37 表	土器観察表(25)	271
第 5 表	分析結果	221	第 38 表	土器観察表(26)	272
第 6 表	微化石概査結果	222	第 39 表	土器観察表(27)	273
第 7 表	花粉組成表	224	第 40 表	土器観察表(28)	274
第 8 表	珪藻組成表	226	第 41 表	土器観察表(29)	275
第 9 表	同定・検鏡対象分類群	226	第 42 表	土器観察表(30)	276
第 10 表	植物珪酸体組成表	227	第 43 表	土器観察表(31)	277
第 11 表	測定試料および処理	235	第 44 表	土器観察表(32)	278
第 12 表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	236	第 45 表	土器観察表(33)	279
第 13 表	土器観察表(1)	247	第 46 表	土器観察表(34)	280
第 14 表	土器観察表(2)	248	第 47 表	土器観察表(35)	281
第 15 表	土器観察表(3)	249	第 48 表	石器観察表(1)	282
第 16 表	土器観察表(4)	250	第 49 表	石器観察表(2)	283
第 17 表	土器観察表(5)	251	第 50 表	石器観察表(3)	284
第 18 表	土器観察表(6)	252	第 51 表	石器観察表(4)	285
第 19 表	土器観察表(7)	253	第 52 表	石器観察表(5)	286
第 20 表	土器観察表(8)	254	第 53 表	石器観察表(6)	287
第 21 表	土器観察表(9)	255	第 54 表	石器観察表(7)	288
第 22 表	土器観察表(10)	256	第 55 表	石器観察表(8)	289
第 23 表	土器観察表(11)	257	第 56 表	石器観察表(9)	290
第 24 表	土器観察表(12)	258	第 57 表	石器観察表(10)	291
第 25 表	土器観察表(13)	259	第 58 表	石器観察表(11)	292
第 26 表	土器観察表(14)	260	第 59 表	石器観察表(12)	293
第 27 表	土器観察表(15)	261	第 60 表	石器観察表(13)	294
第 28 表	土器観察表(16)	262	第 61 表	石器観察表(14)	295
第 29 表	土器観察表(17)	263	第 62 表	石器観察表(15)	296
第 30 表	土器観察表(18)	264	第 63 表	瓦観察表	296
第 31 表	土器観察表(19)	265	第 64 表	金属器観察表	296
第 32 表	土器観察表(20)	266	第 65 表	玉類観察表	296
第 33 表	土器観察表(21)	267	第 66 表	木製品観察表	296

写真図版目次

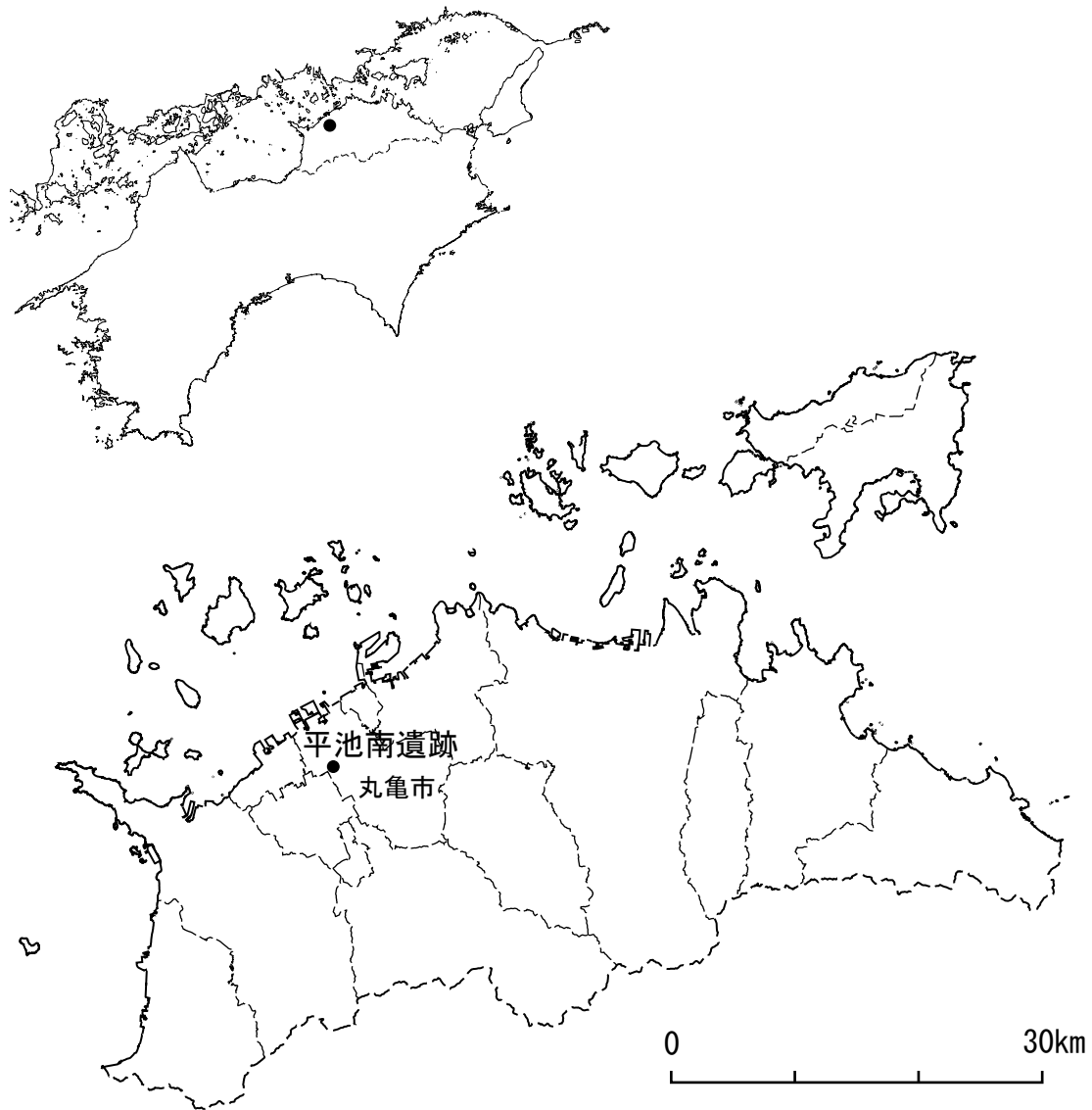
写真図版	花粉	232	図版 15	写真 42	SD VII 01	遺物出土状況 (西から)
写真図版	版珪藻	233		写真 43	SD VII 01	遺物出土状況 (東から)
写真図版	植物珪酸体	234		写真 44	SD VII 01	遺物出土状況 (西から)
図版 1	写真 1	北上空から見た平池南遺跡	図版 16	写真 45	ST VII 01	掘削状況 (南から)
	写真 2	北上空から見た平池南遺跡		写真 46	ST VII 02	掘削状況 (東から)
図版 2	写真 3	SR I 01 掘削状況 (東から)		写真 47	ST VII 03	掘削状況 (西から)
	写真 4	II 区 (H7) 全景 (東から)	図版 17	写真 48	ST VII 04	掘削状況 (北から)
	写真 5	SR II 01、II 03 断面 (南から)		写真 49	ST VII 05	掘削状況 (北から)
図版 3	写真 6	SX II 01 遺物出土状況 (北から)		写真 50	SD VII 03	掘削状況 (東から)
	写真 7	SR II 01 小型鋤状木製品出土状況 (南から)	図版 18	写真 51	SD VII 03	掘削状況 (東北から)
	写真 8	SR II 01 小型鋤状木製品出土状況 (西から)		写真 52	SD VII 03	断面 (南から)
図版 4	写真 9	SR II 02 断面 (南西から)		写真 53	SR VI・VII 01	掘削状況 (北から)
	写真 10	SR IV 01 掘削状況 (東から)	図版 19	写真 54	SR VI・VII 01	3層上面足跡状の痕跡 (南から)
	写真 11	SR V 01 断面 (南西から)		写真 55	SR VI・VII 01	1層上面畝状遺構 検出状況 (南から)
図版 5	写真 12	SR IV 03、IV 04 掘削状況 (南から)		写真 56	SX IV 01～IV 04	掘削状況 (東南から)
	写真 13	SR IV 05 掘削状況 (南西から)	図版 20	写真 57	SD V 04～V 07	掘削状況 (南から)
	写真 14	SR V 01 掘削状況 (南西から)		写真 58	SD VI 01 等	掘削状況 (南から)
図版 6	写真 15	SP II 19 遺物出土状況 (南から)		写真 59	SD VII 06、VII 07	掘削状況 (北から)
	写真 16	SK II 01 遺物出土状況 (東から)	図版 21	写真 60	II 区	掘削状況 (西から)
	写真 17	SK II 03 遺物出土状況 (西から)		写真 61	SB IV 01、SK IV 07	掘削状況 (南から)
図版 7	写真 18	SK II 09 遺物出土状況 (東から)		写真 62	SK IV 17	遺物出土状況 (南から)
	写真 19	SK II 09 掘削状況 (南から)	図版 22	写真 63	SE IV 01 付近	掘削状況 (北から)
	写真 20	SX II 02 遺物出土状況 (北から)		写真 64	SE VI 01	掘削状況 (南から)
図版 8	写真 21	SX II 03 遺物出土状況 (西から)		写真 65	SE VI 01	掘削状況 (東から)
	写真 22	SX II 05 断面 (東から)	図版 23			出土遺物 1
	写真 23	SX II 05 遺物出土状況 (南から)	図版 24			出土遺物 2
図版 9	写真 24	SK II 12 掘削状況 (西から)	図版 25			出土遺物 3
	写真 25	SK II 13 掘削状況 (南から)	図版 26			出土遺物 4
	写真 26	SX III 02 掘削状況 (南東から)	図版 27			出土遺物 5
図版 10	写真 27	SK II 20 断面 (東から)	図版 28			出土遺物 6
	写真 28	SK II 20 下層遺物出土状況 (東から)	図版 29			出土遺物 7
	写真 29	SK II 20 上層遺物出土状況 (東から)	図版 30			出土遺物 8
図版 11	写真 30	SD II 02 掘削状況 (北西から)	図版 31			出土遺物 9
	写真 31	III 区 掘削状況 (北から)	図版 32			出土遺物 10
	写真 32	SE III 01 遺物出土状況 (北から)	図版 33			出土遺物 11
図版 12	写真 33	SE III 01 遺物出土状況 (東から)	図版 34			出土遺物 12
	写真 34	SE III 02 たちわり状況 (西から)	図版 35			出土遺物 13
	写真 35	SD III 08 掘削状況 (南から)	図版 36			出土遺物 14
図版 13	写真 36	SD III 08 断面 (南から)	図版 37			出土遺物 15
	写真 37	SD III 09～III 18 等 掘削状況 (東から)	図版 38			出土遺物 16
	写真 38	VII 区 SK VII 01 等 掘削状況 (東南から)	図版 39			出土遺物 17
図版 14	写真 39	SK VII 01、ST VII 02～VII 04 掘削状況 (西から)				
	写真 40	SK VII 03 断面 (北から)				
	写真 41	SD VII 01 断面 (西から)				

付図

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成5年に本格的に始動した日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)は、都道府県に本拠地を置くもので、国内各地で試合が開催される特徴をもつものであった。試合開催のためには多人数の観客を収容するスタジアムが必要であり、国内各地でスタジアムの新設や改修が行われた。香川県では、このような全国的な動向とともに、平成10年に全国高等学校総合体育大会の開催が予定されており、3万人の観客を収容できる競技場の建設が計画された。

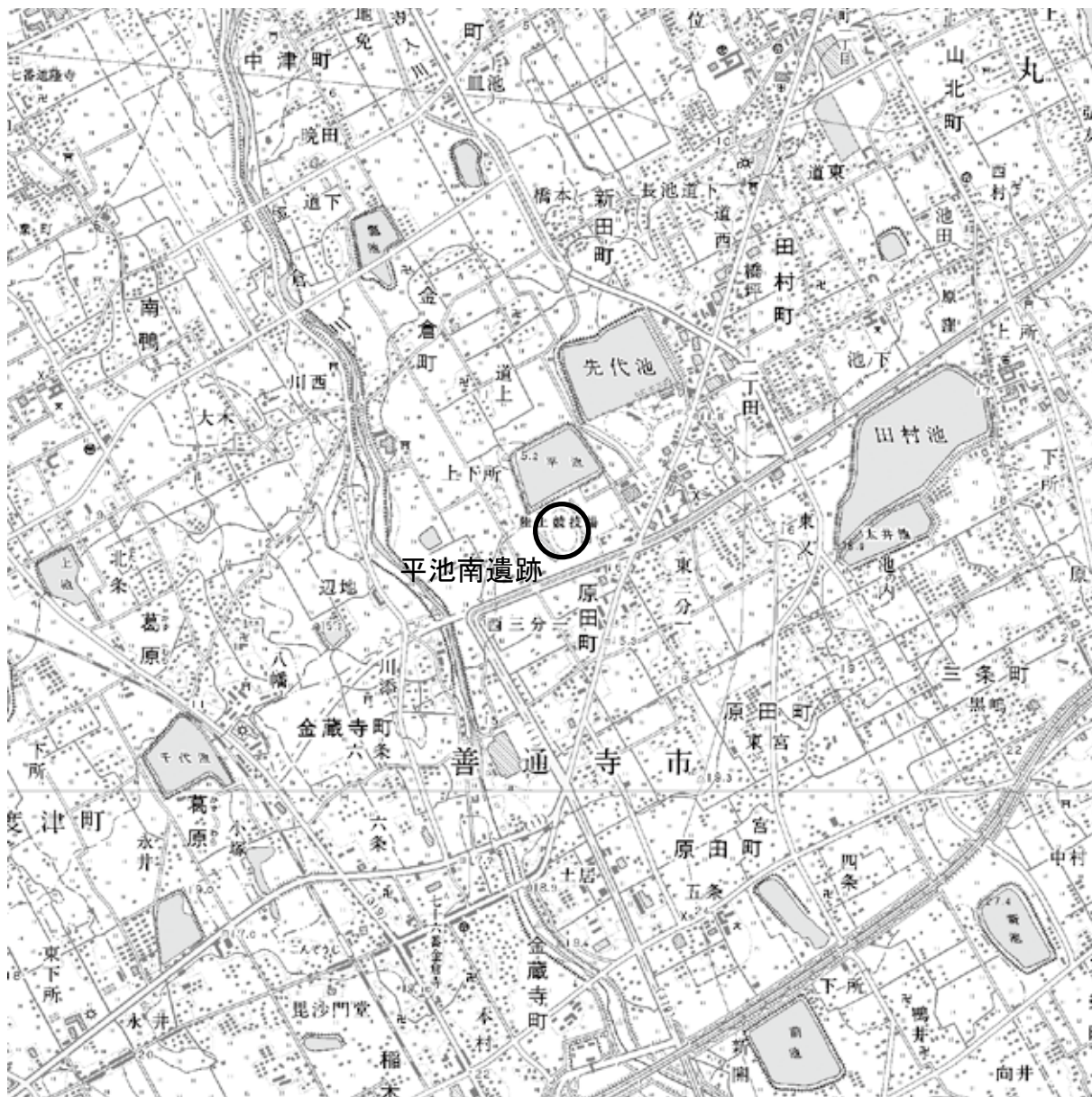


第1図 遺跡位置図(1)

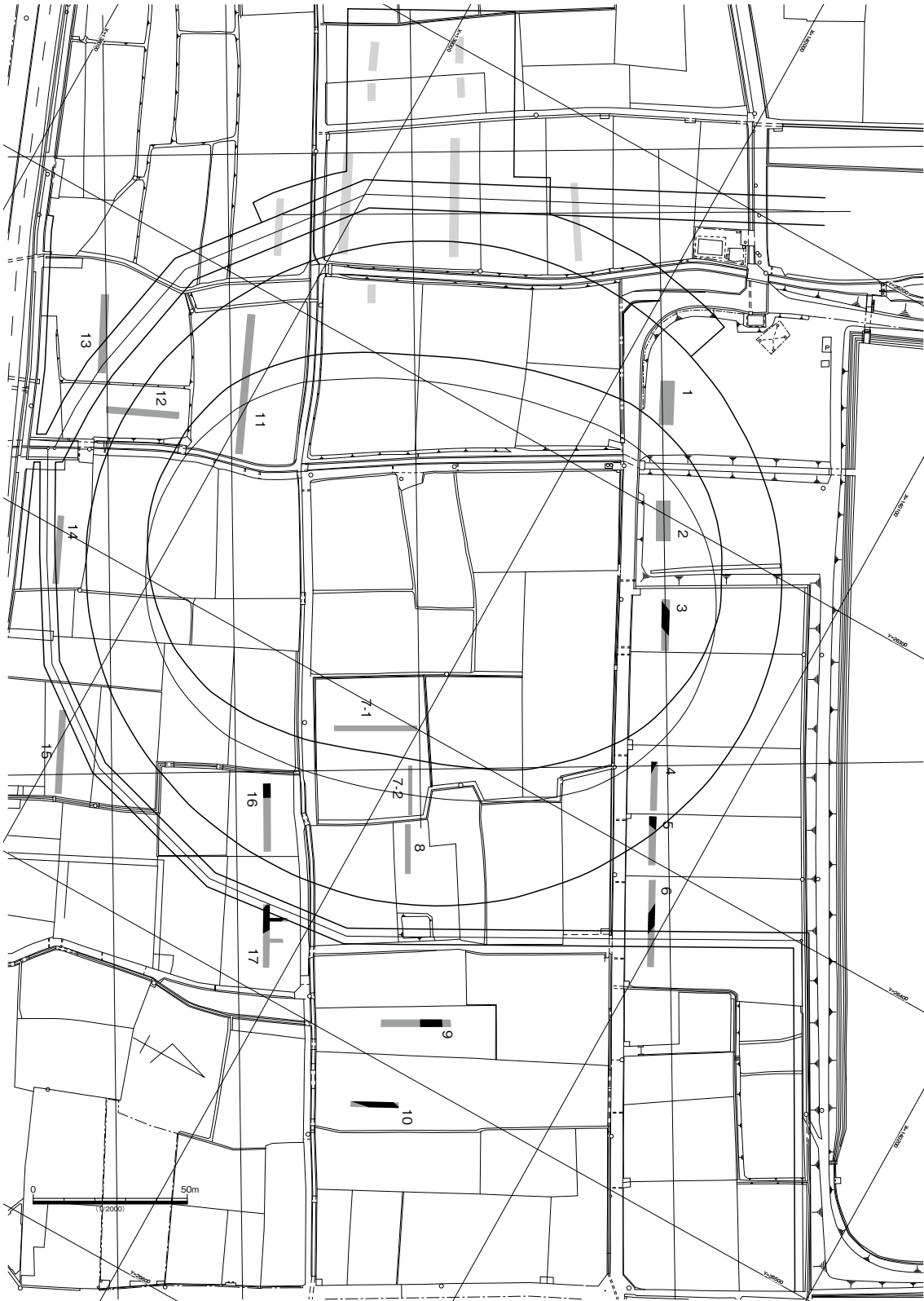
事業は、平成5年から本格化した。当初は、誘致先の丸亀市において用地を取得し、基盤整備後に香川県が買い取ることにしていたため、埋蔵文化財調査は丸亀市が行う計画であった。しかし、建設地は県が事業認定申請を行い認定を受けることとなったこと等から、県が埋蔵文化財調査を実施することとなった。

試掘調査は、用地交渉が進むなか調査を行う承諾が得られた地筆を対象に行われた。香川県教育委員会事務局文化行政課（当時）の担当職員が平成6年1月24～26日の期間に18本のトレンチ（調査面積788㎡）を掘削した。調査の結果、すべてのトレンチにおいて遺構もしくは旧河道が検出され、建設地全体に遺跡が所在することが判明し、平池南遺跡と命名された。

試掘調査の結果を受けて、香川県教育委員会は平池南遺跡について事業の実施に先立ち発掘調査を実施することとし、試掘調査では限られた面積しか発掘することができなかつたため、改めて建設予定地全域を対象とした予備調査とともに本調査を財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（当時）に委託することとした。



第2図 遺跡位置図（2）（国土地理院 1/25,000 地形図「丸亀」・「善通寺」を使用）



第3図 トレンチ配置図 (番号を付したものが試掘調査トレンチ、付さないものは予備調査トレンチ)

第2節 調査の経過

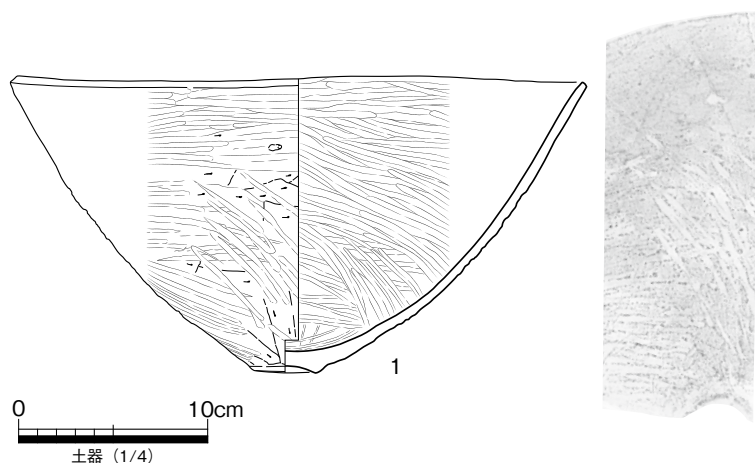
発掘調査は、平成6年4月から開始し、平成6年度は調査班2班体制で、試掘調査トレンチを入れることができなかつた事業地西部の予備調査（2,000㎡）を4～6月に実施し、7月から本調査14,000㎡を実施することが計画された。しかし、用地確保の関係で4月中は現場に入ることができなかつた。

4月22日、丸亀市、県保健体育課、県文化行政課（当時）、（財）香川県埋蔵文化財調査センター（当時）の四者による初めての協議がなされ、用地確保の遅れや基盤整備に伴う水路工事の計画が示され、当初計画通りには調査が実施できないこととなった。このため、用地については取得前に地権者により発掘承諾を得ることとし、調査方法は予備調査の規模を縮小し、試掘調査が実施されている予定地東部から本調査に着手することとなった。予備調査は、5月9日より着手し、本調査は同16日から着手した。

調査工程及び面積については、4月22日の協議に基づき作成した案を5月27日の協議で示し、協議結果により工程を一部修正した変更工程1（6月3日付け）を作成した。その後、競技場スタンド部分の設計変更に伴い変更工程2（7月15日付け）を作成し、これに基づき調査を進め、平成6年度の調査面積は18,360㎡（予備調査480㎡、本調査17,880㎡）となった。

平成7年度は、競技場北側部分を中心に、残る4,000㎡の調査を実施した。現地での発掘調査は、平成7年4月7日に着手し、7月18日に完了した。

平成6年度の調査は、2班編成で、第1班は直営方式で調査を行い、第2班は工事請負方式で調査を行い、平成7年度の調査は直営方式で行った。なお、各年度に調査の概要報告（香川県教育委員会、（財）香川県埋蔵文化財調査センター『陸上競技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成6年度』、1995・香川県教育委員会、（財）香川県埋蔵文化財調査センター『陸上競技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成7年度』、1996）を刊行している。



第4図 試掘トレンチ出土遺物

第3節 調査体制・整理体制

整理作業は、平成27年度の12カ月間および28年度の8カ月間で実施され、報告書の印刷を平成29年度に行った。平成27年度は西村が担当し、遺物の接合および実測遺物の抽出、土器、石器実測、遺物写真の撮影、遺構の整理を行った。平成28年度は木下が担当し、石器実測の残り、遺物のトレース、

遺構の整理および原稿執筆、遺物収納等を行った。発掘調査、整理作業の体制は以下のとおりである。

平成6年度 調査体制

香川県教育委員会事務局 文化行政課	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
総括	総括
課長 高木 尚	所長 松本 豊胤
主幹 小原 克己	次長 真鍋 隆幸
課長補佐 高木 一義	総務
総務	係長 土井 茂樹 (～5/31)
係長 源田 和幸	係長 前田 和也 (6/1～)
主査 星加 宏明 (6/1～)	主査 西村 厚二
主任主事 櫻木 新士 (～5/31)	参事 別枝 義昭
主事 藤原 和子 (～5/31)	調査
主事 高倉 秀子 (6/1～)	参事 糸目 末夫
埋蔵文化財	係長 大山 真充
係長 藤好 史郎	主任技師 木下 晴一
主任技師 國木 健司	主任技師 清水 渉
主任技師 森下 英治	主任技師 吉田 智
	調査技術員 高橋佳緒里
	調査技術員 今井由記子

平成7年度 調査体制

香川県教育委員会事務局 文化行政課	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
総括	総括
課長 高木 尚	所長 大森 忠彦
課長補佐 高木 一義	次長 真鍋 隆幸
課長補佐 北原 和利	総務
総務	係長 前田 和也
係長 源田 和幸 (～5/31)	主査 西村 厚二
係長 山崎 隆 (6/1～)	参事 別枝 義昭
主査 星加 宏明	調査
主任主事 高倉 秀子	参事 糸目 末夫
埋蔵文化財	係長 大山 真充
副主幹 渡部 明夫	文化財専門員 蘆原 秀稔
主任技師 森下 英治	主任技師 蔵本 晋司
技師 塩崎 誠司	調査技術員 門脇 範子

平成27年度 整理体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課	香川県埋蔵文化財センター
総括	総括
課長 増田 宏	所長 真鍋 昌宏
副課長 小柳 和代	次長 前田 和也
総務・生涯学習推進グループ	総務課
課長補佐 愛染伊知朗	課長(兼) 前田 和也
副主幹 松下由美子	主任 寺岡 仁美
主事 和木 麻佳	主任 高木 秀哉
文化財グループ	主任 中川 美江
課長補佐 片桐 孝浩	主任 丸尾麻知子
主任文化財専門員 山下 平重	主任 岩崎 昌平
文化財専門員 乗松 真也	資料普及課
	課長 森 格也
	主任文化財専門員 西村 尋文

第1表 調査体制・整理体制(1)

平成 28 年度 整理体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課	香川県埋蔵文化財センター
<p>総括</p> <p>課長 小柳 和代</p> <p>副課長 片桐 孝浩</p> <p>総務・生涯学習推進グループ</p> <p>課長補佐 愛染伊知朗</p> <p>副主幹 松下由美子</p> <p>主事 和木 麻佳</p> <p>文化財グループ</p> <p>課長補佐（兼） 片桐 孝浩</p> <p>主任文化財専門員 山下 平重</p> <p>主任文化財専門員 乗松 真也</p>	<p>総括</p> <p>所長 増田 宏</p> <p>次長 森 格也</p> <p>総務課</p> <p>課長（兼） 森 格也</p> <p>副主幹 斎藤 政好</p> <p>主任 寺岡 仁美</p> <p>主任 高木 秀哉</p> <p>主任 丸尾麻知子</p> <p>主任 岩崎 昌平</p> <p>資料普及課</p> <p>課長 古野 徳久</p> <p>主任文化財専門員 木下 晴一</p>

第 2 表 整理体制 担当者一覧 (2)

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

平池南遺跡は、主として土器川が形成した緩傾斜扇状地の扇端付近に位置する。瀬戸内海から約3km内陸にあり、西約500mには金倉川が北流する。現在の行政区画では丸亀市金倉町の南部と原田町の北部にまたがる地域になるが、明治20年代に作成された地籍図(地押調査更正図)によると、金倉町側は「六郷村大字上金倉字上下所」、原田町側は「龍川村大字原田字東三分一」と「西三分一」の3つの小字からなっている。近世では六郷村は丸亀藩に龍川村は高松藩に属していた。明治20年代の地籍図記載による土地利用状況は、調査着手時までほとんど変わらず、ほぼ全域が水田として利用されていた。当該地域の水田には一町方格の条里型の地割が認められる。

第2節 歴史的環境

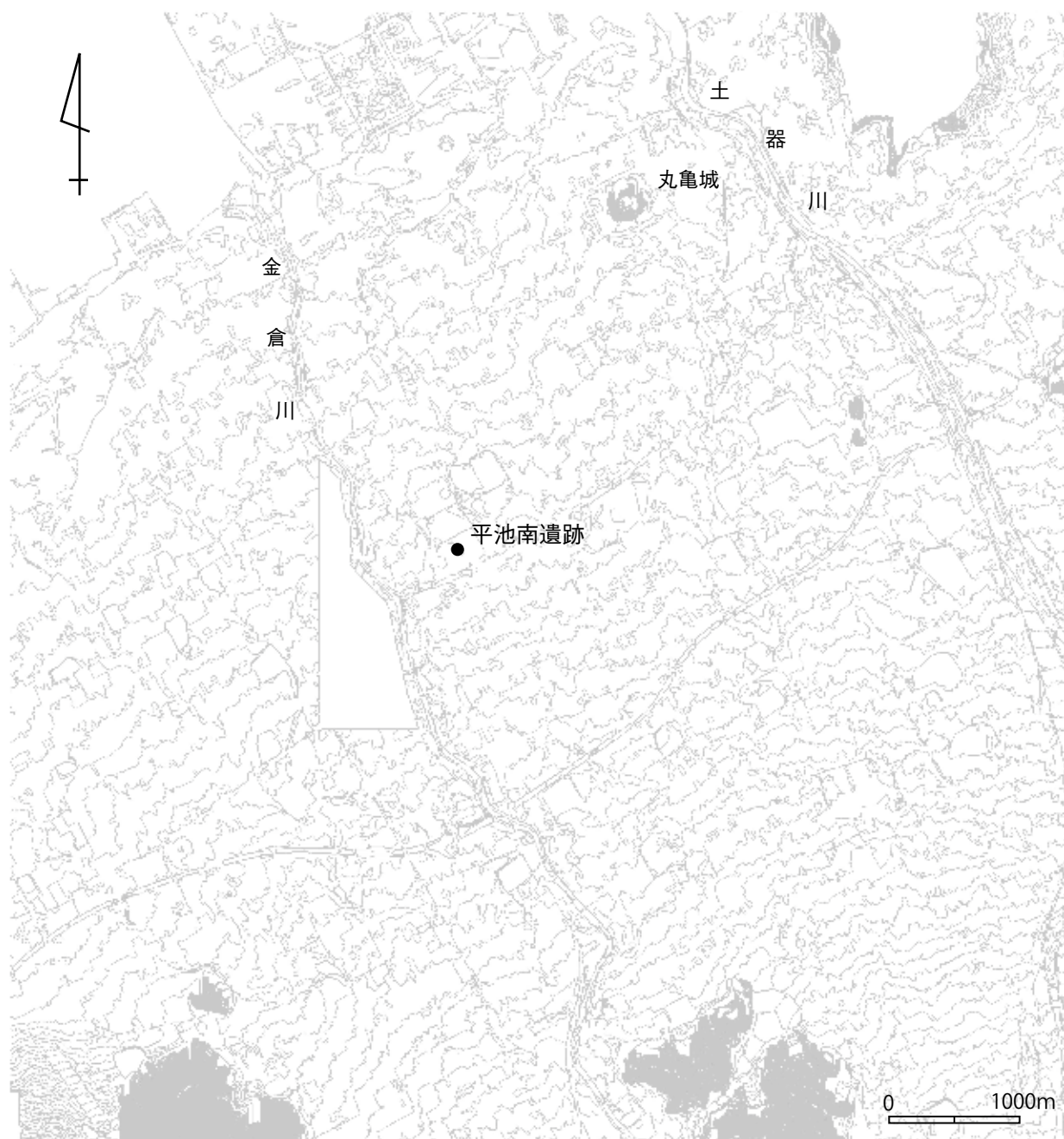
平池南遺跡の北には、平池をはさんで中の池遺跡が存在する。中の池遺跡は1940年代から弥生土器の出土が知られ、1976年、1981年の発掘調査で弥生時代前期の環濠集落であることが明らかとなった。その後、運動公園の整備に伴って15次にわたる発掘調査が行われている。この結果、弥生時代前期前期に「V」字状環濠をもつ居住域が形成されて後、複数の居住域が発見する。また、この拡大に伴って環濠の再編、多重化がおこり、居住域の周辺では旧河道起源の凹地に小区画水田が営まれていた。水田域と環濠との境界から木棺墓が検出され、周辺の旧河道から縄文時代晩期の遺物が出土する、などの様相が明らかとなっている。

平池南遺跡の北1km強に道下遺跡が存在する。県道整備に先立って行われた発掘調査では、縄文時代晩期から弥生時代前期、弥生時代後期の溝状遺構を中心とする遺構が検出されている。

新田橋本遺跡では、弥生時代後期の灌漑用水路と考えられる溝状遺構、古代・中世の掘立柱建物跡が検出されている。掘立柱建物の向きは周辺の条里型地割の方向と合致している。なお、条里型地割の方向と合う溝状遺構も複数検出されている。

平池南遺跡(店舗建設)は、香川県立丸亀競技場と国道11号を挟んだ南側に位置する。建物を支えるコンクリート支柱基礎と調整池部分の調査であるため、遺跡全容を把握することは難しいが、縄文時代晩期の貯蔵穴と考えられる土坑2基のほか、調査対象地西側半分では、弥生時代前期から古墳時代にかけての水田跡の可能性の高い堆積層が確認されている。

このように近年では丸亀市教育委員会の埋蔵文化財調査体制の拡充も相まって、遺跡周辺の歴史的環境を考察する資料が蓄積されてきている。



(等高線間隔は 1 m 標高値欠測部あり)

第 7 図 丸龜平野等高線図 (国土地理院基盤地図情報 5 m メッシュ標高を使用)

香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『県道多度津丸亀線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 道下遺跡』1991

丸亀市、松本考古学研究所『中の池遺跡 丸亀市総合運動公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1998

丸亀市教育委員会、(財)元興寺文化財研究所『中の池遺跡-第8次調査-総合運動公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2003

丸亀市教育委員会、(財)元興寺文化財研究所『中の池遺跡・平池東遺跡-中の池遺跡第13次調査・平池東遺跡第3次調査-総合運動公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2008

株式会社イズミ、丸亀市教育委員会『丸亀市埋蔵文化財調査報告書第4集 新田橋本遺跡 ゆめタウン丸亀建設事業に伴う確認調査報告書』2009

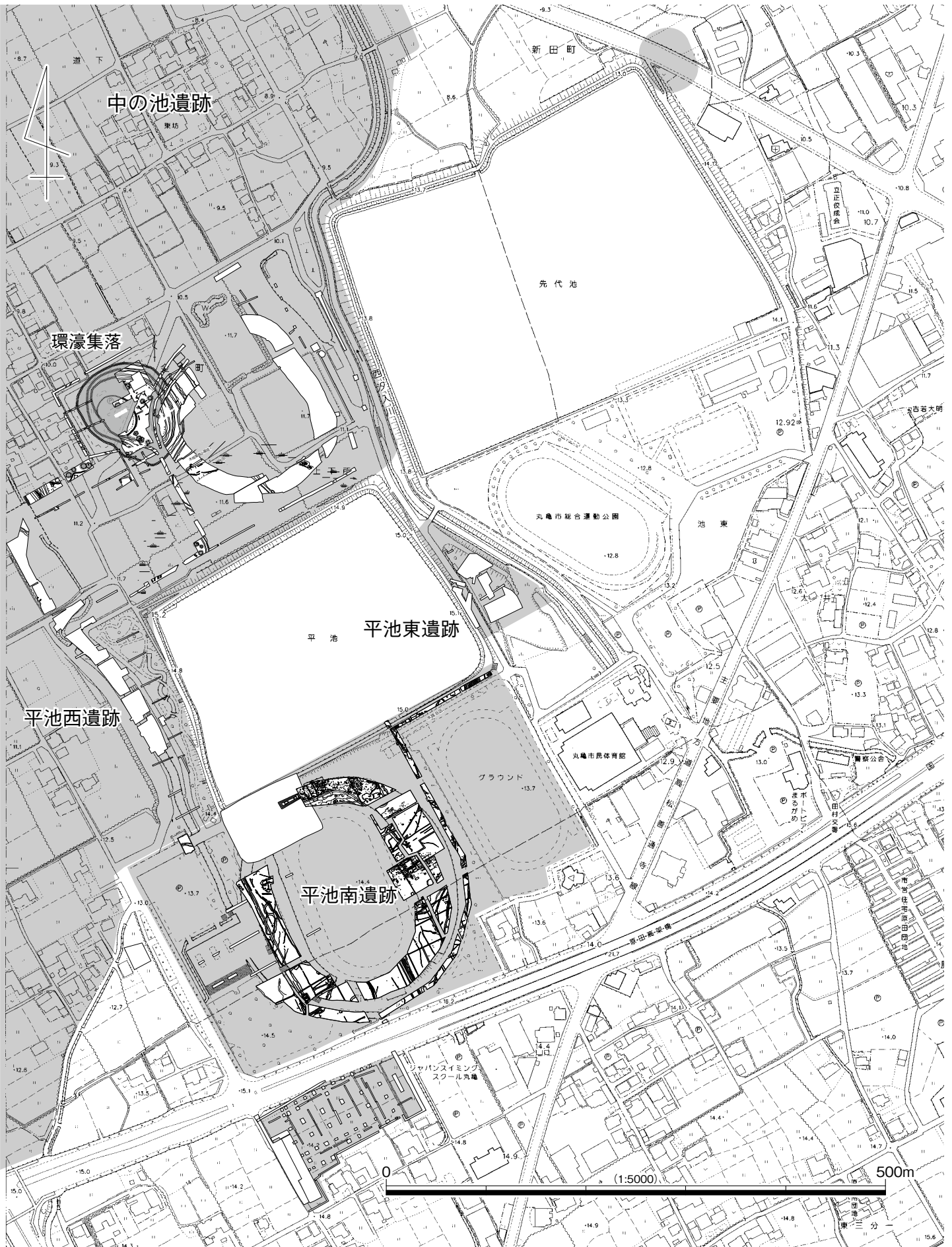
株式会社エディオン、丸亀市教育委員会『丸亀市埋蔵文化財発掘調査報告第20冊 新田橋本遺跡2 株式会社エディオン店舗建設に伴う発掘調査報告書』2015

丸亀市教育委員会『丸亀市埋蔵文化財調査報告第21冊 中の池遺跡 総合運動公園整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』2015

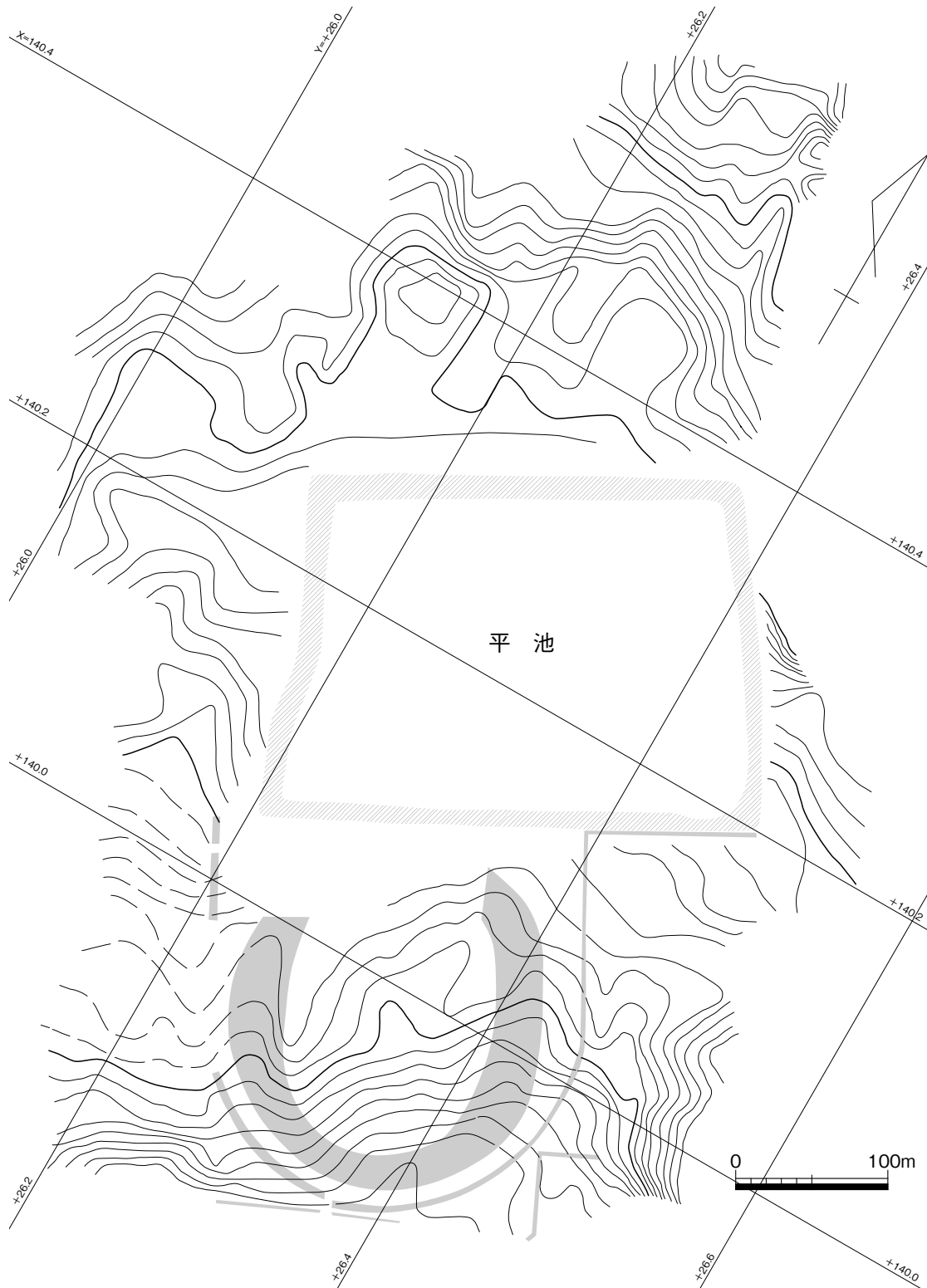
株式会社ビッグ・エス、丸亀市教育委員会『丸亀市埋蔵文化財発掘調査報告第23冊 平池南遺跡 ケーズデンキ店舗建設に伴う発掘調査報告書』2016



第8図 周辺の主な遺跡地図 (基図は国土地理院基盤地図情報を使用)



第9図 中の池遺跡 遺構集成図（信里芳紀氏作成、基図は丸亀市都市計画図を使用）



第10図 遺跡付近10cm等高線図（丸亀競技場工事用平面図の標高値より作成）

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

調査対象範囲は、構造物等により遺構に影響が及ぶ範囲に絞られたため、競技場のスタジアム部分とその周囲に敷設される水路部分である。これらのうち、西側では瓦製作のための粘土取りにより遺構面が残存していなかったため、調査対象からは除外された個所がある。

調査地区の設定およびその標示は、調査対象地の中央付近に位置する国土座標第IV系の $X = +139.6$ 、 $Y = +26.6$ を基点 (I-12) とし西に 30° 振った方向で 20 m 方眼の調査区を設定した。調査区の標示は調査対象地北西角を基点として東に 1, 2, 3、南に A, B, C と記号を付し、例えば A-4 のようにグリッドを標示した。なお、平成 12 年に国土座標系が日本測地系から世界測地系に変更されたことにより、基点の座標値は $X=139977.6061$ 、 $Y=26359.0022$ となった (国土地理院 TKY2JGD による)。本報告書においては、座標値はすべて世界測地系に変換している。

調査手順については、遺構面もしくは遺構面直上の包含層までの堆積層を重機によって除去し、以下、人力によって調査を行った。平面図は主にヘリコプターによる航空写真測量で作成し、一部の平面図と断面図のすべては手書きで作成した。

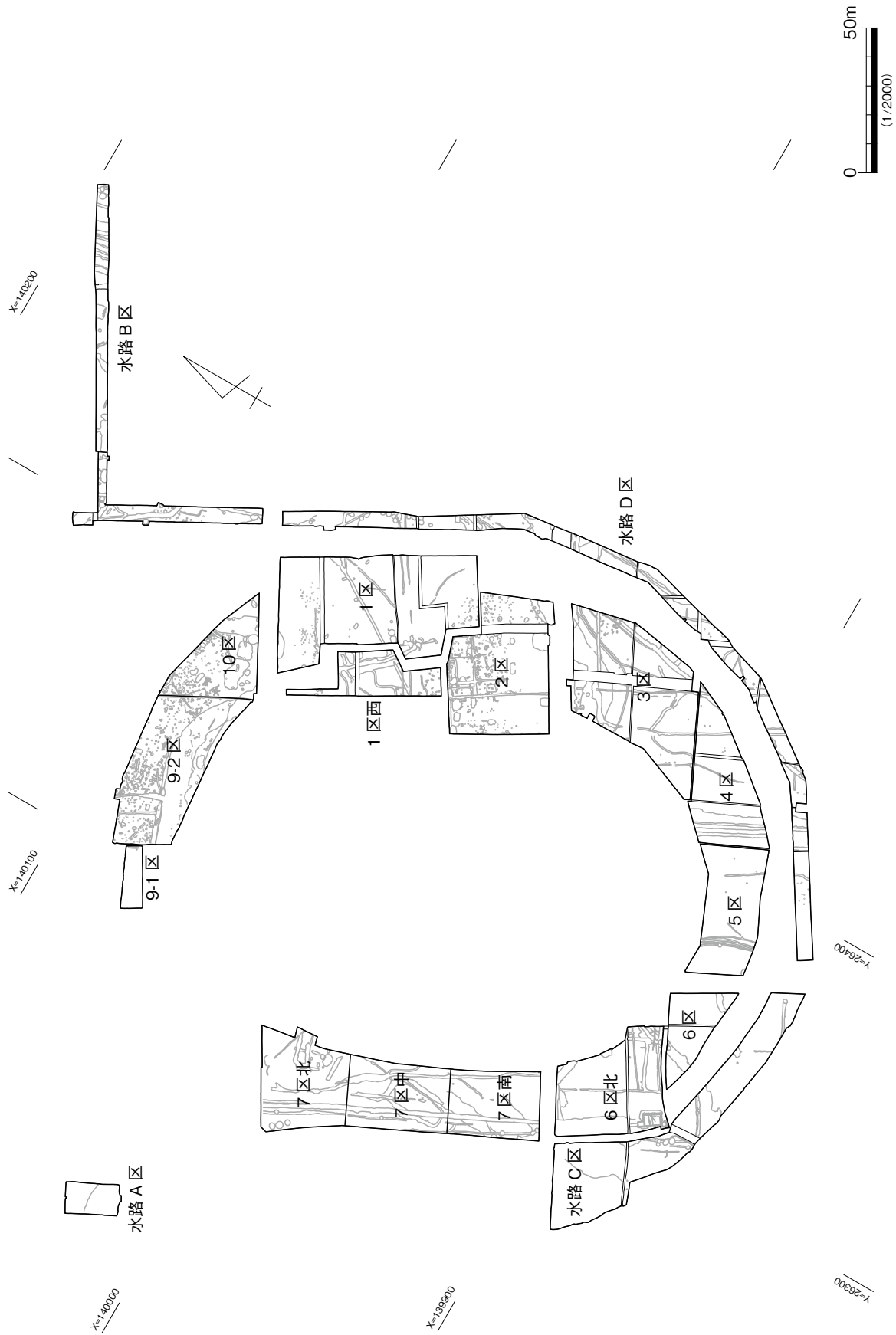
調査時に各調査区名を第9図のように設定し調査を進めたが、本報告においては、第10図のように調査区をⅠ～Ⅶ区に大別し、各々の調査区で遺構番号を1からふり直し、例えば SK Ⅲ 01 のように表示する。報告は、時代順、調査区順で行っている。

第2節 土層序

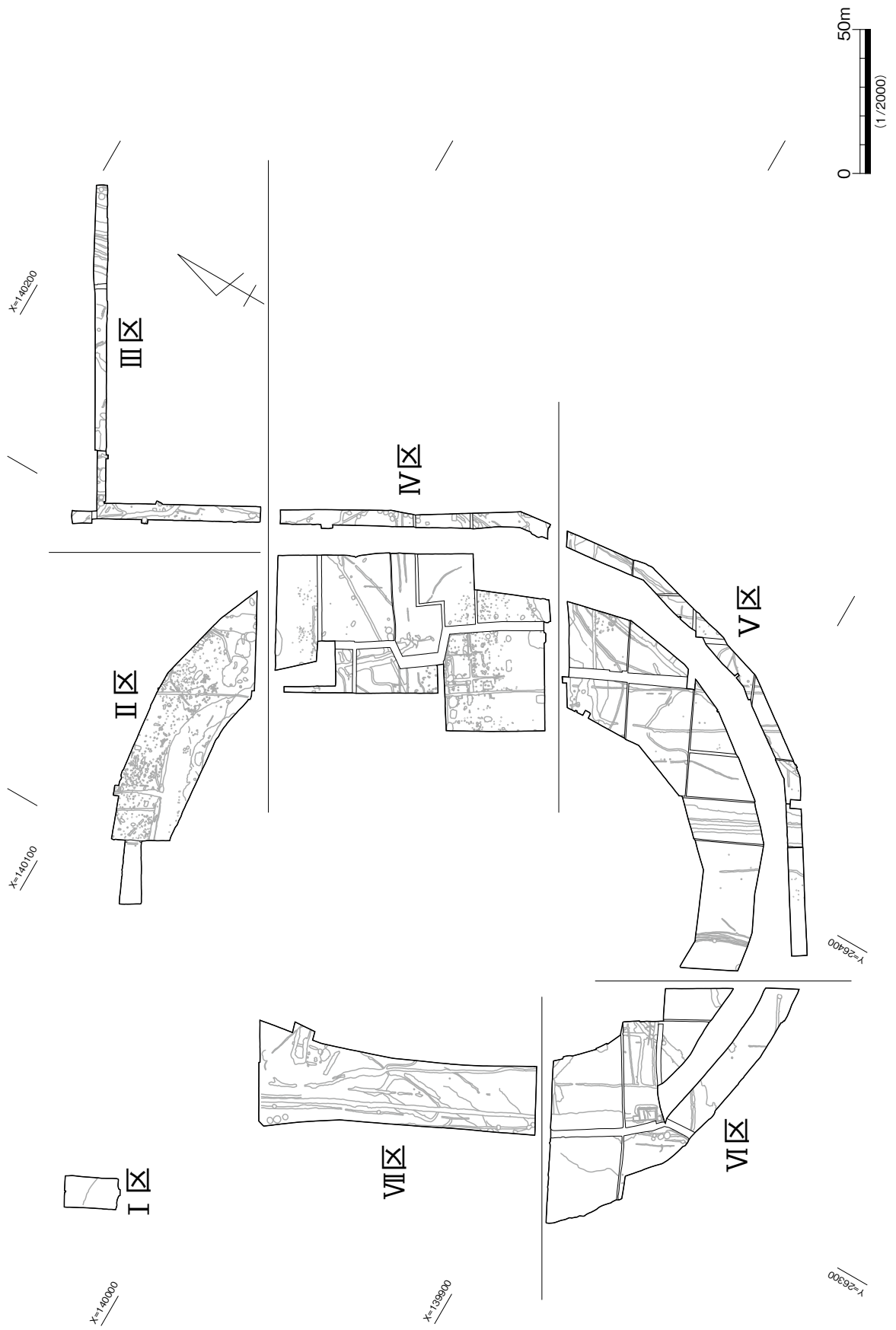
調査地は、土器川及び金倉川の形成した緩傾斜の扇状地にあたる。Ⅱ区の北半には耕作土の下に径 10cm 以下の砂岩亜円礫よりなる砂礫層が現れるが、扇状地上の旧中州にあたる微高地と考えられる。砂礫層はⅥ区西端でも確認されるが、この層が地表面にまで影響を与えるような盛り上がりがあるかどうかは不明で、調査区の大半は、扇状地上に多数存在する旧中州の間を埋める中州間低地に位置するものと考えられる。中州間低地には粘土やシルトといった細粒物質による堆積層がひろがり、さらに、この堆積層を切れ込んで河道が流れている。

第8図は、調査着手前の水田の標高をもとに引いた 10cm 間隔の等高線図である。この地域は焼き物の原料として粘土取りが行われた地筆が多いことから、現地表面の微起伏が明確に旧地形を表現するものでない可能性があるが、調査地は南から北に緩やかに下り、Ⅵ、Ⅶ区は等高線が尾根状に張り出す微高地でその両側に旧河道、Ⅱ区は南北方向の微高地、Ⅳ区も暗示的であるが微高地にあたり、Ⅱ区とⅣ区の間およびⅣ区の東側に旧河道の存在を暗示する凹地が予察される。以下に各々の調査区の堆積状況と遺構との関連について記述する。

Ⅵ、Ⅶ区は、粘質土やシルト質土層が 10～20cm ほどの厚さでほぼ水平に堆積し、これを切り込むように旧河道が流れている (第11図)。旧河道の位置は、10cm 等高線に現れた東側の旧河道に整合する。この旧河道は一部に径 4cm 以下の砂礫層の堆積が見られるなど、アクティブな環境下にあったと見られる。以上の堆積層中には遺物、示準層 (火山灰層等) は認められず、形成の年代は不明である (したがっ



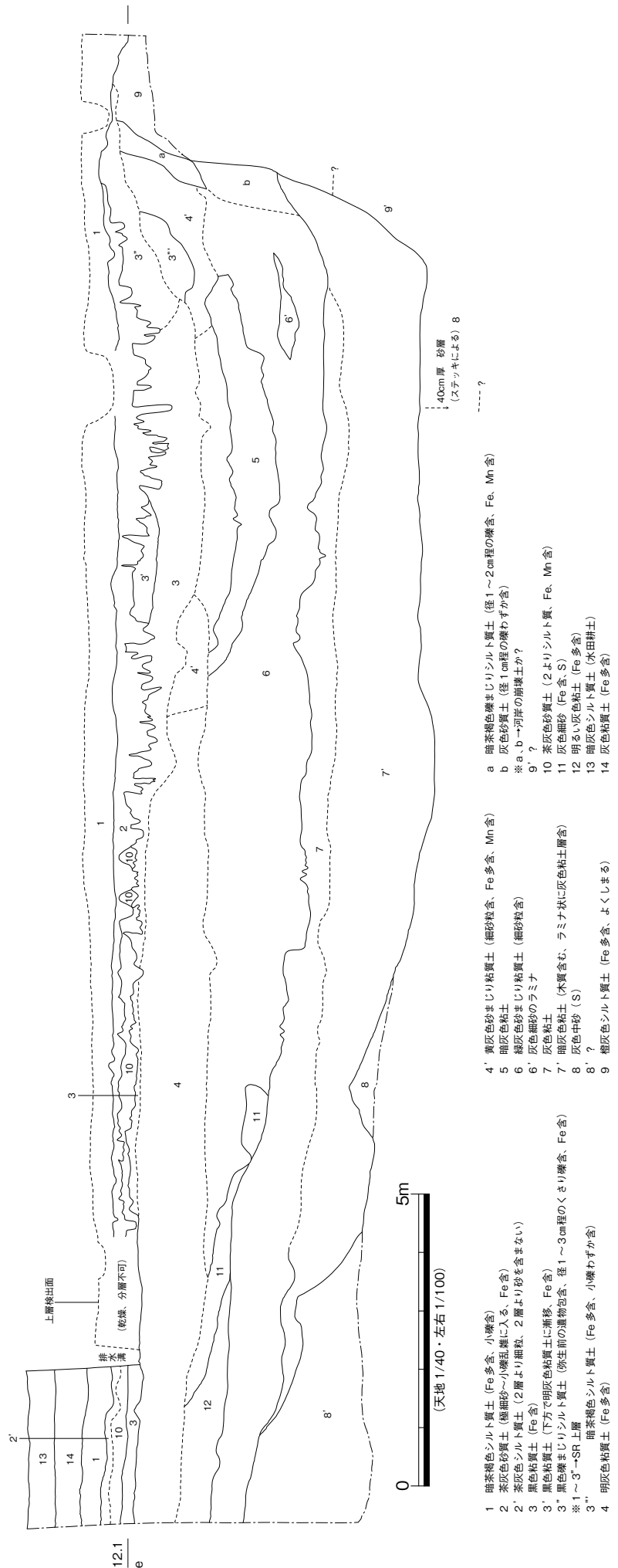
第5図 調査区割図



第6図 報告区割図

て、この旧河道については一部を全掘したものの大半は弥生時代後期の包含層までの調査に留めた)。旧河道の埋没する最終段階は 1 m ほどの深さの凹地を黒色粘質土が埋めている。この層は弥生時代後期のものと考えられる。本層の上面は顕著な凹凸が見られ、耕起のような人為的な痕跡が認められるほか、畑の畝と考えられる遺構、溝状遺構等があり、埋没の過程で土地利用されていた。なお、微高地にあたる部分には弥生時代中期、後期の遺構があり、何らかの区画溝と考えられる遺構、後期の土器棺墓を検出している。

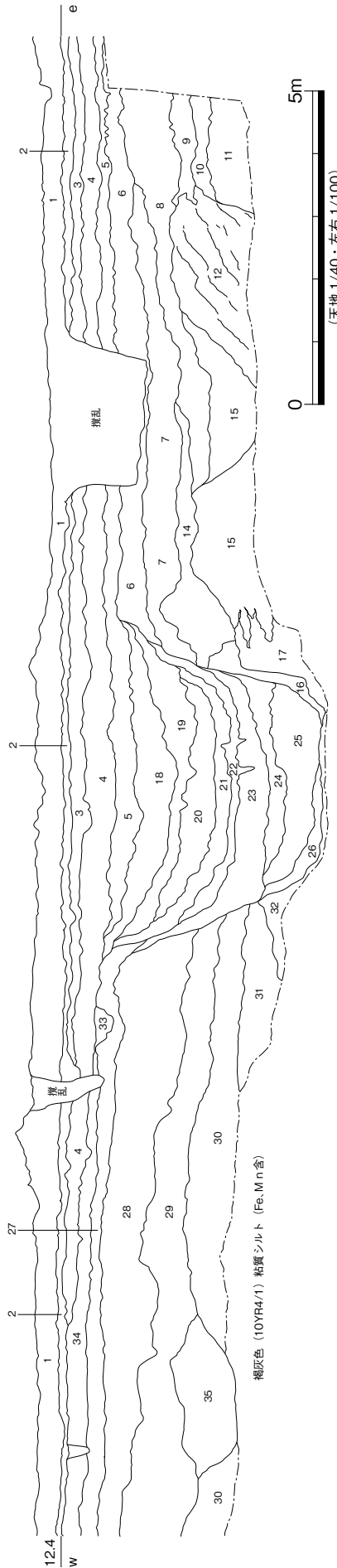
Ⅱ区 (第 12、13 図) は、前述したとおり旧中州と考えられる砂礫層の盛り上がり認められる。この部分を中心に弥生時代前期、弥生時代後期の多数の遺構を検出した。この南側は、凹地となり縄文時代晩期の遺物を包含する。広義の旧河道埋土と把握される。この河道が埋没したあと、同じ凹地に弥生時代前期の河道が掘り込まれる。この流路の続きの可能性があるⅣ、Ⅴ区の SR Ⅳ 03 ~ Ⅳ 05、SR Ⅴ 01、Ⅴ 02 でも、縄文時代晩期の河道が埋没したあとに弥生時代前期の河道が掘り込まれた状況が確認できる (第 14 図)。なお、縄文時代晩期および弥生時代前期の河道は、大きく蛇行する流路が復原でき、細粒堆積物上を



第 11 図 SR Ⅵ、Ⅶ 01 断面図

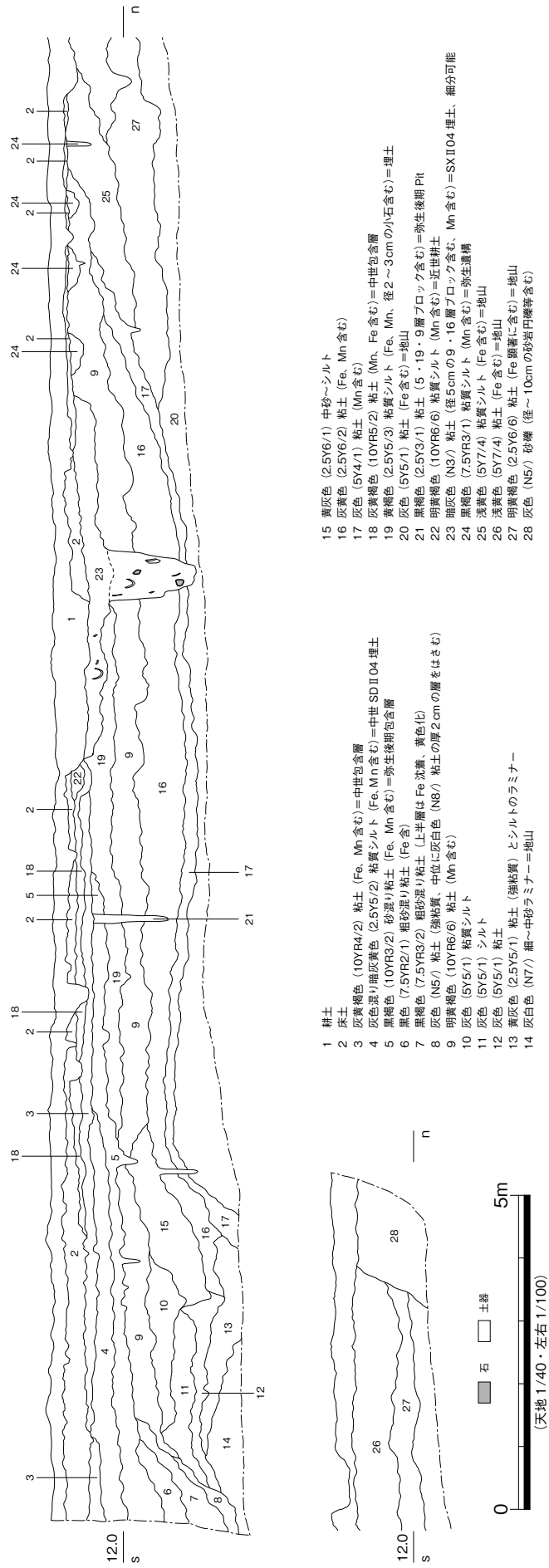
流下する河道の特徴と考えられるが、これについてはまとめの項で改めて触れる。なお、縄文時代晩期の遺物は、晩期中ごろから晩期末葉までの時期幅があり、また、弥生時代前期の遺物とも明確に分離して取り上げられず、混在する様相を呈している。

IV区も細粒堆積物の水平堆積が見られるが、耕作土下に①暗灰色シルト質土層・②灰色砂混じりシルト質土層・③灰色シルト質土層・④明灰色砂混じりシルト質土層の順に堆積するところがある。①層と③層は②、④層が土壌化等により変質したものと理解しているが、①、②層には弥生時代後期以降の遺物を包含し、③層以下が地山となる。平面的な範囲は明確にできなかったが、IV区には局所的に弥生時代後期の包含層が堆積している。

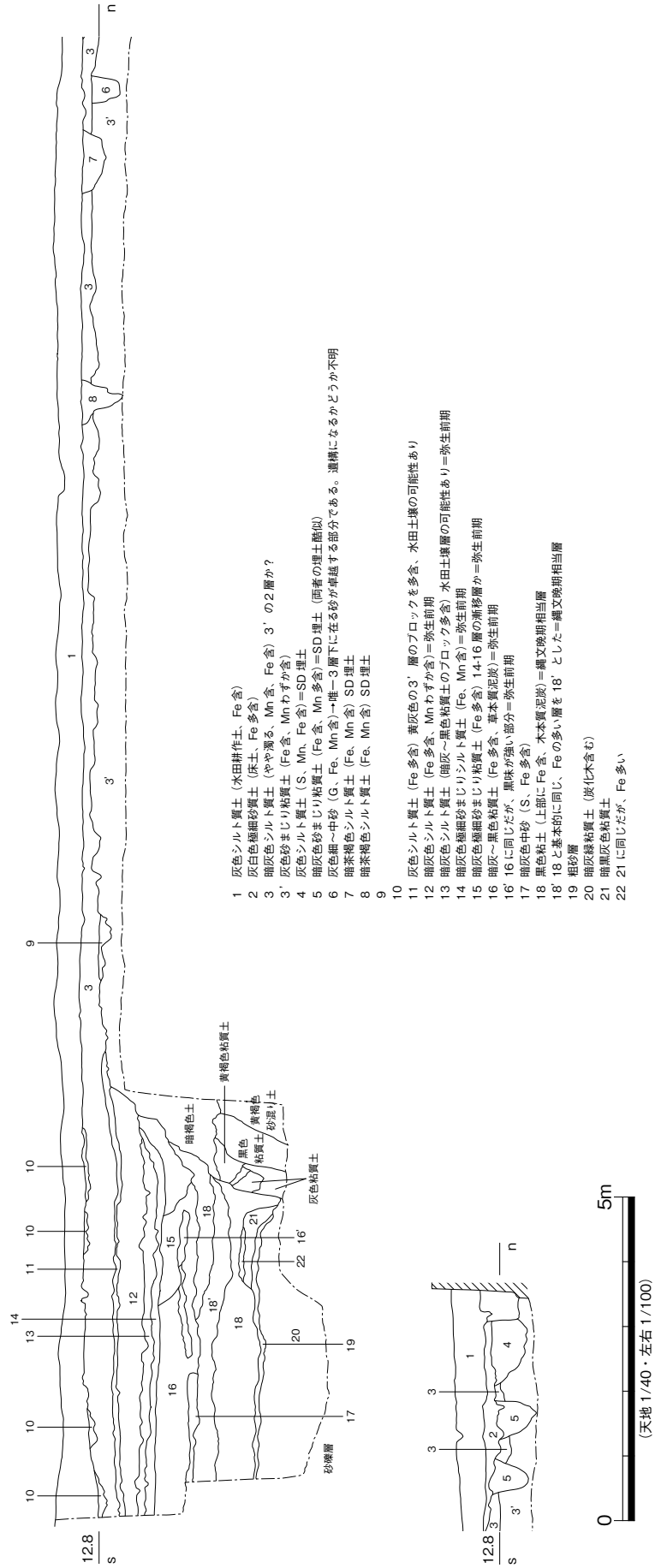


- | | |
|---|--|
| 1 粘土 | 16 灰白 (N7) ~黄灰 (10BG6/1) 色、細~中砂 |
| 2 床土 | 17 灰白 (N7) ~灰 (N6/) 色、砂礫 |
| 3 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘土 (Fe 含) 中世包含層 | 18 褐色 (10YR4/6) 混じり、黒褐色 (10YR3/2) 砂混り粘土 (径1~30mmの小石含、Fe、Mn 含、土器多) |
| 4 明褐色 (2.5Y6/6) 粘土 (Fe、Mn 含) 中世包含層 | 19 黒褐色 (10YR3/1) 砂混り粘土 (Mn 顕著、土器多) |
| 5 暗褐色 (10YR3/4) 粘土 (Fe、Mn 含) 弥生後包含層 | 20 黒褐色 (10YR3/1) 混じり、褐色 (7.5YR4/4) 砂混り粘土 (粗砂混、径2~3mmの小石少混、Mn 顕著、土器少) |
| 6 黄褐色 (10YR7/8) 粘土 (Mn 含) ベース | 21 褐色 (7.5YR6/8) 粗砂混り粘土 (鉄結實、22層ブロック状に含、土器少) |
| 7 黄褐色 (10YR5/1) 粘土 (Fe、Mn 含、7m以東ではシルト質となる) 近似 | 22 灰白色 (10YR7/1) 粘土 (Fe 含、強粘質、上・下面に暗灰色 (N3/) 粘土が部分的に伴う、土器なし) |
| 8 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土 (Fe、Mn 含、7m以東ではシルト質となる) 近似 | 23 黄褐色 (5B5/1) 砂混り粘土 (クライ化) |
| 9 黄褐色 (10YR5/1) シルト (Fe、Mn 顕著) | 24 黄褐色 (5B5/1) 砂混り粘土 (クライ化) |
| 10 黄褐色 (10YR6/1) シルト質粘土 | 25 暗青灰色 (5B4/1) 砂混り粘土 (クライ化、液黄色 (2.5Y8/3) 粘土ブロック顕著に含、径5~15mmの小石少量含、土器少、植物遺体多含) |
| 11 黄褐色 (2.5Y7/4) 細砂 (植物遺体多含、Fe) | 26 灰白 (N6/) 細砂、青灰色 (5B5/1) 粘土、ラミナー |
| 12 オリブ黄 (5Y6/3) 極細砂・灰白色 (N7/) 細砂・青灰色 (10BG6/1) 細~中砂ラミナー (植物遺体多含、Fe) | 27 明褐色 (10YR6/8) 粘土 (Fe 含) 縄文包含層 |
| 13 灰白色 (N7) 細砂・青灰色 (10BG6/1) 細~中砂・灰色 (5Y5/1) 粘土 (植物遺体多含) のラミナー (Fe 含) | 28 黄色混じり灰色 (5Y6/1) 粘土 (ややシルト質、Fe、Mn 含) |
| 14 灰白色 (10YR5/1) シルト (やや粘性あり、Fe、Mn 顕著、13.5m以西で細~中砂ラミナー状に混) | 29 黄色混じり灰白色 (10YR7/1) 粘土 (Fe、Mn 含) |
| 15 淡黄色 (2.5Y7/4) 細砂 (植物遺体多含)、灰白色 (N7/) 細砂・灰白色 (5Y7/1) 中~細砂ラミナー (Fe 含) | 30 29層と同じ、29層より粘性強い (Fe 含) |
| | 31 灰白~黄褐色 (10YR8/6) 粘土 (強粘質、Fe 顕著) |
| | 32 緑灰色 (5G6/1) 粘土 (Fe 含、強粘質) |
| | 33 灰褐色 (10YR4/2) 粘土 (Fe、Mn 含) 遺構埋土 |
| | 34 黄色 (2.5Y8/6) 粘土 (Fe、Mn 含) |
| | 35 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土 (ややシルト質、Fe、Mn 含) |

第12図 II区北壁断面図



第 13 図 II 区西壁断面図



第 14 図 IV 区西壁断面図 (部分)

第3節 遺構・遺物

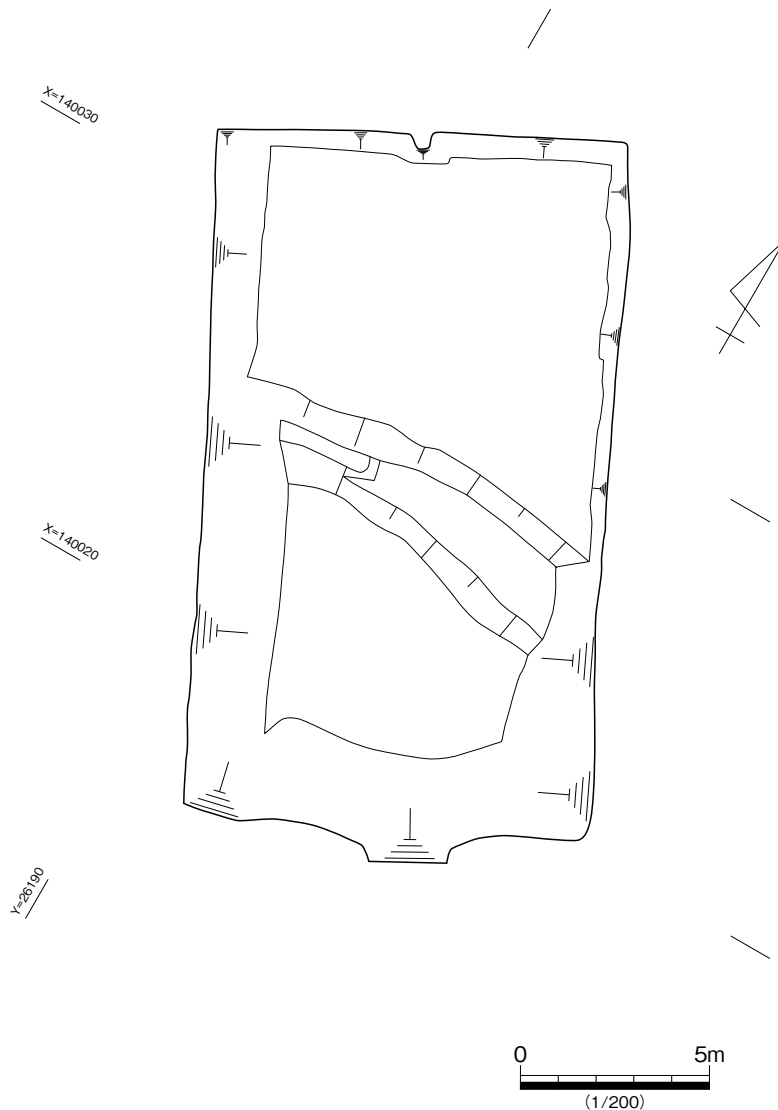
1 縄文時代～弥生時代の旧河道（第17図）

I 区 旧河道

SR I 01

調査対象地の西北端の東西11m、南北18mの調査区で検出した旧河道（第15図）である。この調査区は、粘土取りの対象となったものの、目的とする土質とは異なる旧河道埋土が現れたために掘削を中止した結果、旧河道部分が掘り残されたものである。北岸のみを検出し南岸は調査区外となる。川幅は10m以上、深さ1m以上を測る。なお、近接する調査区からも60m近く離れているため、本遺跡で検出した他の旧河道との関係は不明である。

第16図2～5はSR I 01出土の遺物実測図である。2は、7層から出土した縄文時代晩期の深鉢、凹み底をなす底部の破片である。3は5層出土の弥生時代前期の甕、4は、7層出土のサヌカイト製の刃部を折損した打製石斧である。5は凝灰岩製と見られる垂玉である。自然礫においても孔のあいているものがあるが、本資料は下端を水平に磨き、両端から2cmほどの径の窪みをつくり、最終的に5mmほどの孔で貫通させており、ここに横位の擦痕が認められる。また、反対の面にも磨いた形跡があるほか、重力によって定まる石の上側の孔の縁に糸かけによると思われる窪みが見られるなど、遺物と判断される。出土遺物は僅少であるが、他遺跡の類例とも合わせて縄文時代後期から晩期に属するものとする。なお、垂玉については藤田富士夫氏（富山県教育委員会生涯学習課、平成7年当時）のご教示を得た。

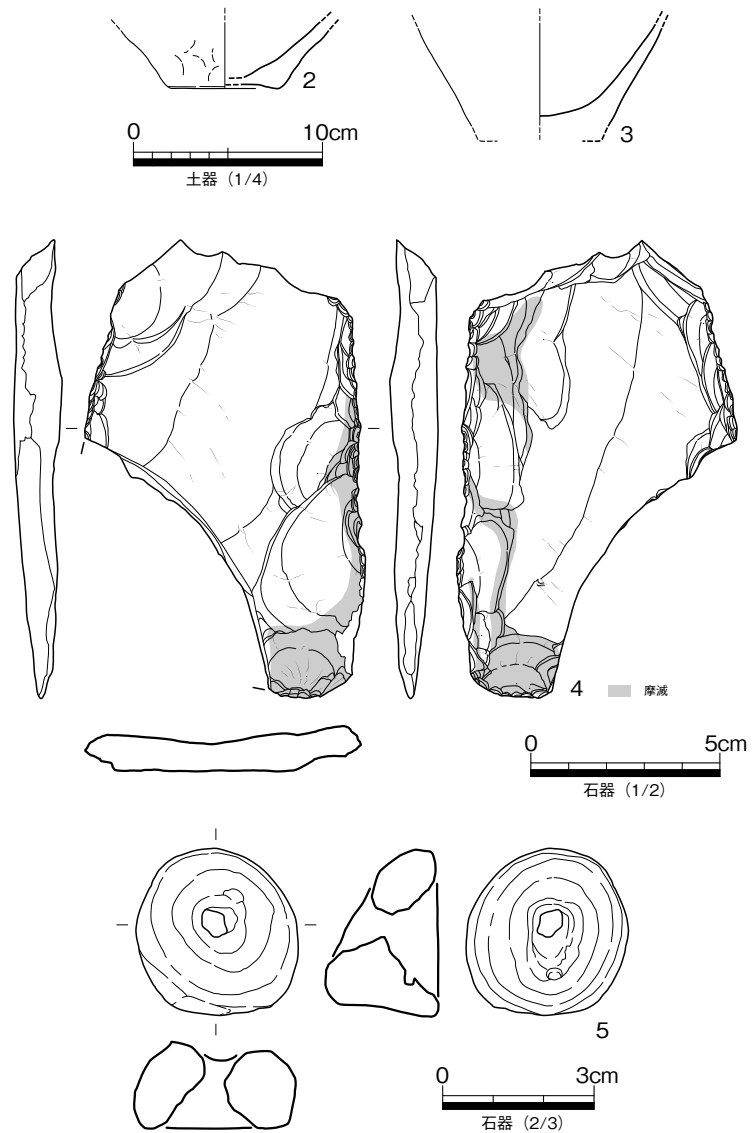
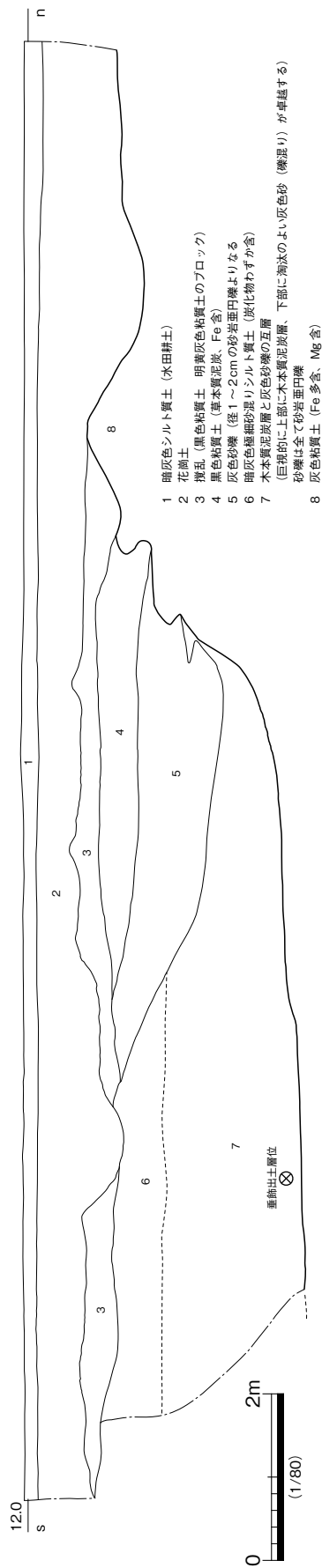


第15図 SR I 01 平面図

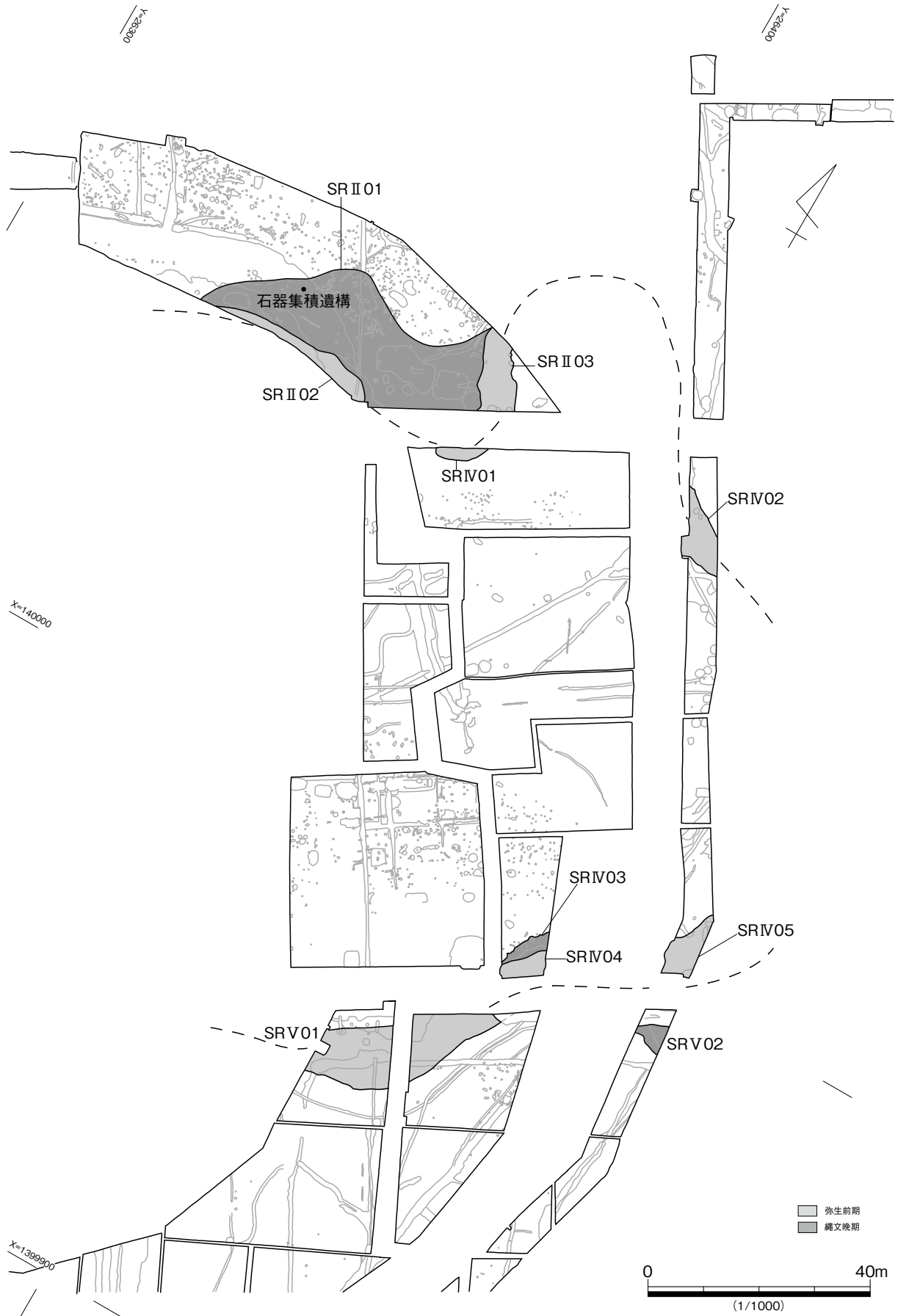
II 区旧河道

SR II 01

平成6年度調査では、II区で弥生時代前期に埋没する上層と縄文時代晩期に埋没する下層からなる旧河道（⑩区SR05）を検出した。しかし、調査最終段階になって弥生時代前期の遺構面の下に縄文時代晩期の包含層があることが判明し、旧河道との関係についての検討が平成7年度調査に引き継がれた。平成7年度調査では、弥生時代前期の遺構面が縄文時代晩期の遺物包含層の上面にあることを再確認し、この包含層の平面的な広がり調査した。そして、包含層の下面を第2面として調査を行った。さらに、平成6年度調査の旧河道（⑩区SR05）を再掘削し、断面観察を行った結果、縄文時代晩期の旧河道が埋没した後に、



第16図 SR I 01 断面図・出土遺物実測図



第 17 図 II、IV、V区縄文～弥生時代の旧河道 平面図

弥生時代前期の旧河道が縄文時代晩期の堆積層を切り込んで流れたことが確定した。以上のことを整理すると、概要報告に記す縄文時代晩期の遺物包含層は、縄文時代晩期の旧河道の埋土ということになる。以下はSR II 01として報告する。

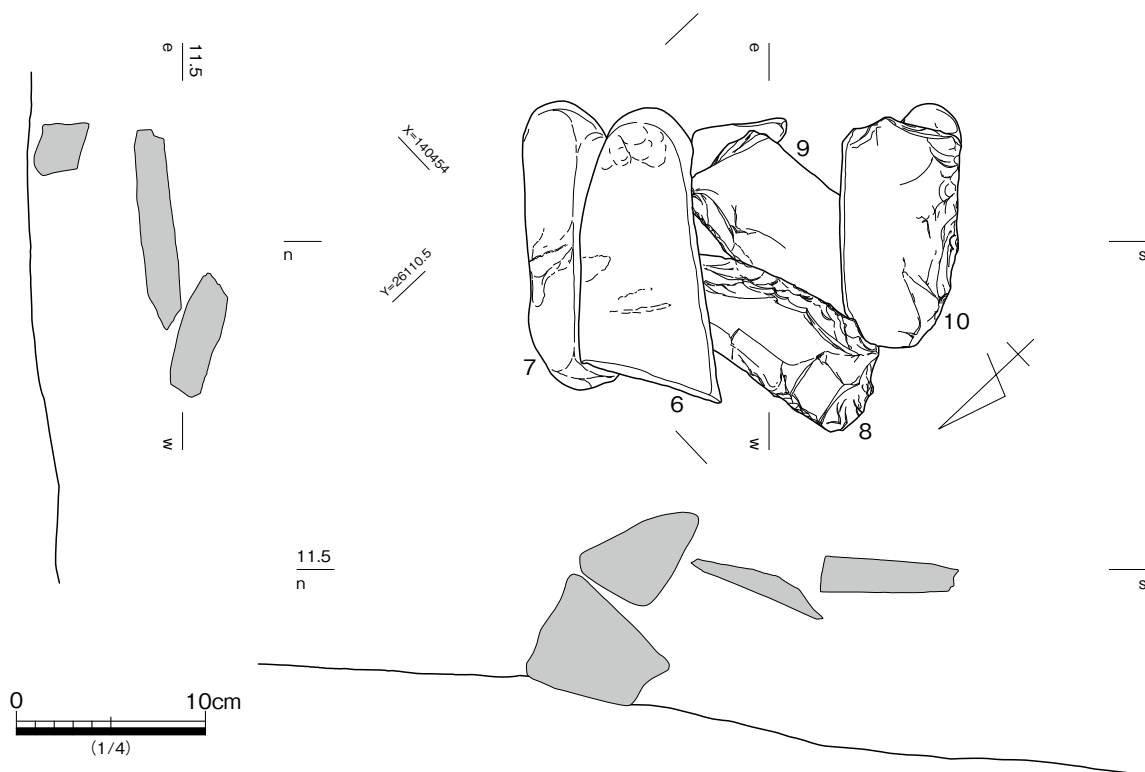
SR II 01は、II区北側に広がる砂礫層の南側に在り、南に向かって緩やかに落ち込んでいく。第17図は、SR II 01の範囲を示すものである。なお、平成6年度調査では、面的な調査に至らず、平成7年度に前年度調査区を再掘したこともあり、SR II 01の範囲を記録できなかった。このため両年度の航測図面の比較により一部範囲を推定している。

SR II 01の川底からは、平面形態の整わない落ち込み、風倒木と思われるものが検出されている。このうち明確な遺構と考えられるものが石器集積遺構である。

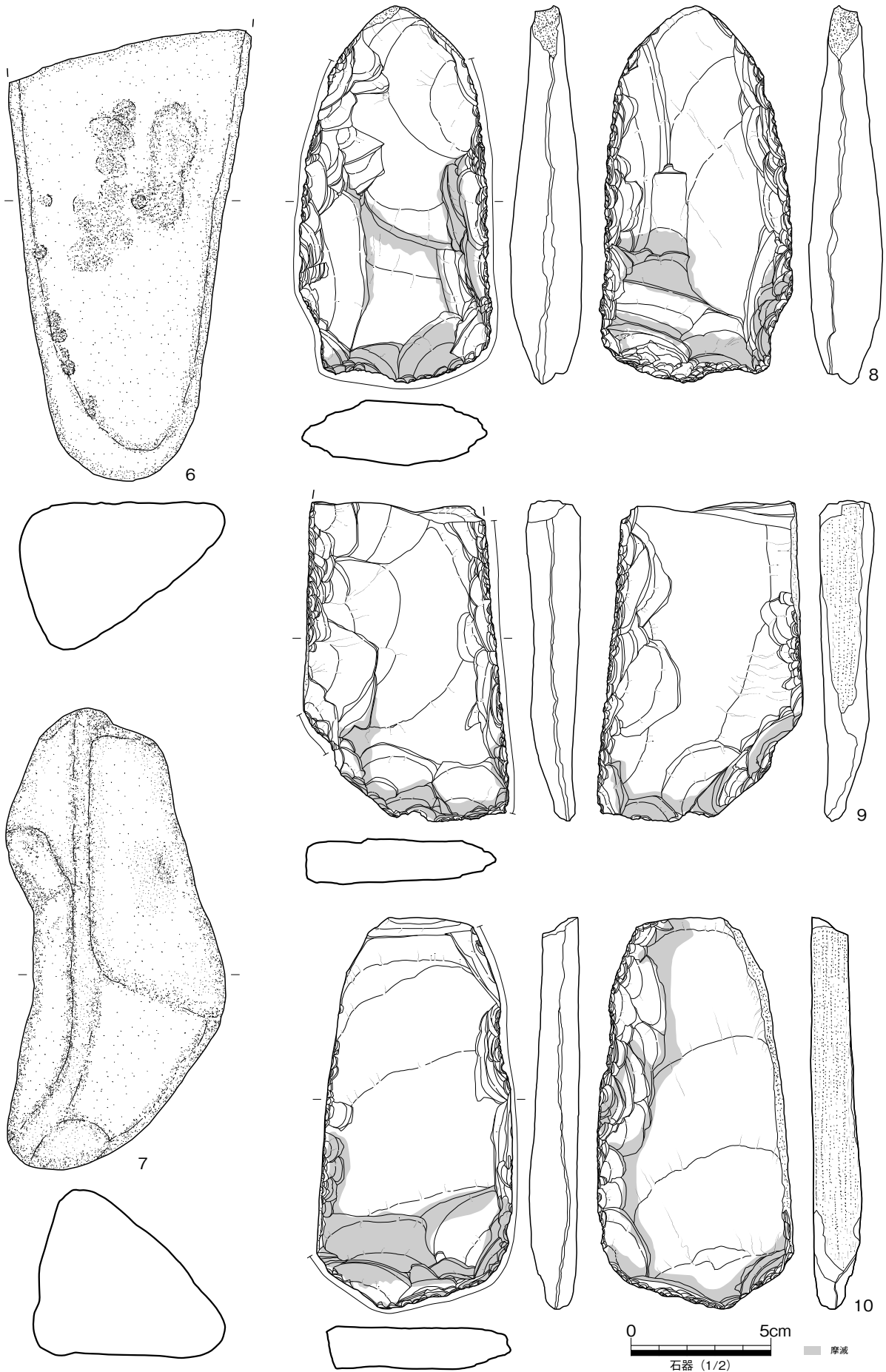
石器集積遺構（第17図）

SR II 01の埋土からは、約40点の石器・剥片が出土した。これらは、大半が1点ずつ散在した状況で出土したが、石器集積遺構（第18図）は、3点のサヌカイト製打製石斧と2点の自然石が折り重なるように集中して検出したものである。検出状況は、2点の自然石が長軸を揃えて重ね置かれ、その西に接して3点の打製石斧が重ね置かれている。遺物の配置自体に意図があるかどうかは不明であるが、明らかに人為的に集積された状況を示している。

第19図6、7は砂岩亜円礫である。6が上、7が下に重なっていた。概要報告では叩き石と報告しているが、明瞭な敲打痕は認められないため自然の礫と考える。8は完形の打製石斧である。基部は礫面を残し、側縁は敲打により整形され階段状剥離と刃潰れが顕著、刃部は使用に伴うと考えられる刃潰れと折損が認められる。さらに刃部を中心に使用に伴う表面の摩滅が認められる。9の打製石斧は基部



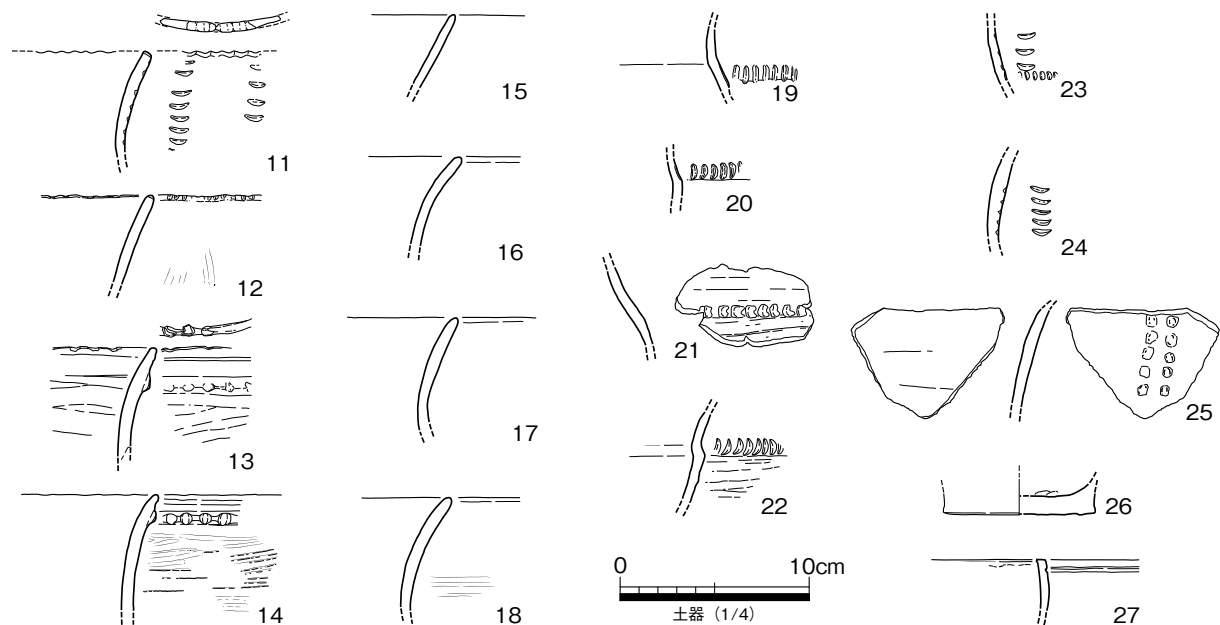
第18図 石器集積遺構 平・断面図



第 19 図 石器集積遺構 出土遺物実測図

を折損する。9も一側縁は礫面を残したものである。刃部は不整形であるが、表面の摩滅が見られるため、折損しながら使用され続けたものと観察する。10の打製石斧も完形である。一側縁は、厚さ15mmほどの礫面をそのまま利用し、もう一側縁は一面のみ調整を行って整形している。刃部には使用に伴うと考えられる刃潰れが見られ、刃部を中心に表面に摩滅が見られる。

9は基部を折損しているが、実際の使用に不都合は無いと見られるから、石器集積遺構は、使用可能な状態の石斧を何らかの目的で集積したものと考えられることができる。



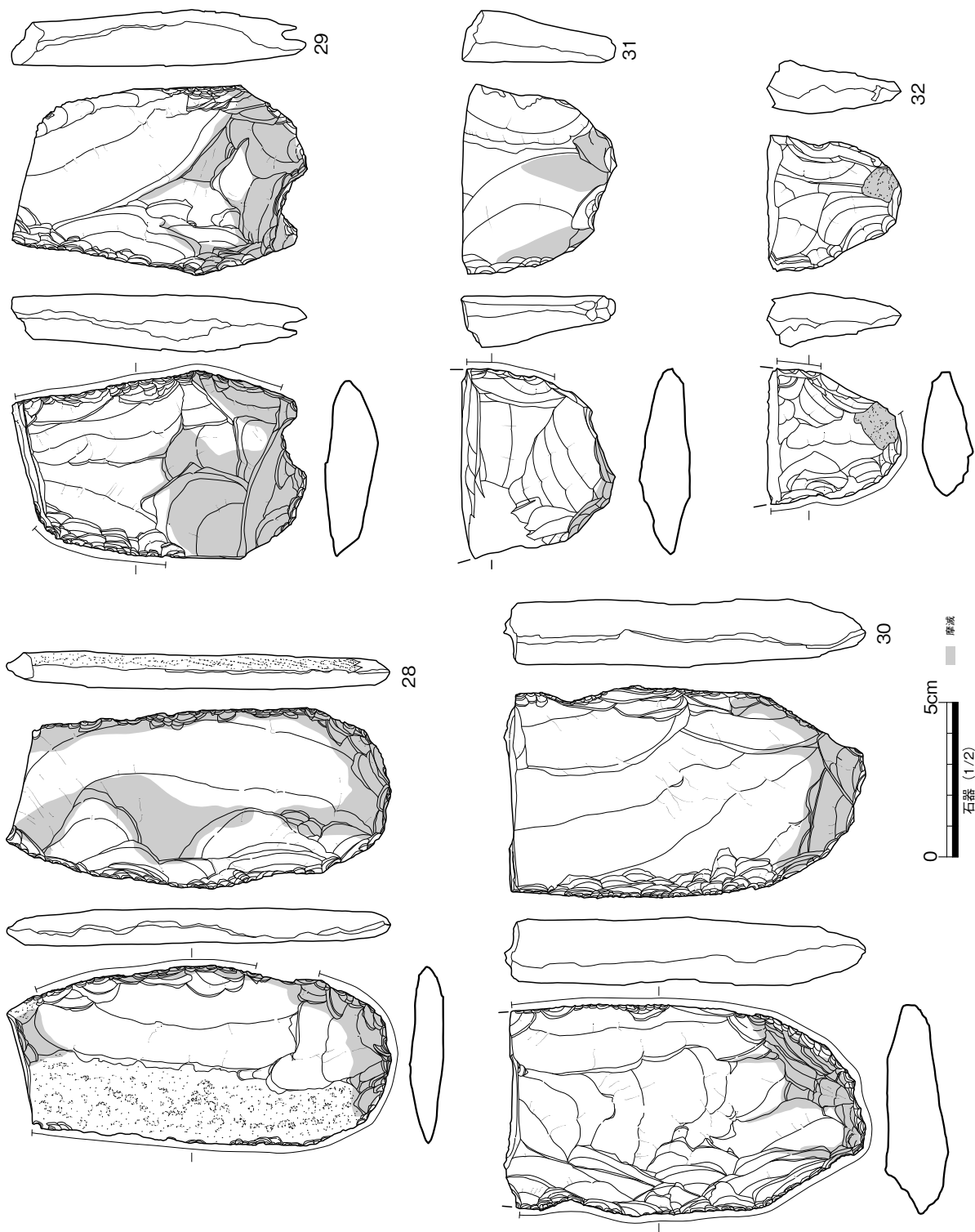
第20図 SR II 01 出土遺物実測図(1)

第20～23図は、平成7年度調査におけるSR II 01から出土した遺物である。

11～26は、縄文土器深鉢である。11は外湾する口縁部で、端部に強い刻み目、頸部に縦方向の爪形の刺突文を施している。12は外湾せずに直線状の口縁で、端部に刻み目を施している。13、14は外湾する口縁で端部に刻み目を施す。また、端部よりわずかに下がった位置に刻み目を施した突帯を付す。13は粘土紐の内傾接合法のわかる資料である。15～18は、端部を丸くおさめる小破片、摩滅のため調整不明。19～22は、口縁と胴部の境界付近の破片である。19、20は爪形の刺突文が施される。21は「コ」字形の押引文、22は爪形の刺突文が施され、調整は施文より上がナデ、下が貝殻条痕である。23は縦方向の爪形の刺突文とその下の水平方向の長方形の刺突文が施された小破片、24は縦方向に爪形の刺突文を施した小破片、25は棒状工具による縦方向の2列の刺突文が施された小破片である。26は円盤状をなす平底の底部片である。

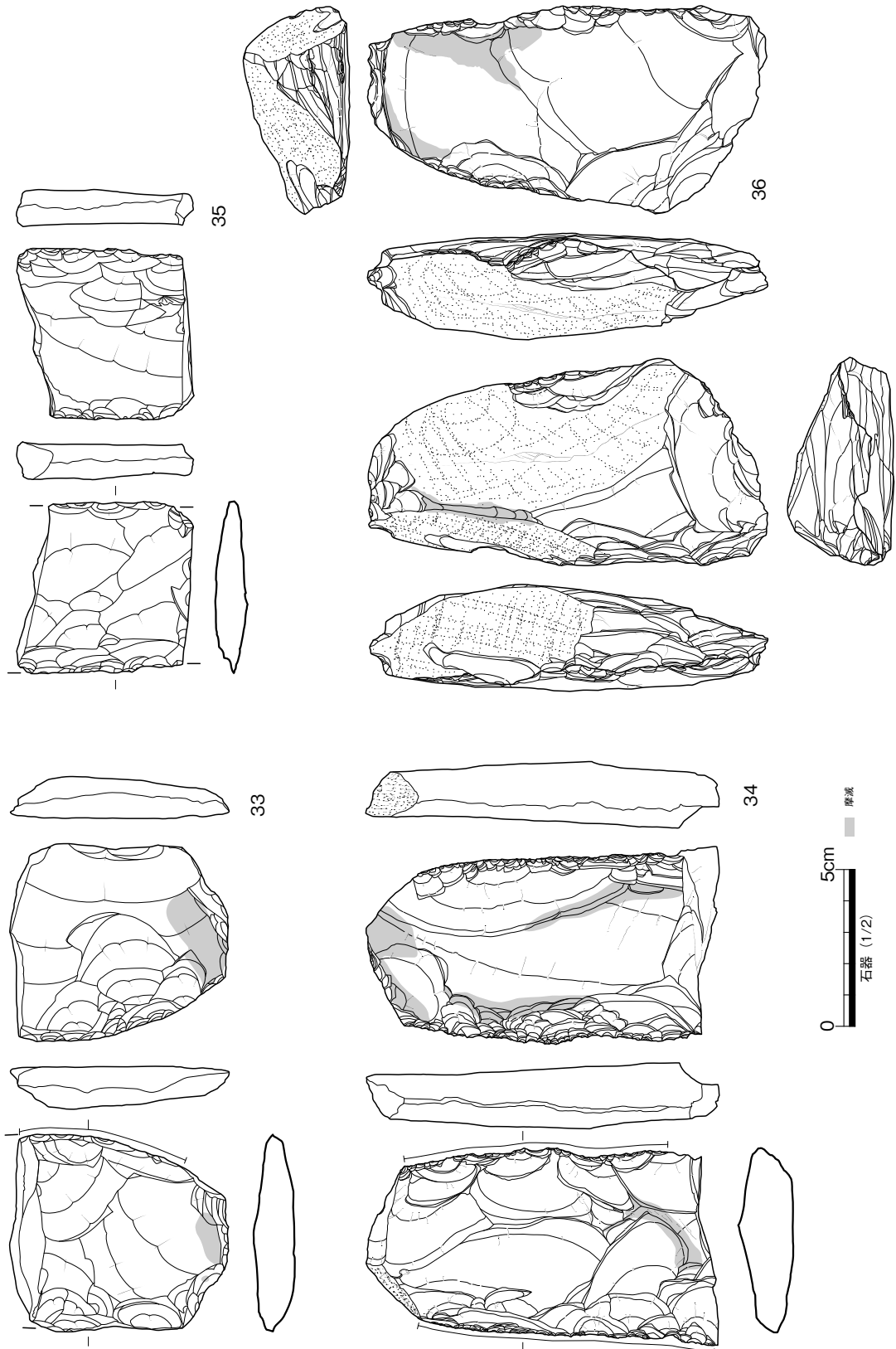
27は碗形をなす浅鉢と考えられる。外面に一条のヘラ描き沈線が巡る。

以上の土器は、13と14が第12図の5層から出土、12と20が9層から出土したものである以外は包含層として取り上げられている。5層出土のものは突帯文期、9層は突帯文期以前の土器と考えられ、土器にも層位にも前後関係が把握できるが、全体としては縄文時代晩期中半から後半の土器が混在している。



第 21 図 SR II 01 出土遺物実測図 (2)

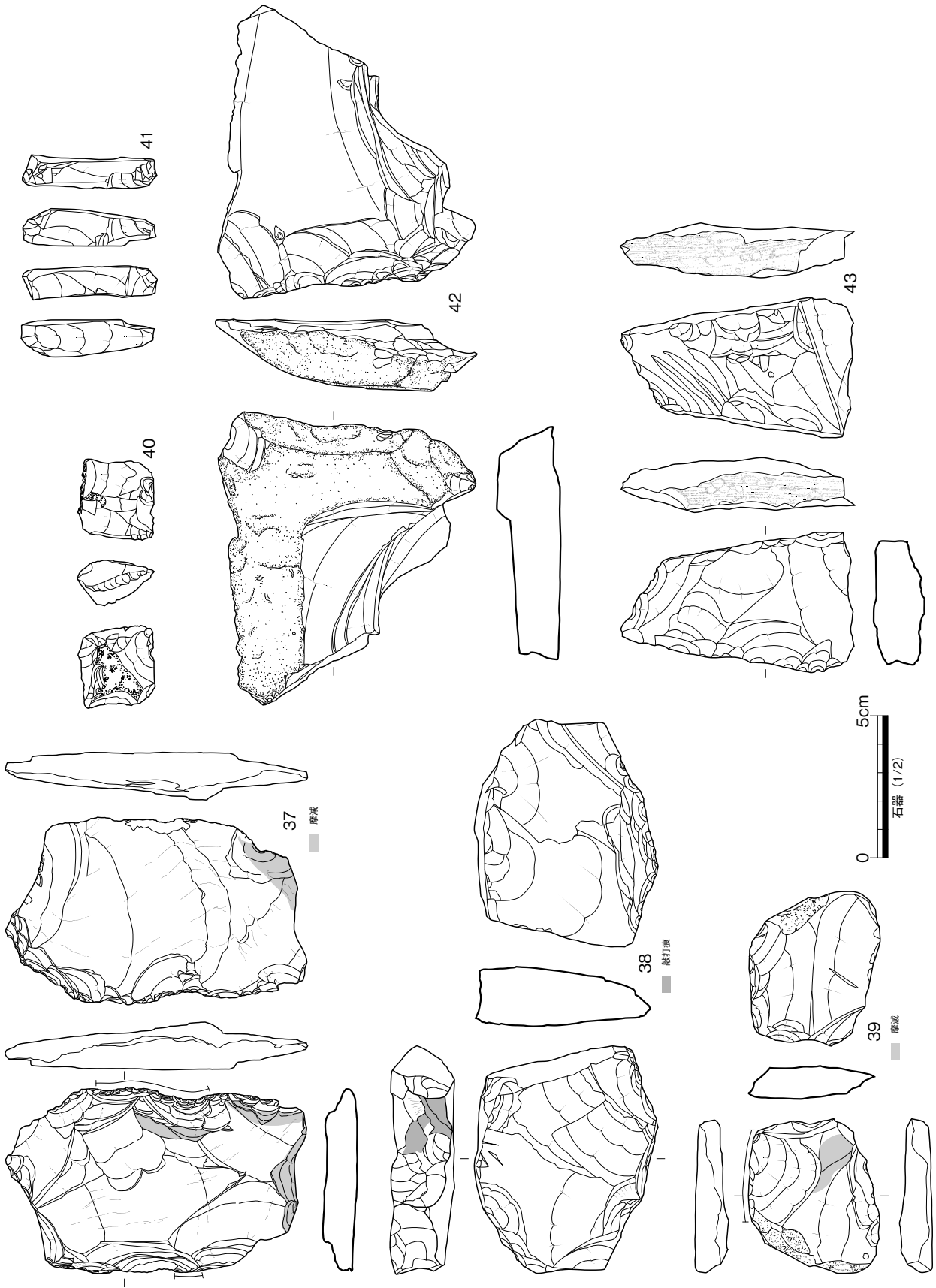
28～35は打製石斧である。基部や刃部を折損したものや、使用による擦痕や磨滅するものが多い。36は、一側縁はある程度整形されているが、もう片方は剥離を試みて途中で放棄したような様子が伺えることから打製石斧未成品とした。37は磨滅を刃部と捉えると打製石斧となるが、全体的に形が整わず2次加工のある剥片とした。38～41は楔形石器である。背部に敲打痕、刃部に微細な階段状剥離



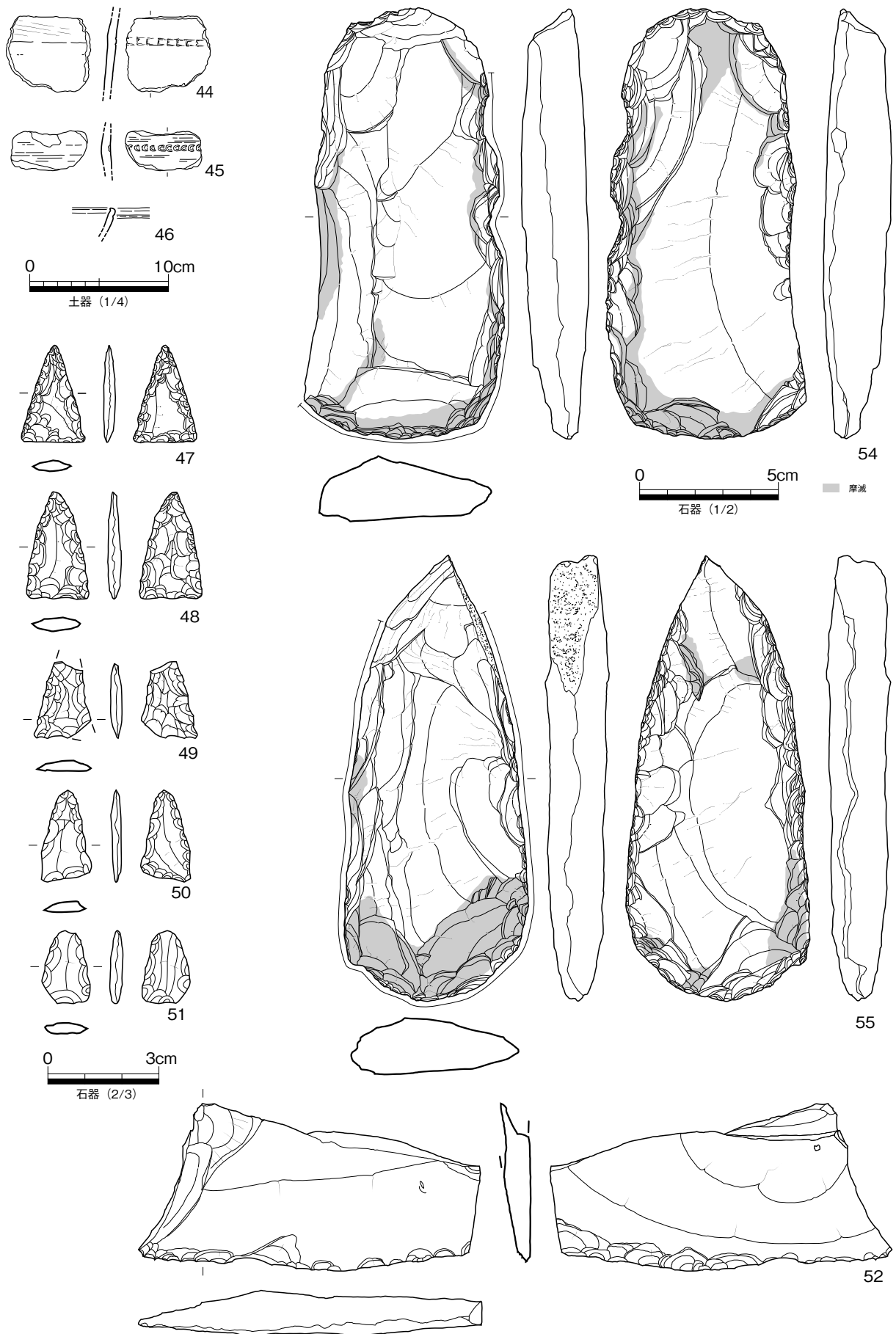
第22図 SR II 01 出土遺物実測図(3)

を認めるものが多い。42、43は石核とした。

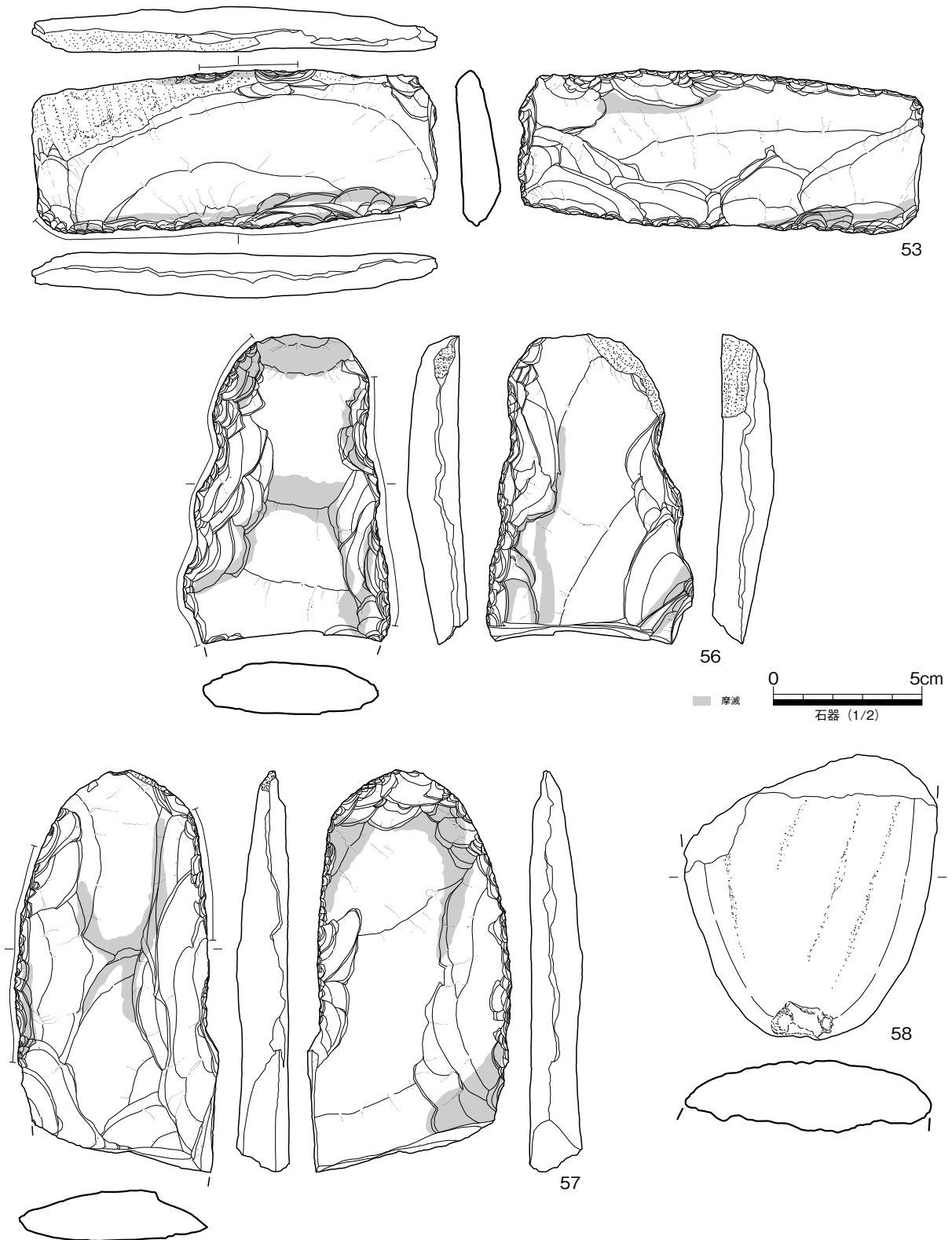
第24、25図44～58は、平成6年度調査の際に、包含層として取り上げた遺物の実測図である。



第 23 図 SR II 01 出土遺物実測図 (4)



第24図 SR II 01 出土遺物実測図(5)



第 25 図 SR II 01 出土遺物実測図 (6)

44 は摩滅のため不明瞭であるが、「コ」字形の押引文を施す小破片、45 は半截竹管文による押引文を巡らす小破片である。46 は口縁部直下の内外面に 1 条のへら描き沈線を巡らす浅鉢の小破片である。

47 ～ 51 は、平基式の石鏃である。50、51 は風化する。52 は削器、53 は石庖丁である。53 は刃部に摩滅、刃潰れが認められる。54 ～ 57 は打製石斧である。いずれも使用による摩滅が見られる。このほか、

結晶片岩製の石棒の残欠（58）が出土している。

なお、この包含層は後述の平成6年度調査⑩区 SR05 の縄文時代晩期相当層（SR II 01 平成6年度調査分）より古いと考えられるが、明確に把握できていない。

平成6年度に調査した⑩区 SR05 は、翌年度の調査で縄文時代晩期と弥生時代前期の旧河道に分離できることが判明したが、第26図 59～70 は、縄文時代晩期の旧河道に相当する堆積層から出土した遺物実測図である。59～66 は第12図の25・26層、67、68 は24層、69、70 は23層から出土した。

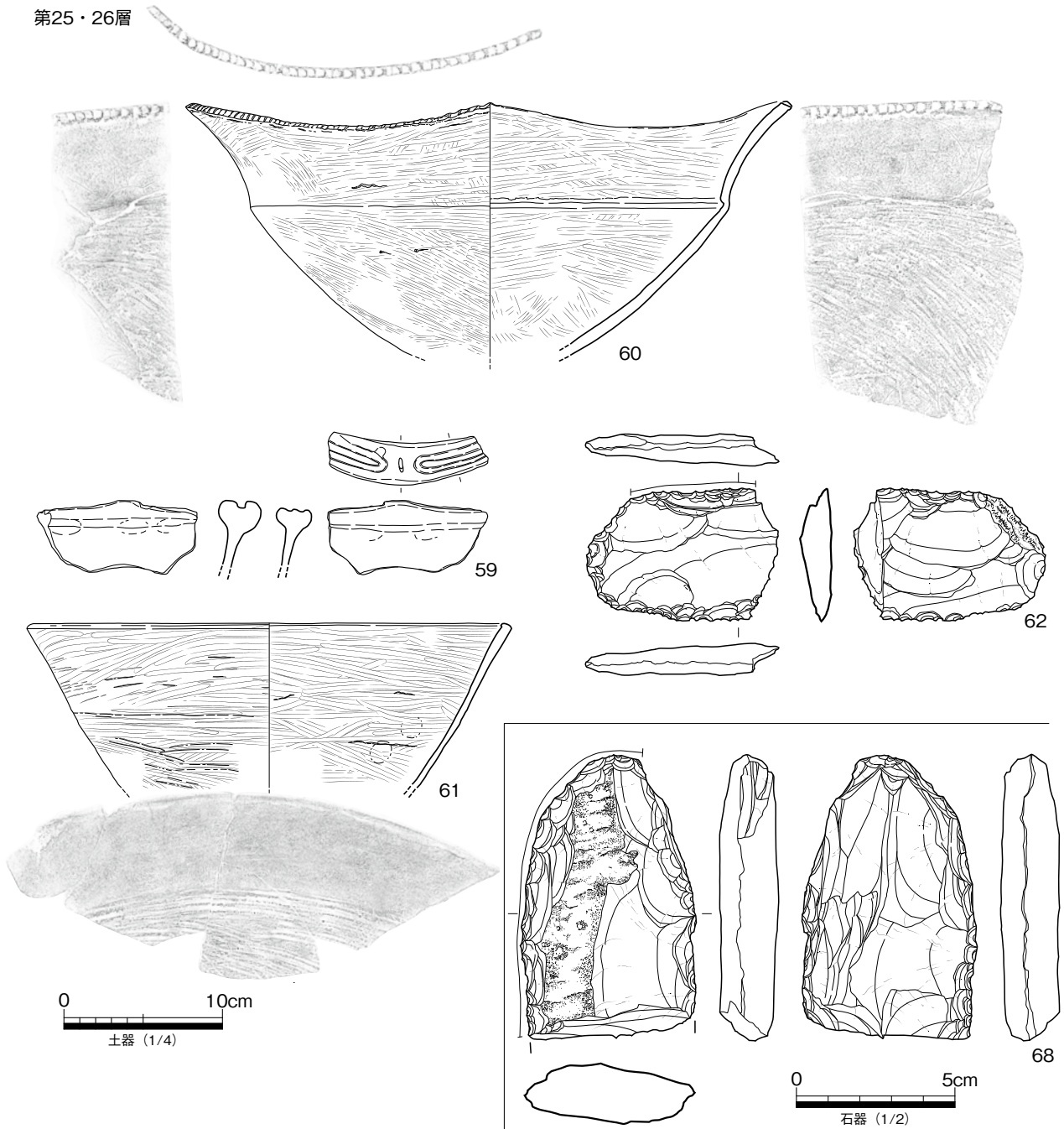
59 は縄文時代後期前半に属するいわゆる縁帯文土器である。波状口縁で、口縁部を玉縁状に大きく肥厚させている。口縁頂部に刺突文、両側に沈線による長円形の区画文をつくる。縄文の有無は摩滅のため不明である。60 は縄文時代晩期の浅鉢。鉢状の胴部から屈曲し外湾する口縁である。波状口縁で平坦に仕上げた端部に刻み目を施している。屈曲部の内面には凹線状の凹みをつくっている。口縁部外面はヘラミガキ、胴部外面は貝殻条痕、内面はヘラミガキである。61 の浅鉢は、屈曲を持たずにボウル状を呈する。口縁端部をわずかに内側に肥厚させている。外面は口縁付近がヘラミガキ、以下貝殻条痕、内面はヘラミガキである。60、61 は平井泰男氏による晩期Ⅲ b 期のものと思われる。62 は削器である。刃部にわずかに摩滅が認められる。一端は折損する。

SR II 01 の25・26層の下底部から小型の鋤状木製品が出土しているが、遺憾なことに水漬け保存中に経年劣化による保存容器のひび割れが生じ、遺物を乾燥させてしまった。概要報告では完形品1点と握り部分の破片1点が出土したと記載されており、また、現場作成の略図では完形品を含む4点の木片の出土を記しているが、乾燥を免れた第27図 64～66 がどの破片にあたるのかも不明な状況となってしまった。63 は概要報告時に作成した図面を再トレースしたものである。

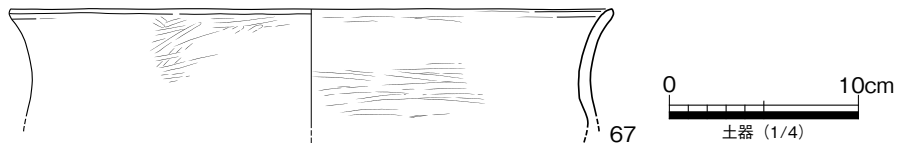
67 は外湾する口縁で端部を尖り気味におさめている。内外面ともヘラミガキ、粘土紐の接合は内傾接合法による。68 は打製石斧である。基部と刃部から片方の側縁が折損している。刃部先端がわずかに摩滅する。

69 は縄文時代晩期の深鉢である。波状口縁で、端部は平坦に仕上げ刻み目を施し、口縁やや下に刻み目突帯を付す。外面は貝殻条痕、内面はヘラミガキで、外面に煤が付着する。70 は尖り底状の深鉢である。外面は貝殻条痕で内外面に煤が付着している（70 は平成7年度の再調査時に出土したものである）。

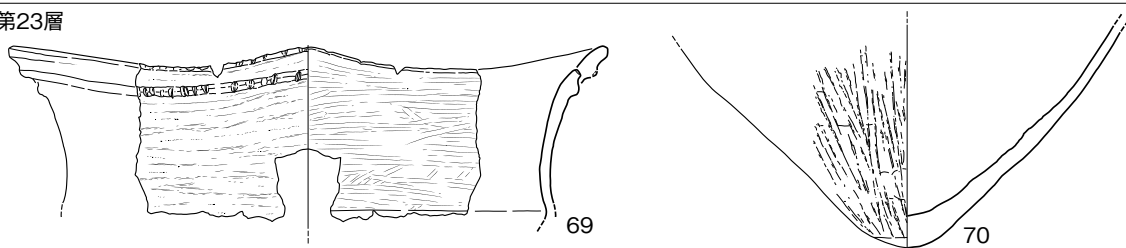
第25・26層



第24層



第23層



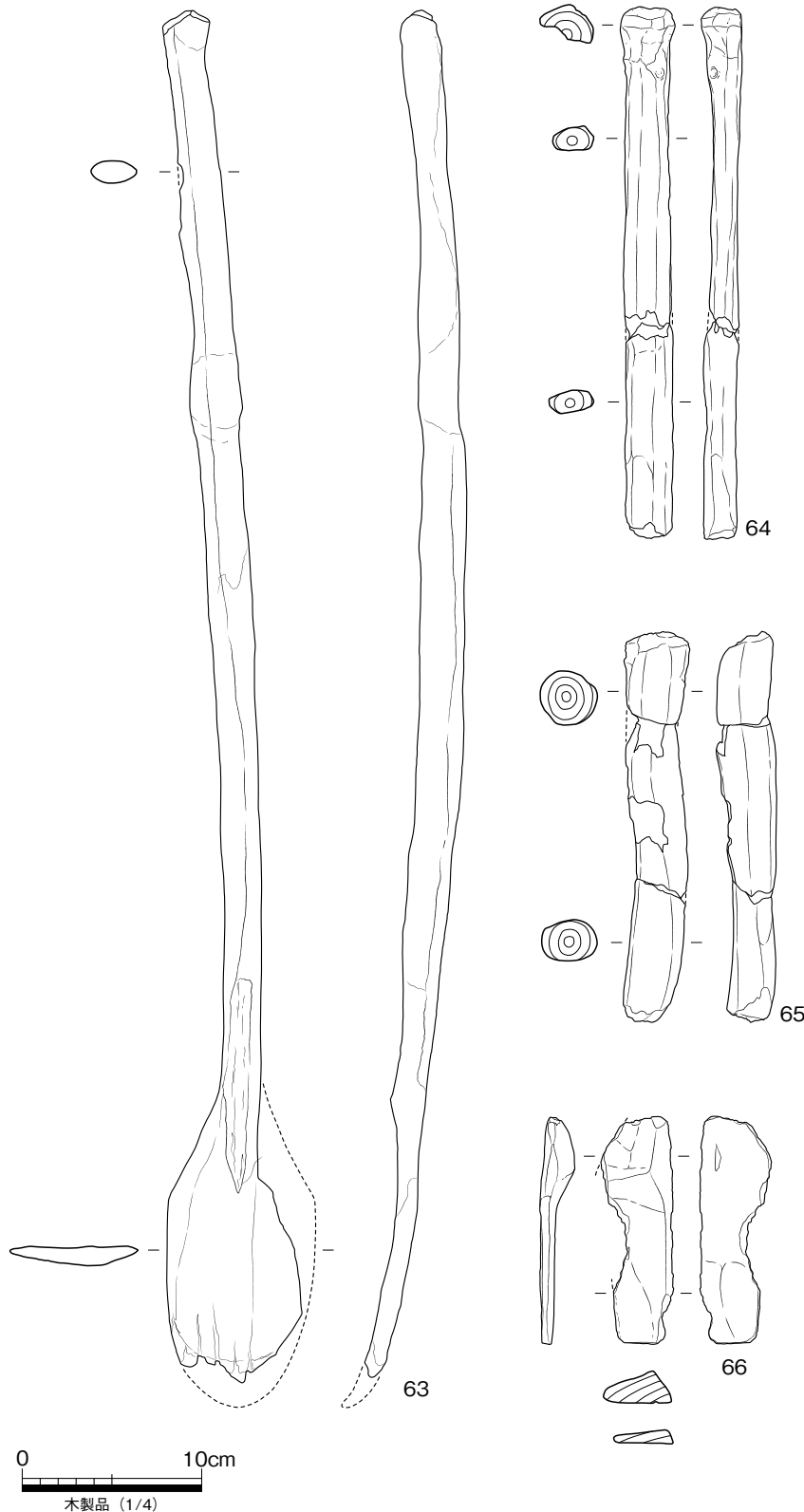
第26図 SR II 01 出土遺物実測図(7)

SR II 02

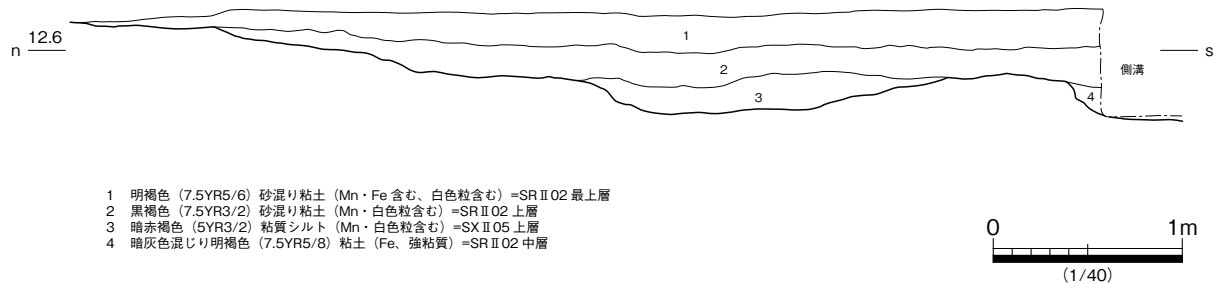
SR II 01が埋没したあとに、01を切り込んで流れた旧河道（第28図）である。弥生時代前期に流れ、弥生時代後期にほぼ完全に埋没したと見られる。埋土は4層に大別され、橙色中砂混じり粘土に埋まる下層、暗灰色混じり明褐色粘土に埋まる中層、黒褐色砂混じり粘土で埋まる上層、明褐色砂混じり粘土で埋まる最上層に分層できる。

下層からは28号コンテナ1箱程度の遺物が出土している。弥生時代前期の遺物を中心に縄文時代晩期の突帯文期の遺物が混在する状況を呈している。

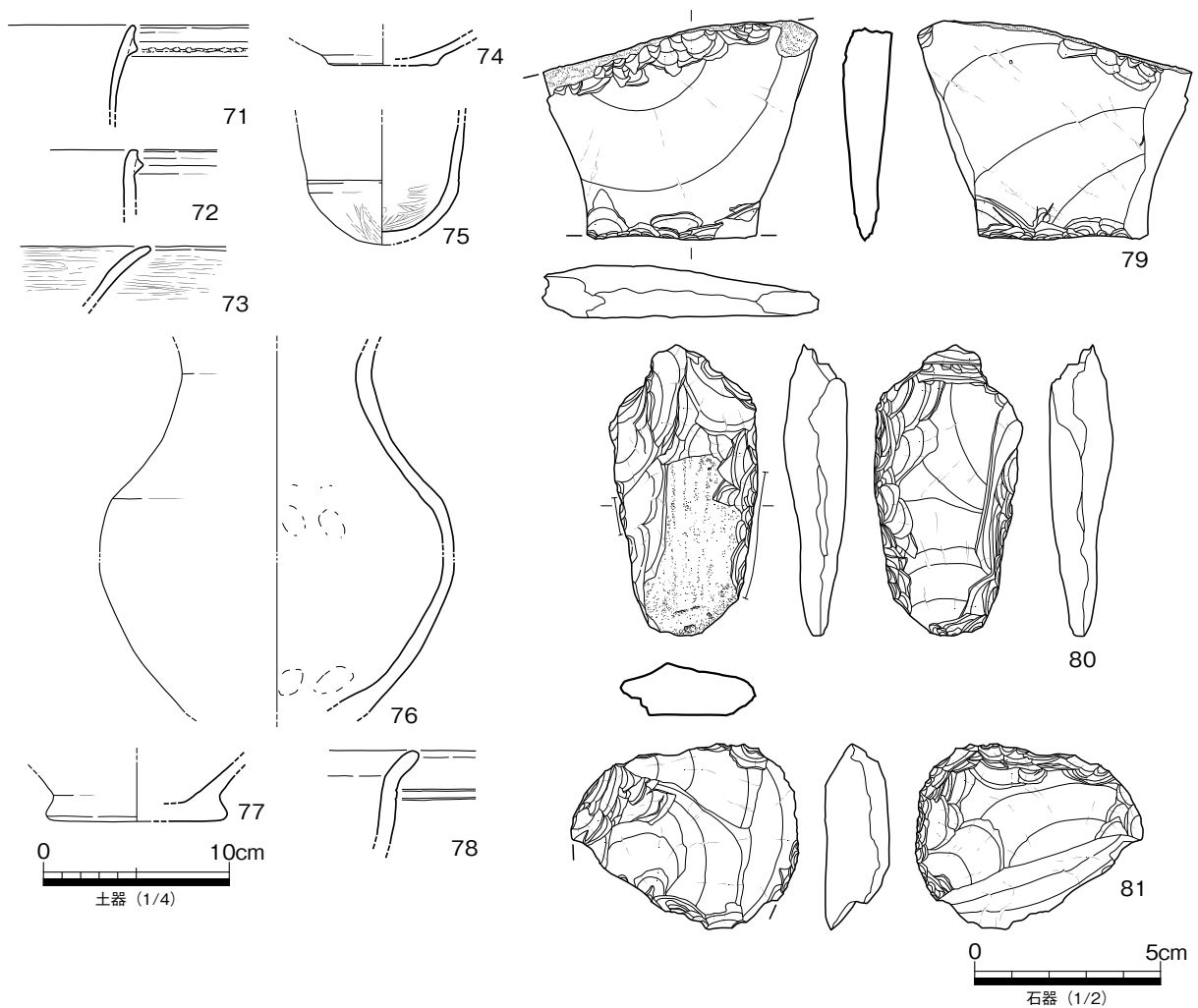
第29図71、72は縄文土器深鉢である。71は口縁端部から1cmほど下がった外面に刻み目突帯を、72は口縁の外面直下に貼付け突帯を付している。73は縄文土器浅鉢か。外反し、端部は反り気味におさめている。75は浅鉢が変容した壺形土器で、丸底の底部から上方に直線的に立ち上がる器形で、肩に相当する位置に細い沈線を巡らしている。76は弥生時代前期の壺、78は弥生時代前期の甕である。78は如意状口縁で2条のヘラ描き沈線を施している。79は削器、80は完形の打製



第27図 SR II 01 出土遺物実測図(8)



第 28 図 SR II 02 断面図

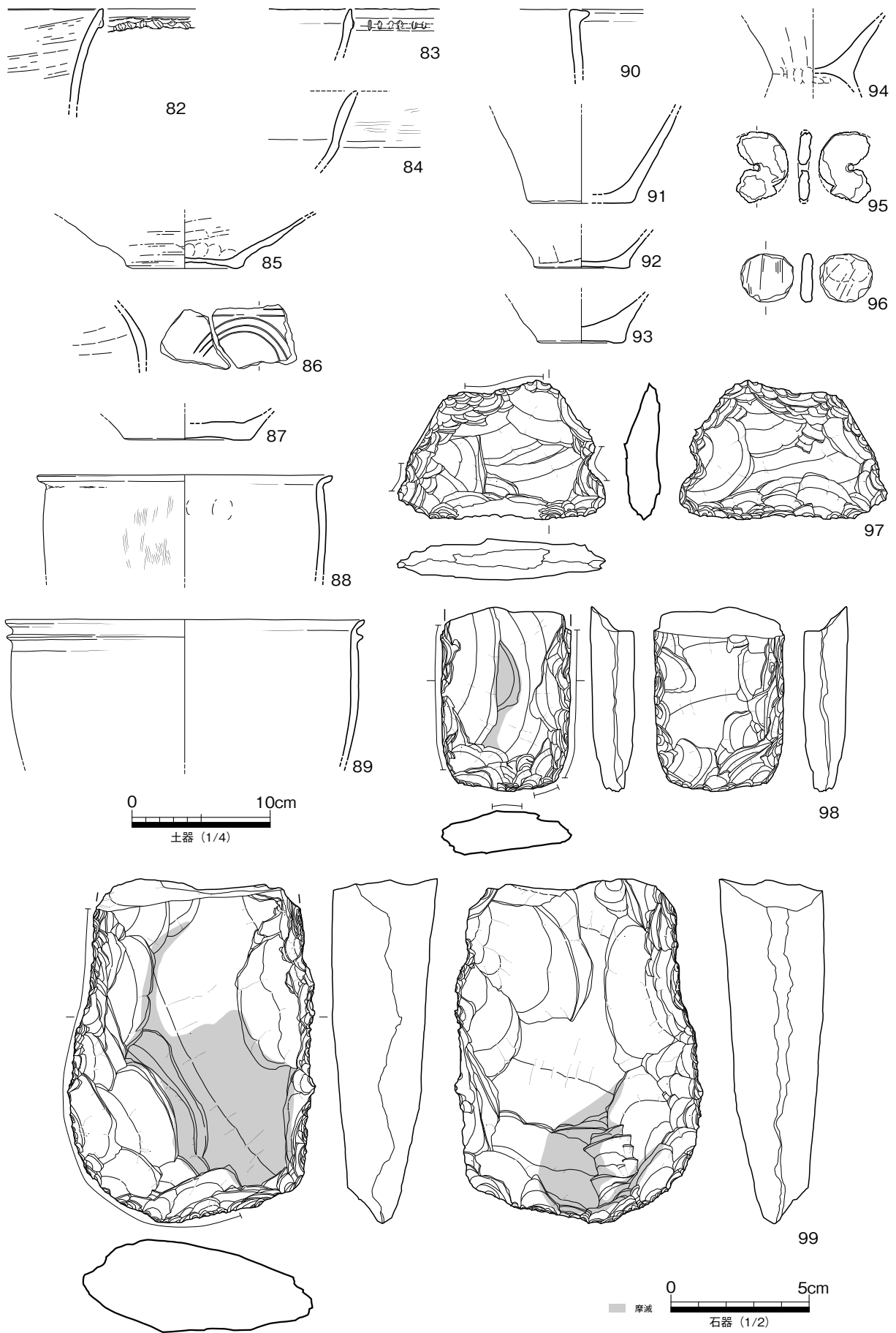


第 29 図 SR II 02 下層 出土遺物実測図

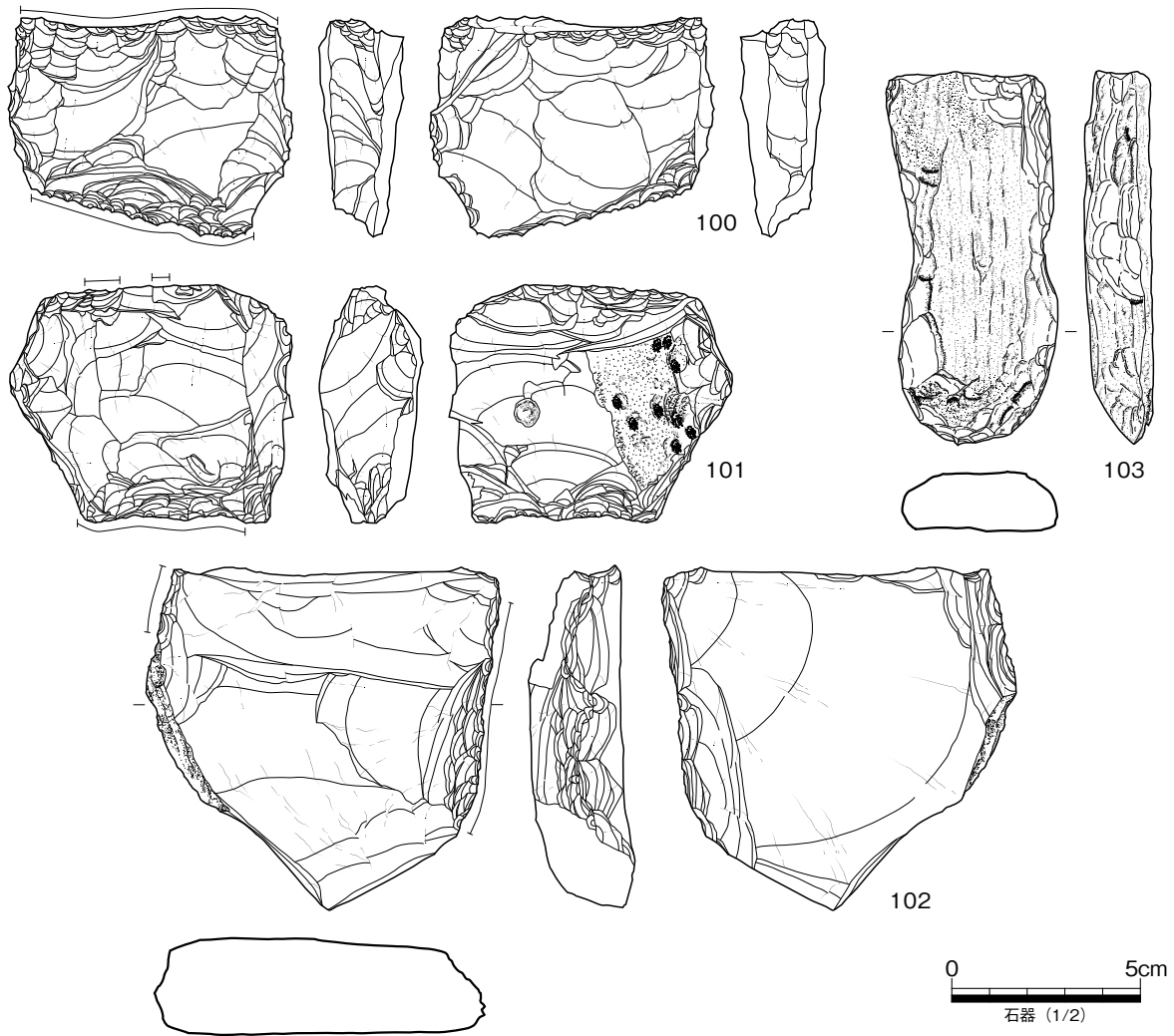
石斧、81 は打製石斧の基部の破片である。

中層からは 28 個のコンテナ 2 箱の遺物が出土している。大半が弥生時代前期の遺物と見られ、若干量の縄文時代晩期の土器片が含まれる。第 30、31 図 82～103 は中層から出土した遺物の実測図である。

82、83 は縄文土器深鉢である。いずれも口縁端部は尖り気味におさめ、端部より 7mm ほど下がった外面に刻み目突帯を付している。84 は縄文土器浅鉢と考える。85 は薄い器壁の底部で、わずかに凹



第30図 SR II 02 中層 出土遺物実測図(1)

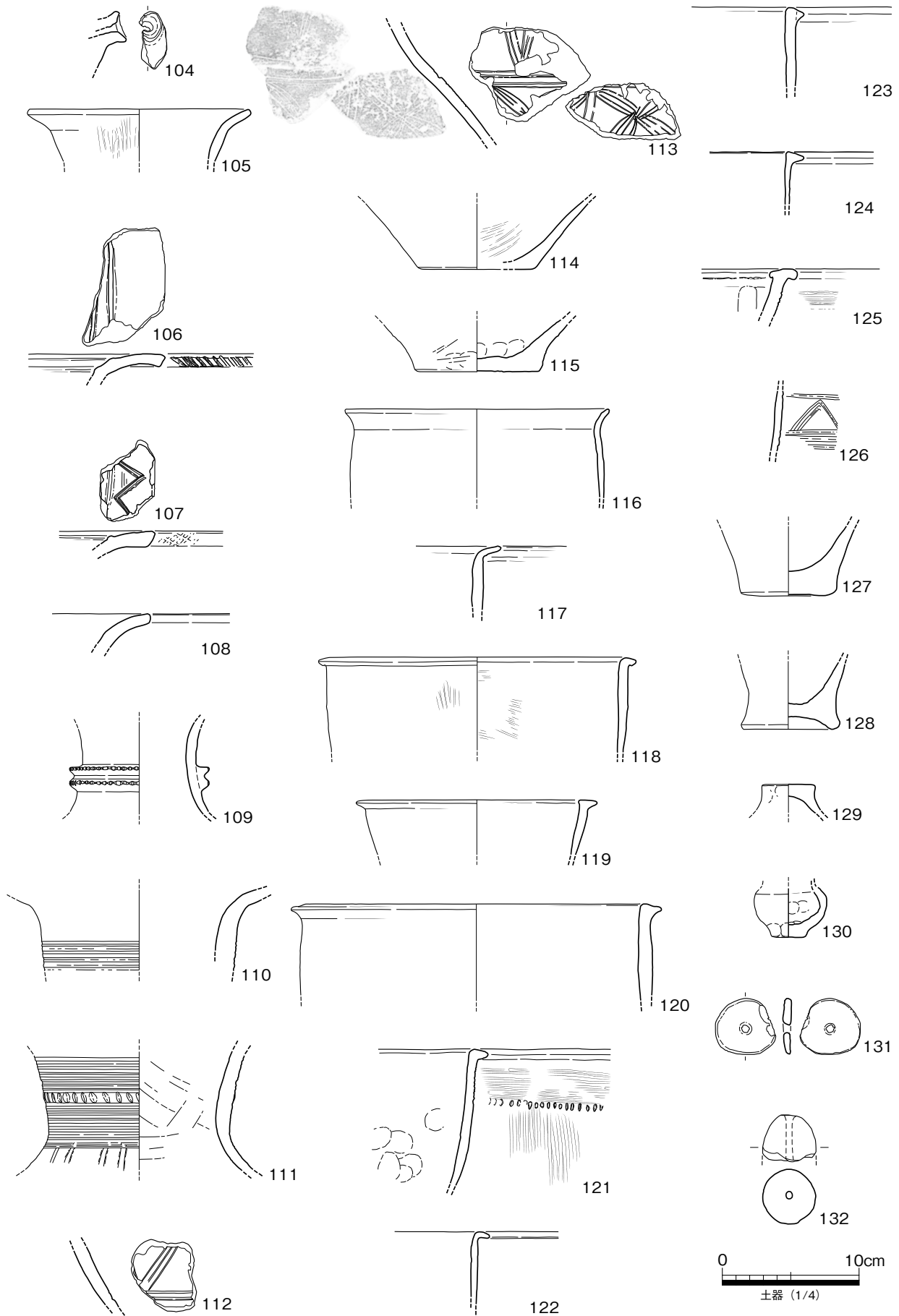


第 31 図 SR II 02 中層 出土遺物実測図 (2)

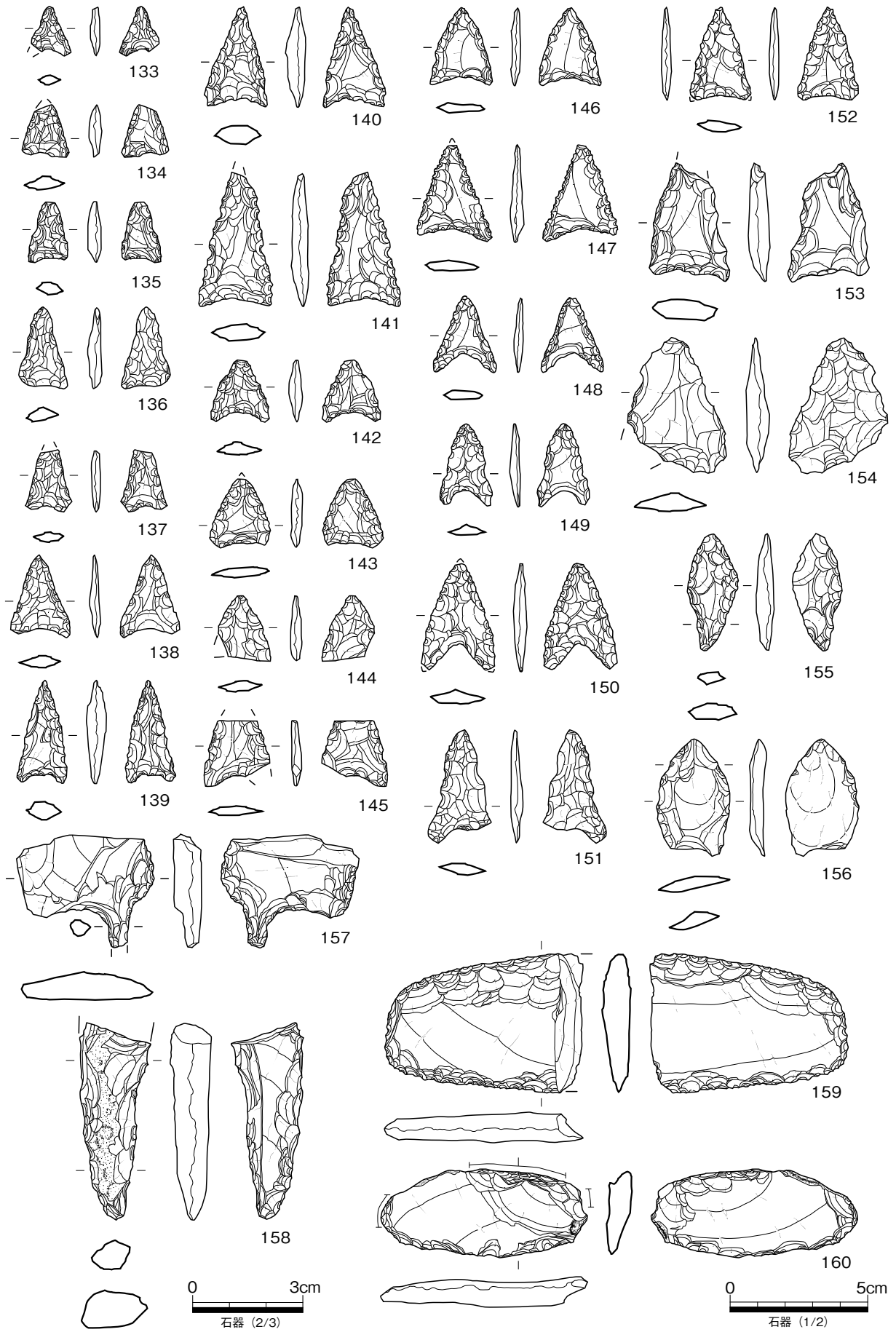
み底となる。86 は弥生時代前期の壺胴部の破片である。外面にヘラによる 2 条の沈線と 3 条の円弧文が巡る。88～90 は弥生時代前期の甕である。88 は如意状口縁、89 は如意状口縁の直下に突帯 1 条を貼り付ける。90 は断面三角形の逆 L 字状口縁である。94 は弥生時代前期の高杯と考える。

97 はやや肉厚の打製石庖丁、98、99 は打製石斧の刃部の破片、100、101 は楔形石器である。102 は石核とした。103 は結晶片岩製の石棒の残欠である。

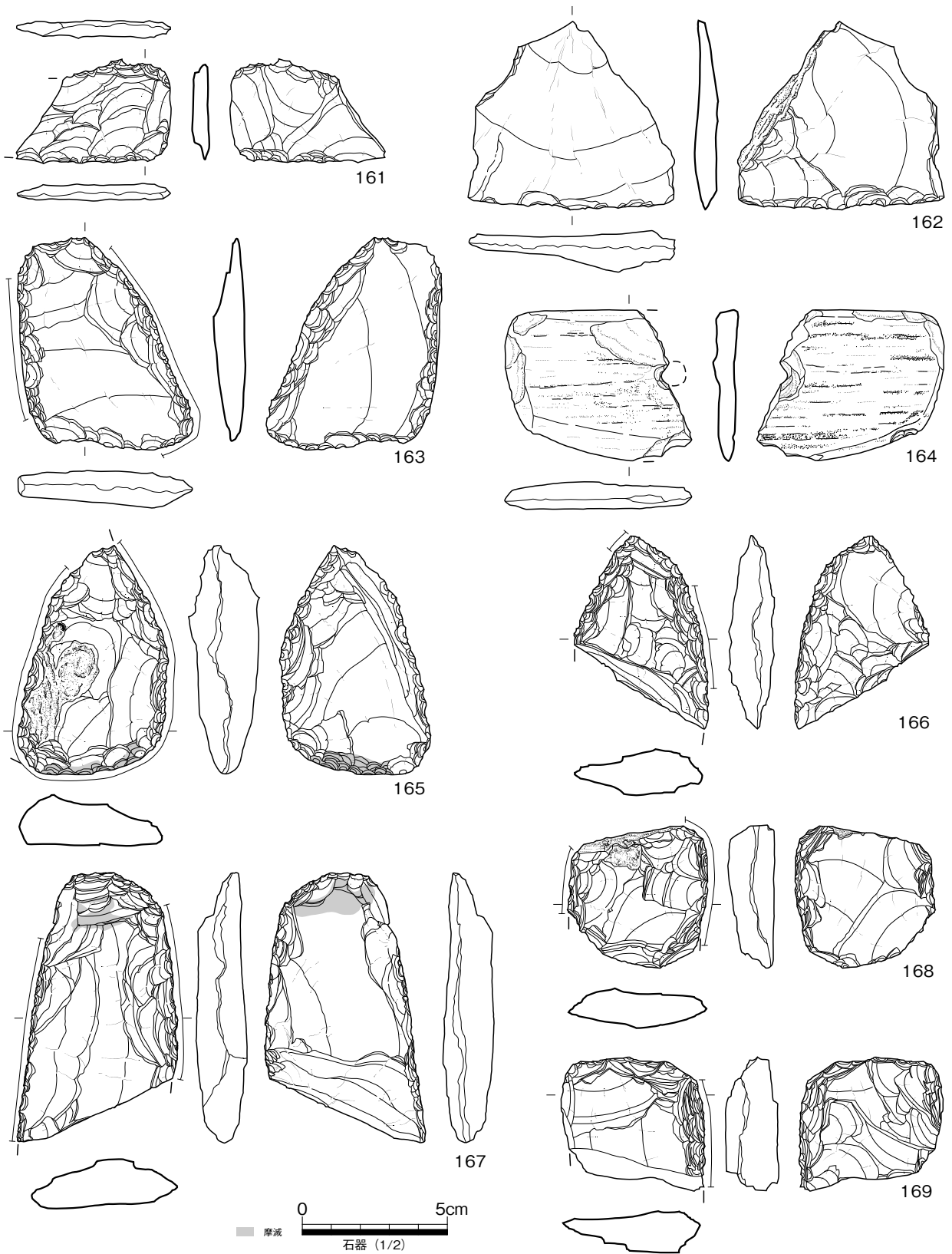
上層からは 28 のコンテナ 14 箱の遺物が出土している。前代からの混入と考えられる遺物を除き、ほぼすべてが弥生時代前期に属するものと見られる。第 32～36 図 104～181 は上層から出土した遺物実測図である。104 は注口土器片である。105～108 は弥生時代前期の壺の口縁部片である。106 は口縁内面に貼付け突帯の文様帯があり、端面に斜行文を施している。107 は端部に斜格子文、内面に山形文と貼付け突帯を付している。109 の壺は頸部に刻み目を施した 2 条の突帯を付す。110 は頸部に 5 条以上のヘラ描き沈線を巡らしている。111 は摩滅のためヘラか櫛か不明であるが、刻み目を施した低い突帯を挟んで 16 条の沈線が巡り、胴部には縦方向に棒状の浮文を付している。112 は壺胴部の小破片、ヘラ描きによる 2 条の沈線と山形文を構成すると思われる 3 条の沈線が認められる。113 も壺胴部、ヘラにより 4 条の沈線を巡らし、その下部は 2 条の区画線によって区切り有軸木葉文を描く。上部には斜



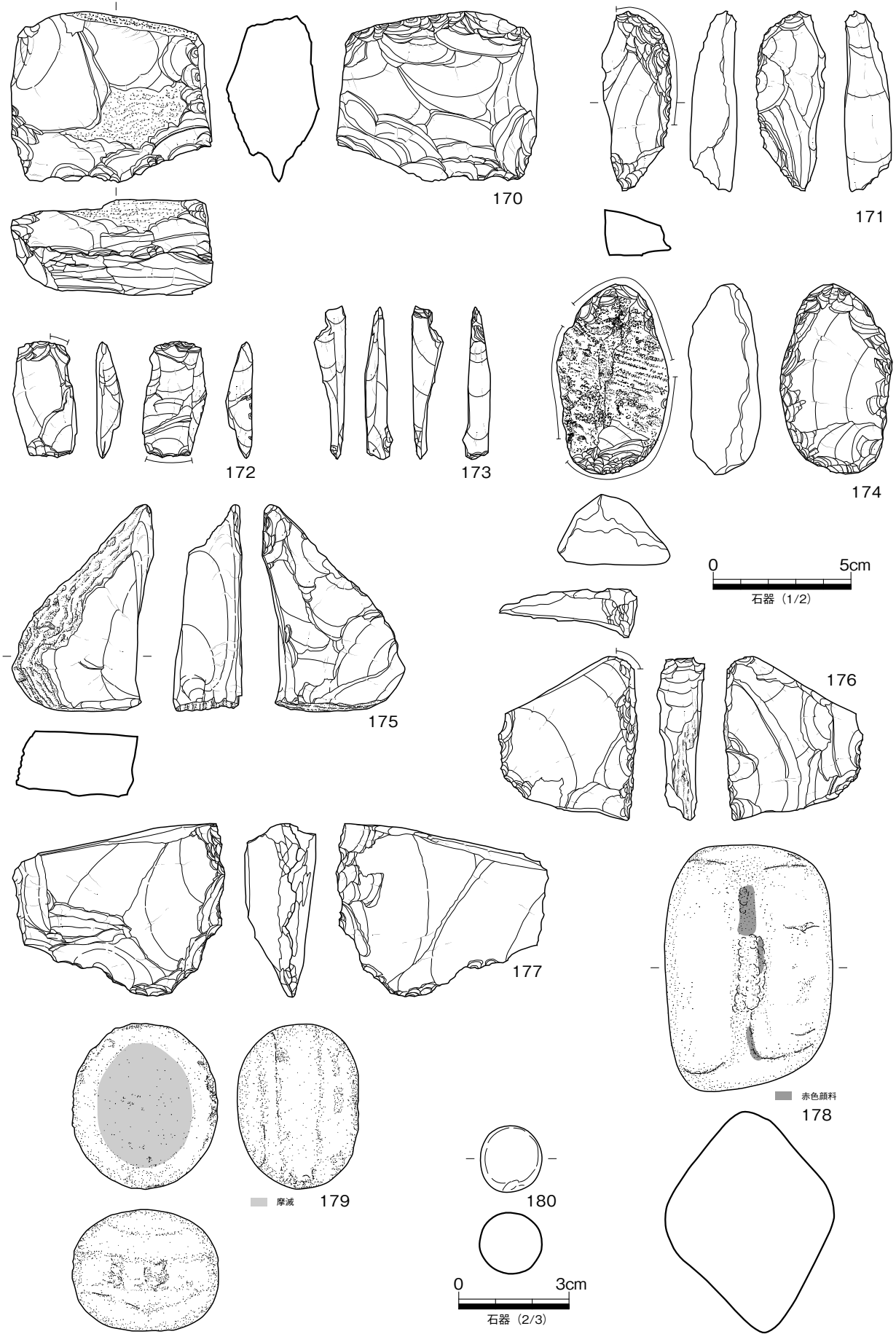
第32図 SR II 02 上層 出土遺物実測図(1)



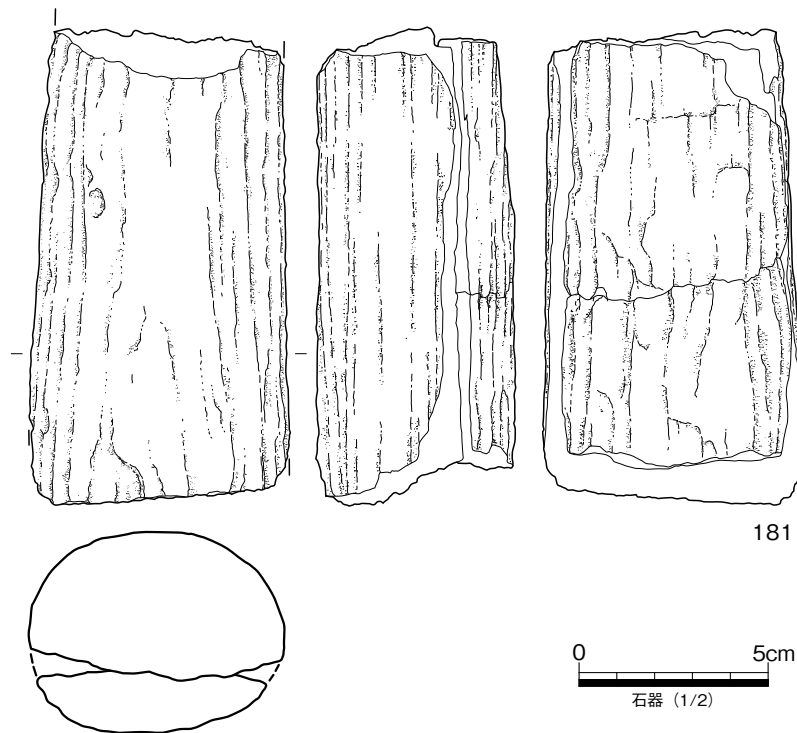
第 33 図 SR II 02 上層 出土遺物実測図 (2)



第34図 SR II 02上層 出土遺物実測図(3)



第 35 図 SR II 02 上層 出土遺物実測図 (4)



第36図 SR II 02 上層 出土遺物実測図(5)

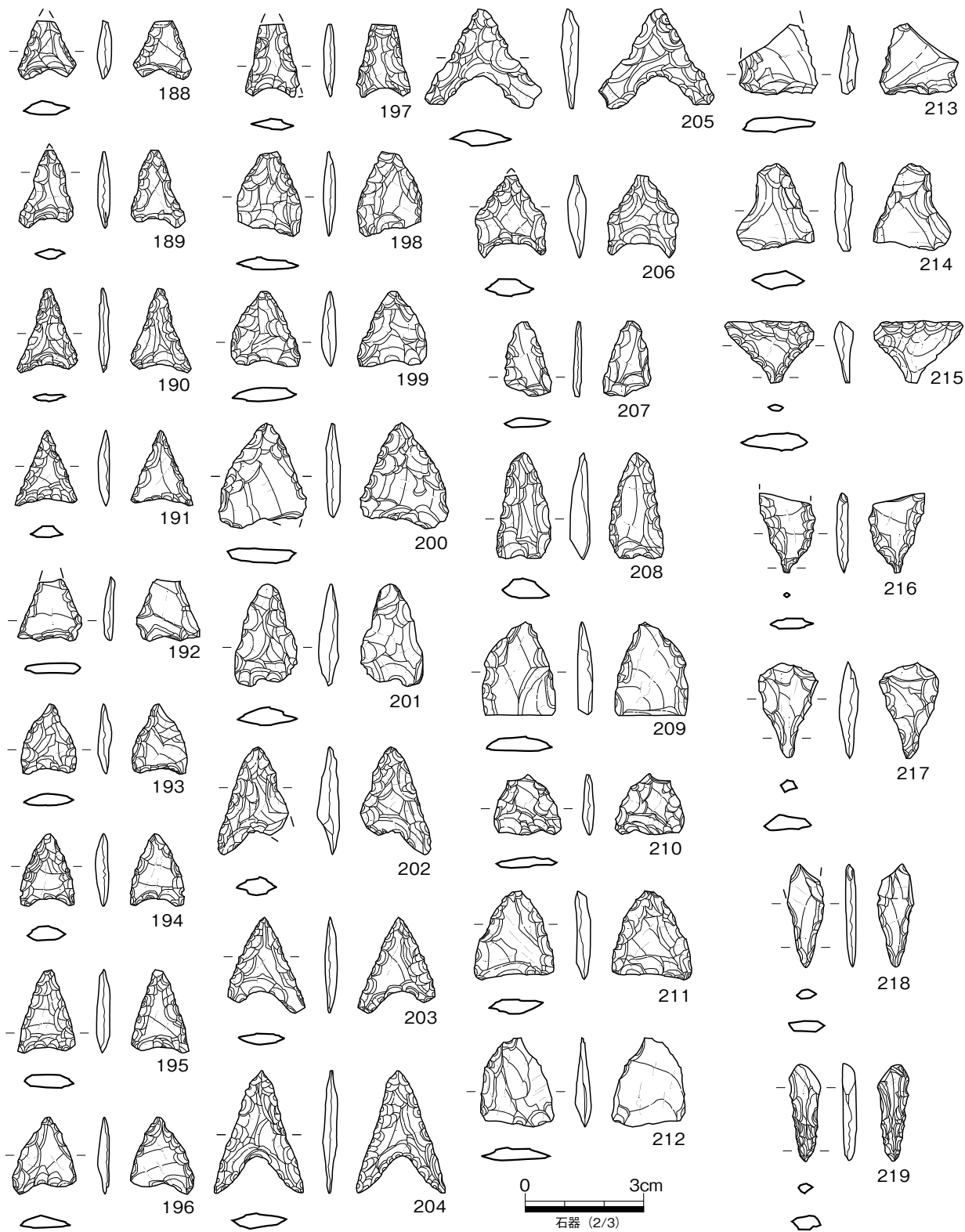
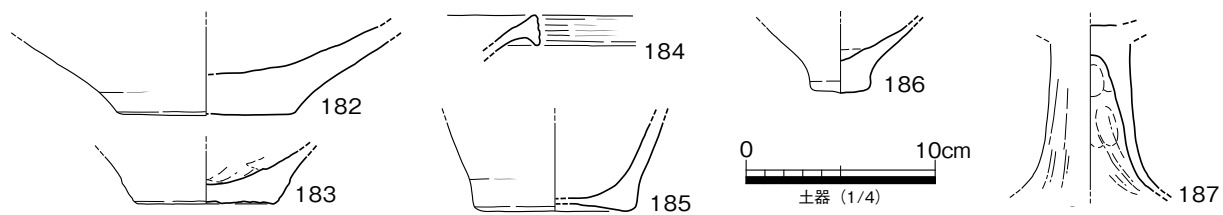
刃部を整形している。164は結晶片岩製の磨製石庖丁である。165は一側縁から基部を折損した打製石斧である。折損時の割れ面も縁が潰れていることから折損後も使用されたと見られる。166～169は、いずれも打製石斧の基部の破片である。170～173は楔形石器とした。174はサヌカイトの敲石である。断面三角形の二辺は礫面で、下面と側縁に敲打による潰れが見られる。175～177は石核とした。178は石杵である。短断面は菱形、長断面は長方形を呈する砂岩亜円礫で、一長側縁に敲打痕があり、その周囲の縁片部に微量の朱が付着している。179は磨石、180は径約1.7mmの球状に仕上げられた丸石、181は結晶片岩製の石棒の残欠である。

第37～39図182～235は、最上層から出土した遺物実測図である。182、183は弥生時代前期の壺の底部、184は口縁端部を下方に拡張し凹線文3条を施した弥生時代中期の壺もしくは甕の小破片である。185は弥生土器甕、186は弥生時代後期の鉢底部と考えられる。187は高杯の脚部片である。最上層からは28リットルコンテナ4箱分の遺物が散在する状況で出土した。大多数は弥生時代前期と考えられる破片であるが、弥生時代後期の遺物が少量混在している。

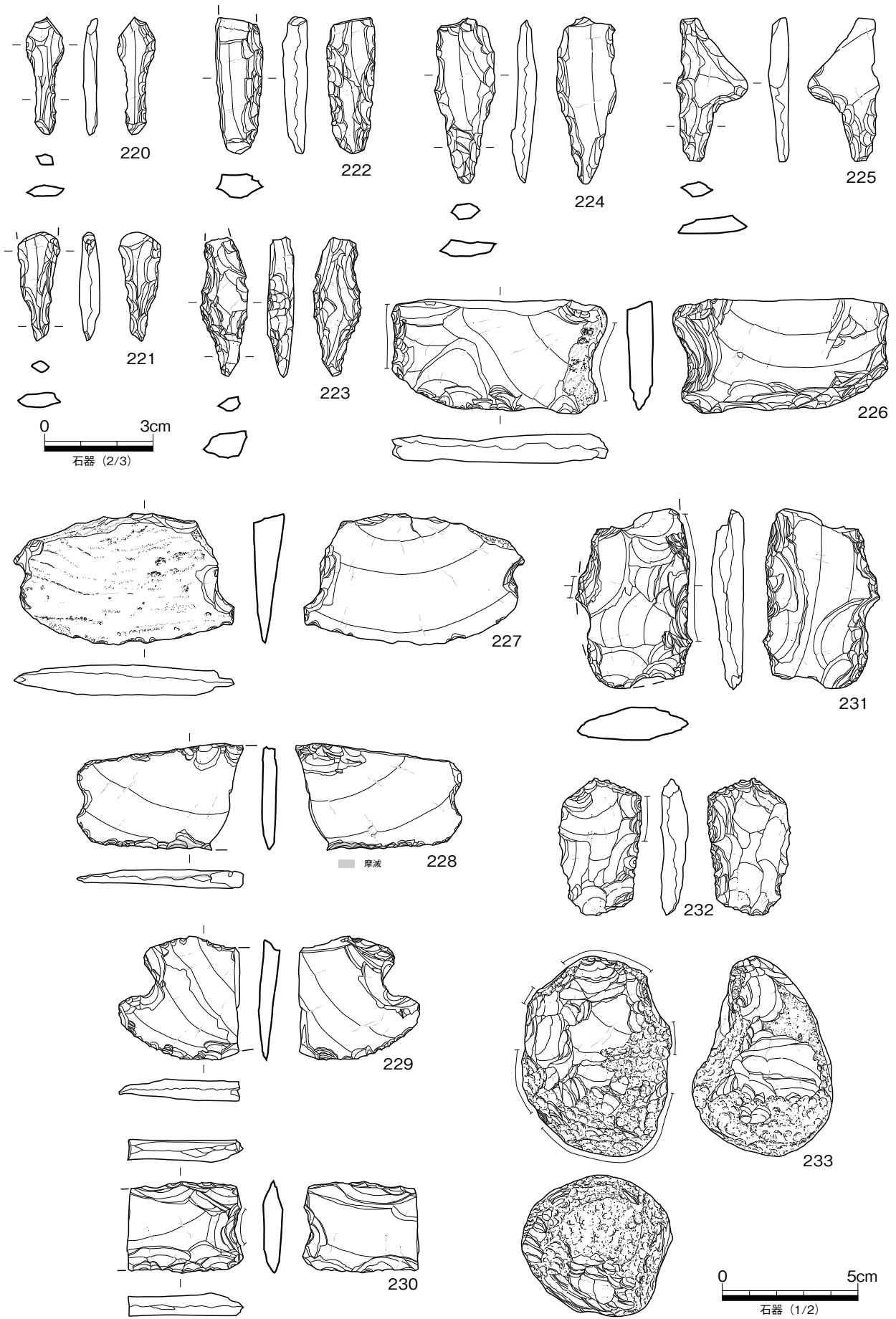
188～206は凹基式の石鏃である。206は平面形が五角形を呈する五角形鏃である。207～212は平基式の石鏃、213、214は細部調整が不十分なため石鏃未成品と考える。215～225は石錐である。217～219は風化が進んでいる。222～224の錐部は、割れ面をそのまま利用したものである。226～230は打製石庖丁である。227と228は剥片の段階で鋭利な刃部ができ、簡単な細部調整で刃部を整形している。231は左側縁と基部を折損した打製石斧の刃部の破片、232は打製石斧を転用したと考えられる剥片化した楔形石器、233はサヌカイトの敲石である。233は下面を中心に側縁上位にかけて敲打により潰れている。234は素材の剥片とした。235は棒状の砂岩亜円礫を利用した砥石である。器表の剥落のため詳細不明であるが、2面に砥面が見られる。

め方向の沈線が施されている。116～126は前期の甕の口縁部片である。摩滅する小破片が多い。このほか紡錘車(131)、土錘(132)が出土している。

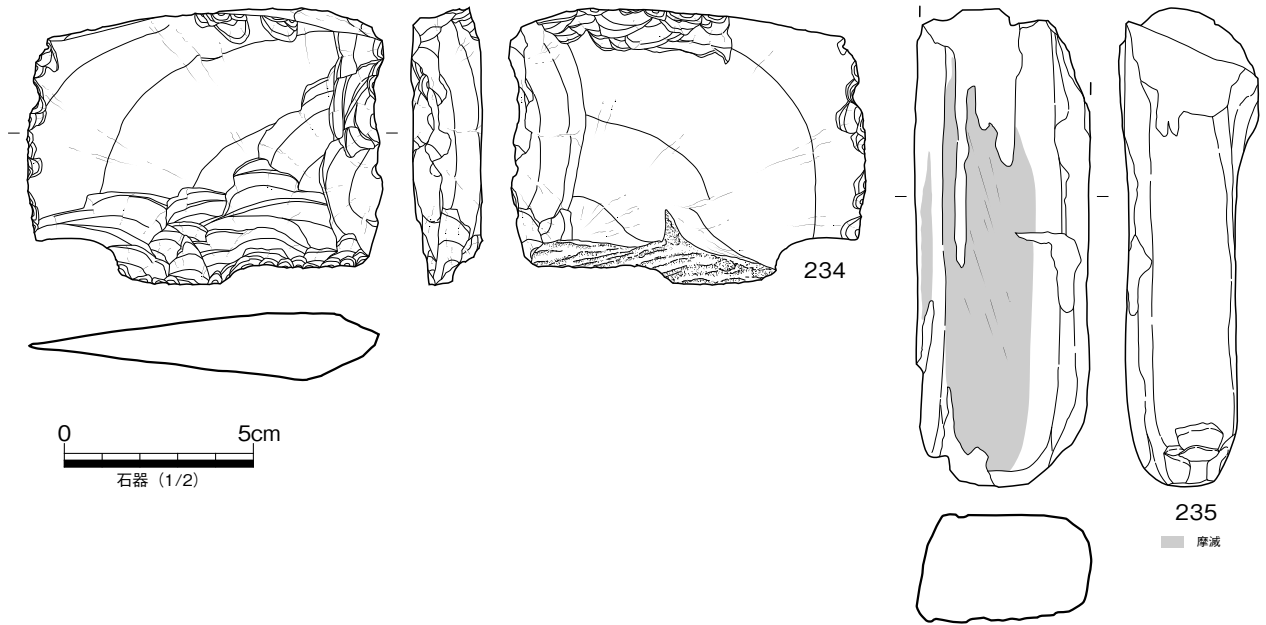
133～156は石鏃。大半が凹基もしくは平基式のものであるが、155は凸基(尖底)式の石鏃である。156は未成品である。157、158は石錐、159～163は削器である。161の一面は新しい割れ面と考える。背面は本来の形状を留めていない。163は折損した打製石斧の基部の破片を削器に転用したものである。折損した刃部の割れ面を再加工して削器の



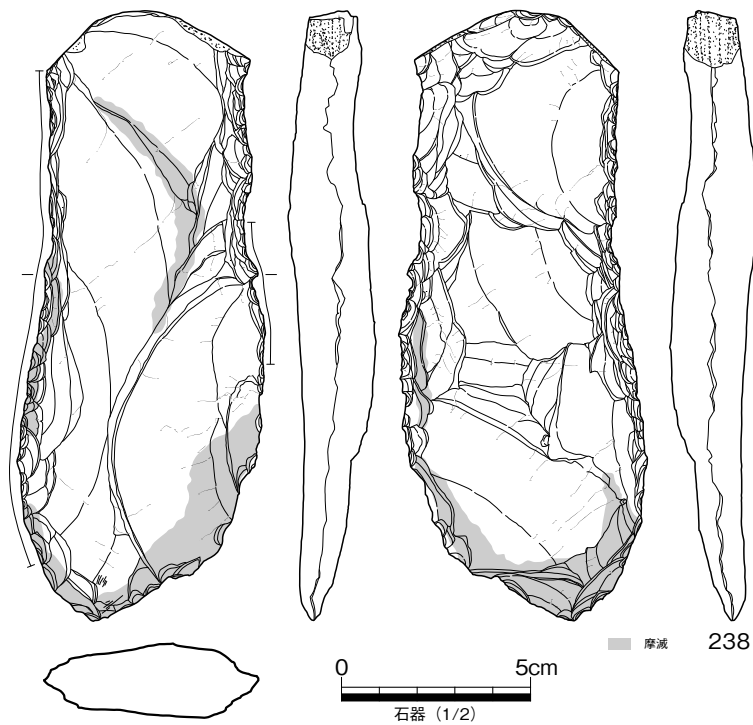
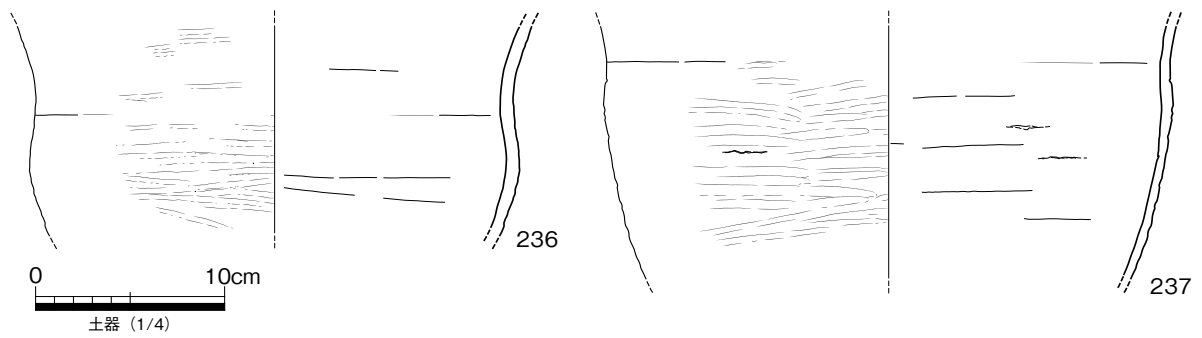
第 37 図 SR II 02 最上層 出土遺物実測図 (1)



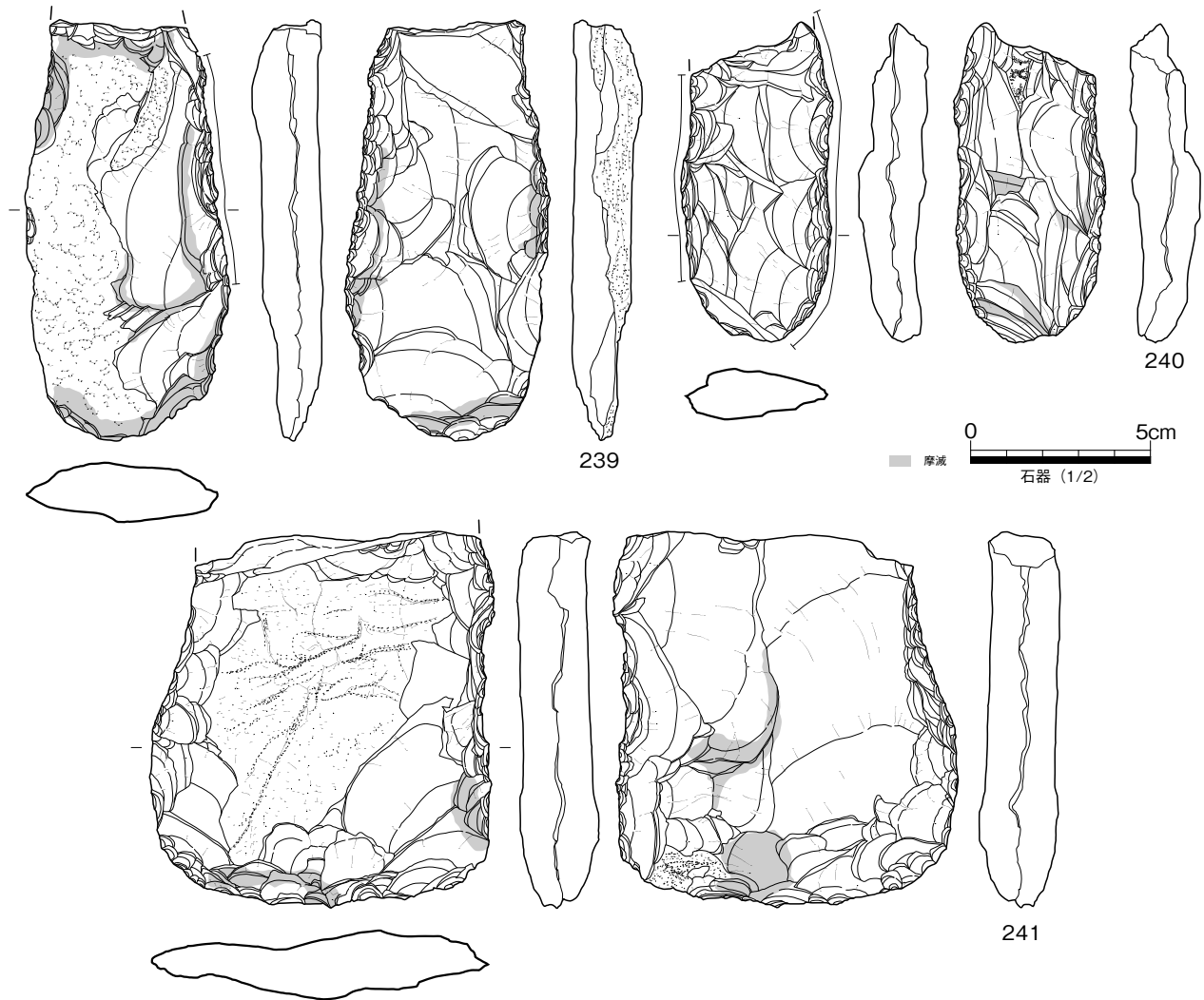
第38図 SR II 02 最上層 出土遺物実測図(2)



第 39 図 SR II 02 最上層 出土遺物実測図 (3)



第 40 図 SR II 03 下層 出土遺物実測図



第41図 SR II 03 中層 出土遺物実測図

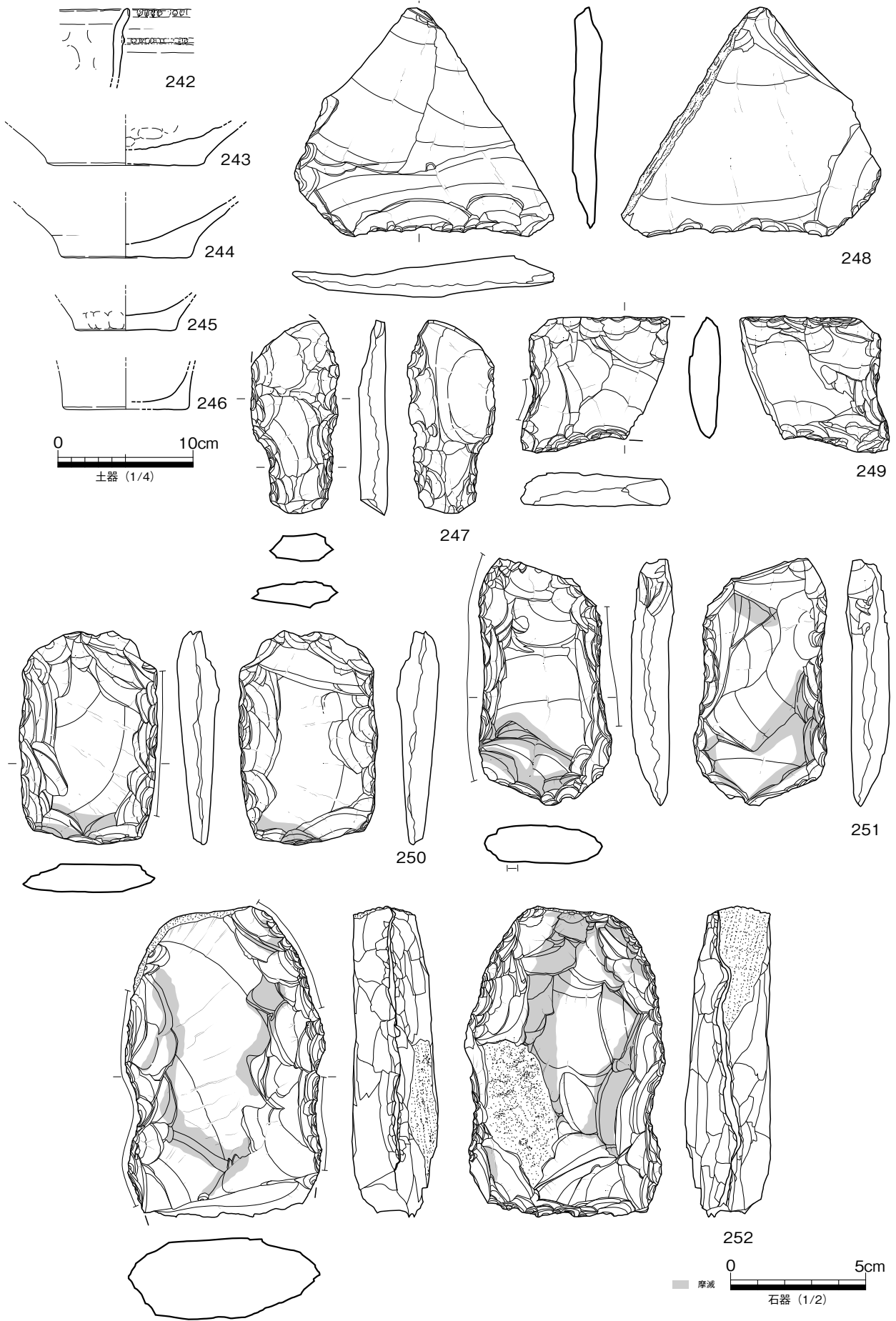
SR II 03

第40～45図236～282は、平成6年度調査時の⑩区SR05出土の遺物のうち、SR II 03に相当する堆積層のものである。236～238は、第12図21層、239～241は第12図20層、242～252は第12図19層、253～282は第12図5、18層から出土したものである。

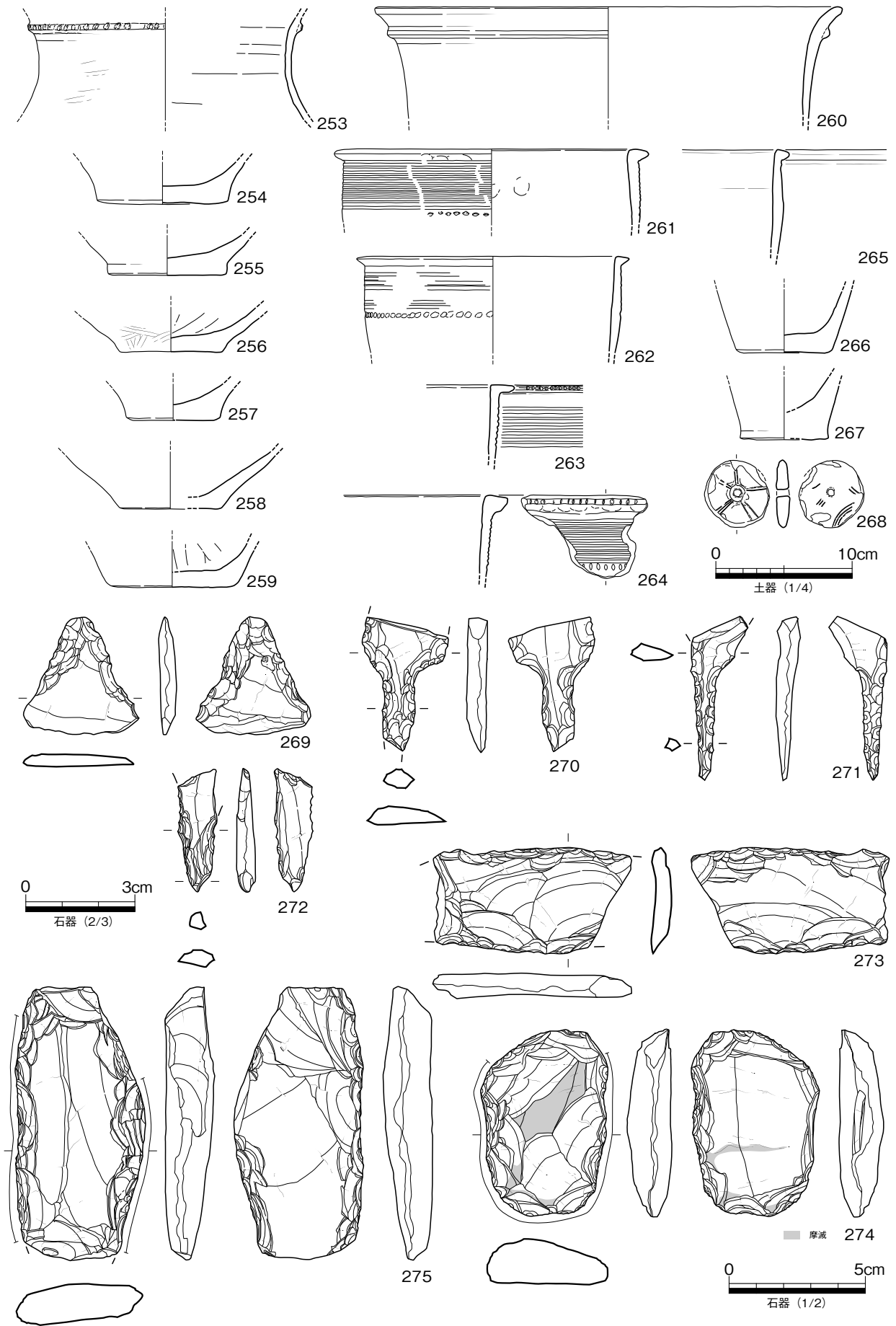
236、237は縄文時代晩期の深鉢である。ともに胴部と口縁部の境界に段は無く、236の外面は貝殻条痕、237は胴部が貝殻条痕、口縁部がナデで調整される。238の打製石斧は、とくに刃部先端に摩滅が見られる。239～241は打製石斧である。

242は口縁端部外面に刻み目、わずかに下に刻み目突帯を付した縄文深鉢、243～246は弥生時代前期の壺や甕の底部である。247は両側縁に刃を整形しようとして途中で放棄したように見えるため未成品と考える。このほか削器、打製石庖丁、打製石斧が出土している。

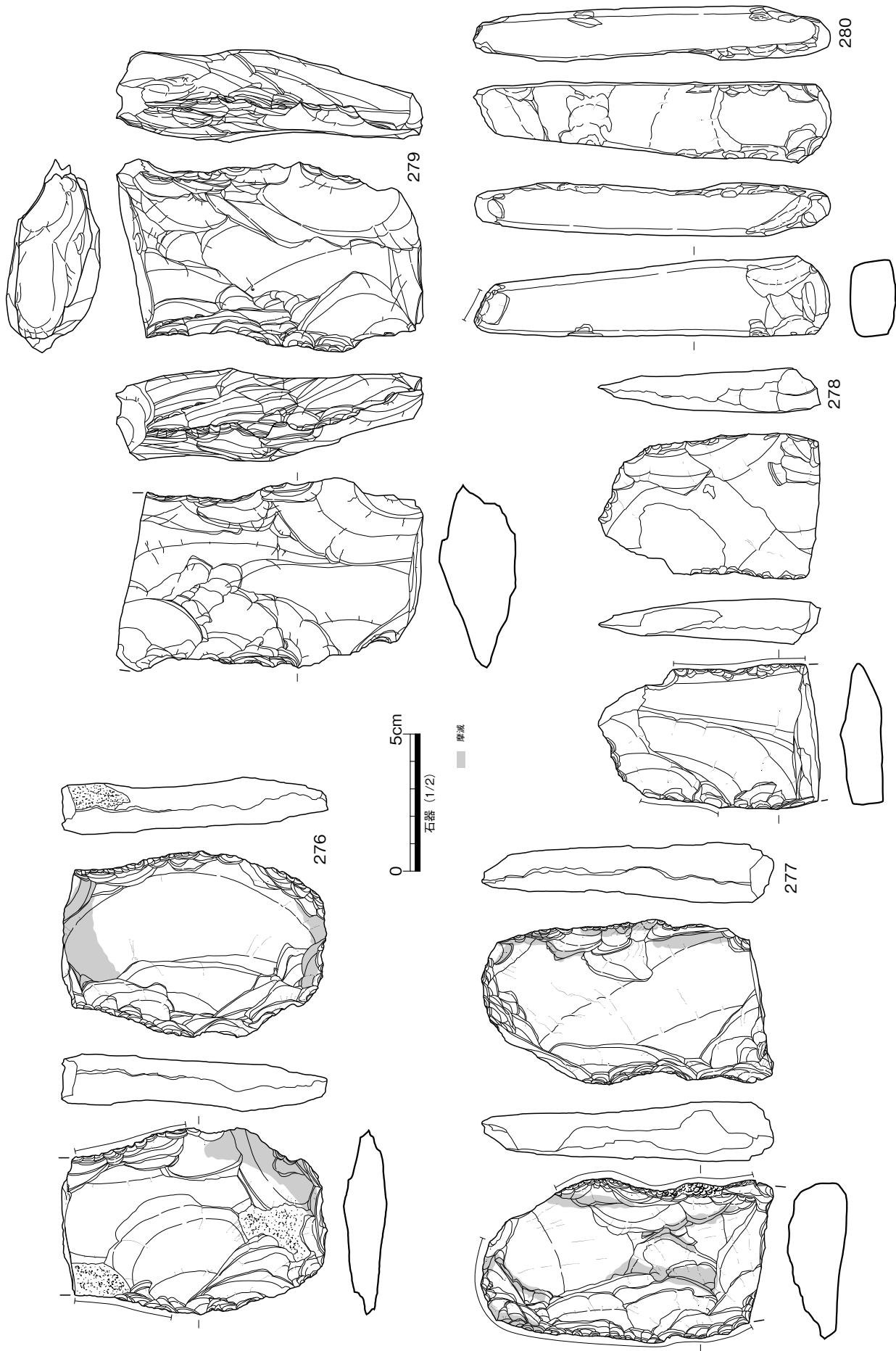
253は縄文時代晩期の深鉢、口縁の直下に刻み目突帯を付す。調整は摩滅のためわからない。254～259は弥生時代前期の壺の底部、260～265は弥生時代前期の甕の口縁部である。260は外湾する口縁で、口縁端部から少し下がった位置に突帯を付す、いわゆる「縄文甕」である。261～264は6～10条のヘラ描き沈線を施し、その下部に刺突文を施したり口縁端部に刻み目を施したりしている。268は摩滅



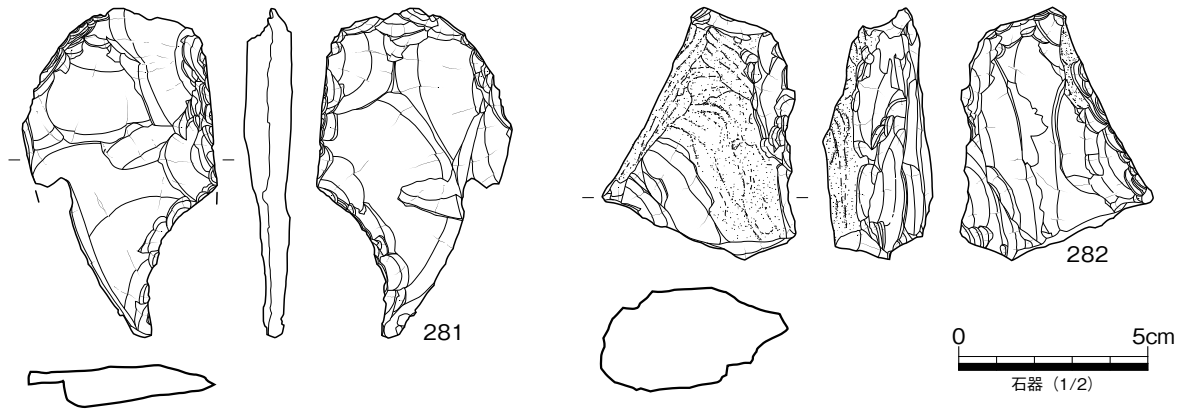
第 42 図 SR II 03 上層 出土遺物実測図



第43図 SR II 03 最上層 出土遺物実測図(1)



第 44 図 SR II 03 最上層 出土遺物実測図 (2)

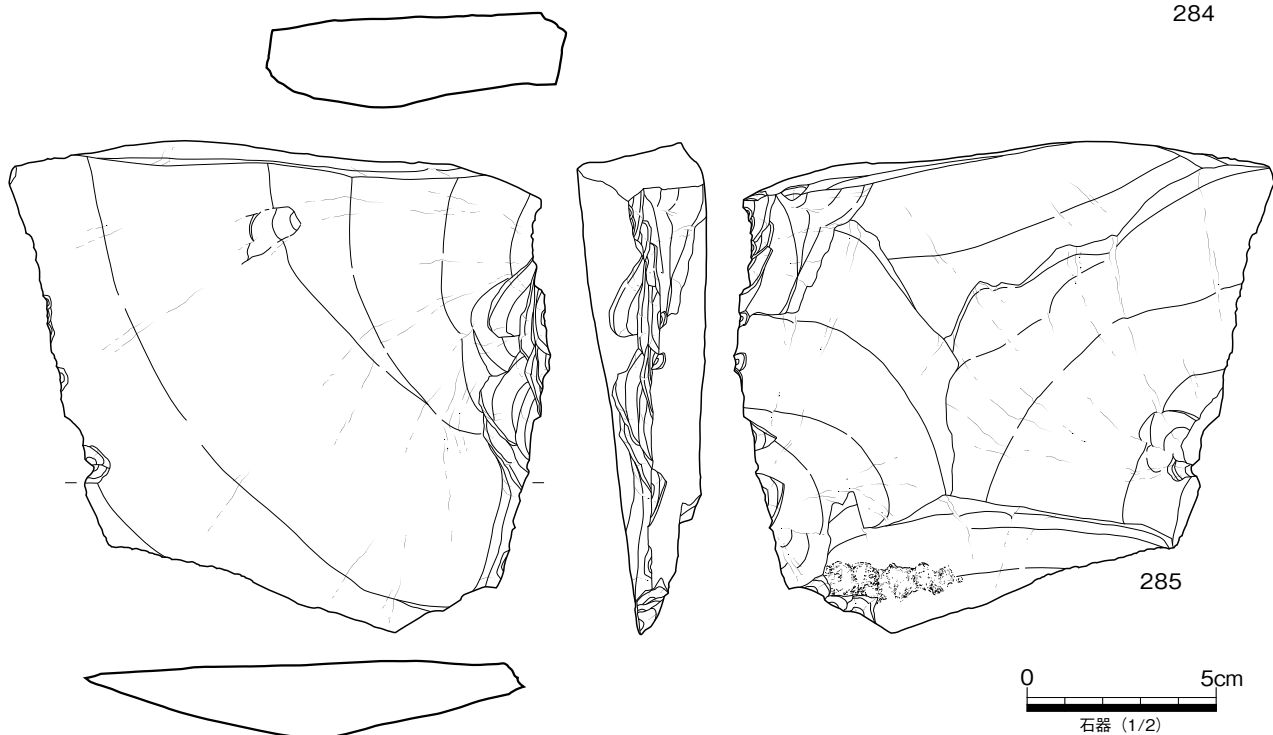
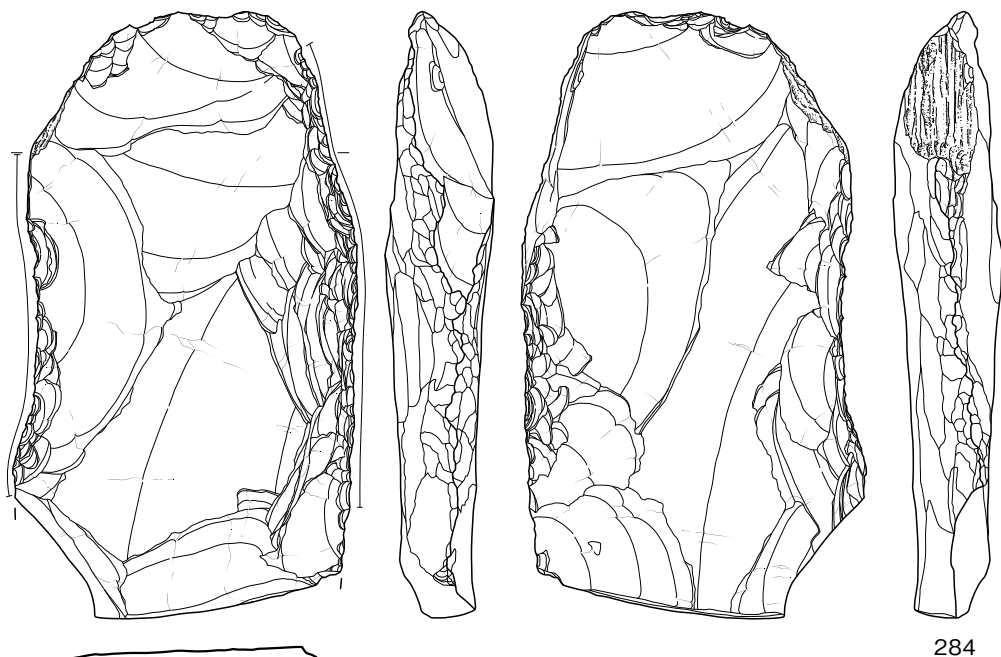
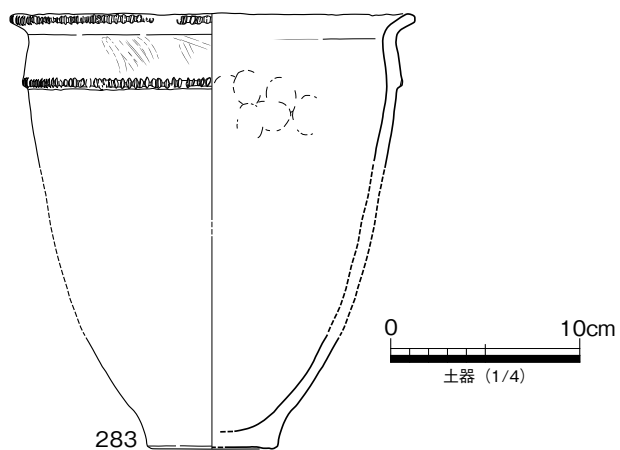


第45図 SR II 03 最上層 出土遺物実測図(3)

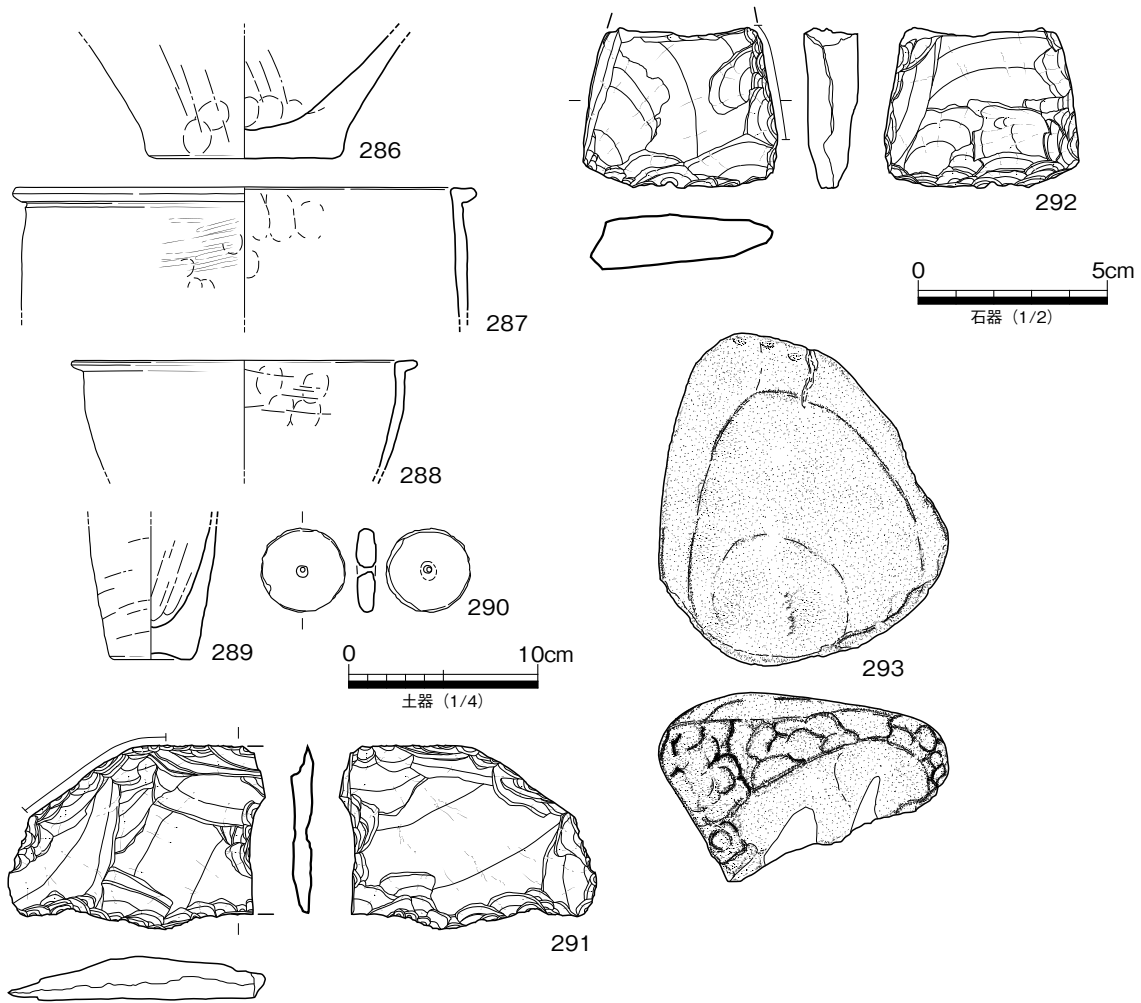
するが、一面には放射状の沈線、一面には内向する円弧文を施した紡錘車である。

269は平基式の石鏃、270～272は石錐である。273は両刃の石器である可能性もあるが削器とした。274～278は打製石斧である。274、275は使用による摩滅が認められる。276～278は刃部を折損する。279は薄く仕上げるための剥離が途中で終わっており、使用痕も見られないことから未成品と考える。280は柱状片刃石斧、刃部は一度折損し、再加工のうえ使用されている。281の上半部は打製石斧の基部に見えるが、下半は内湾する刃をつくっている。折損した打製石斧を転用した可能性がある。282は石核とした。

第46図283～285は、出土層位が不明なため、SR II 01出土かSR II 03出土か不明の遺物である。283は如意状口縁で端部に刻み目を施し、以下に段を設け刻み目を施した弥生時代前期の甕である。本遺跡の弥生時代前期土器の中では古い様相を持つ。284は打製石斧、285は石核とした。



第 46 図 SR II 01 か II 03 出土遺物実測図



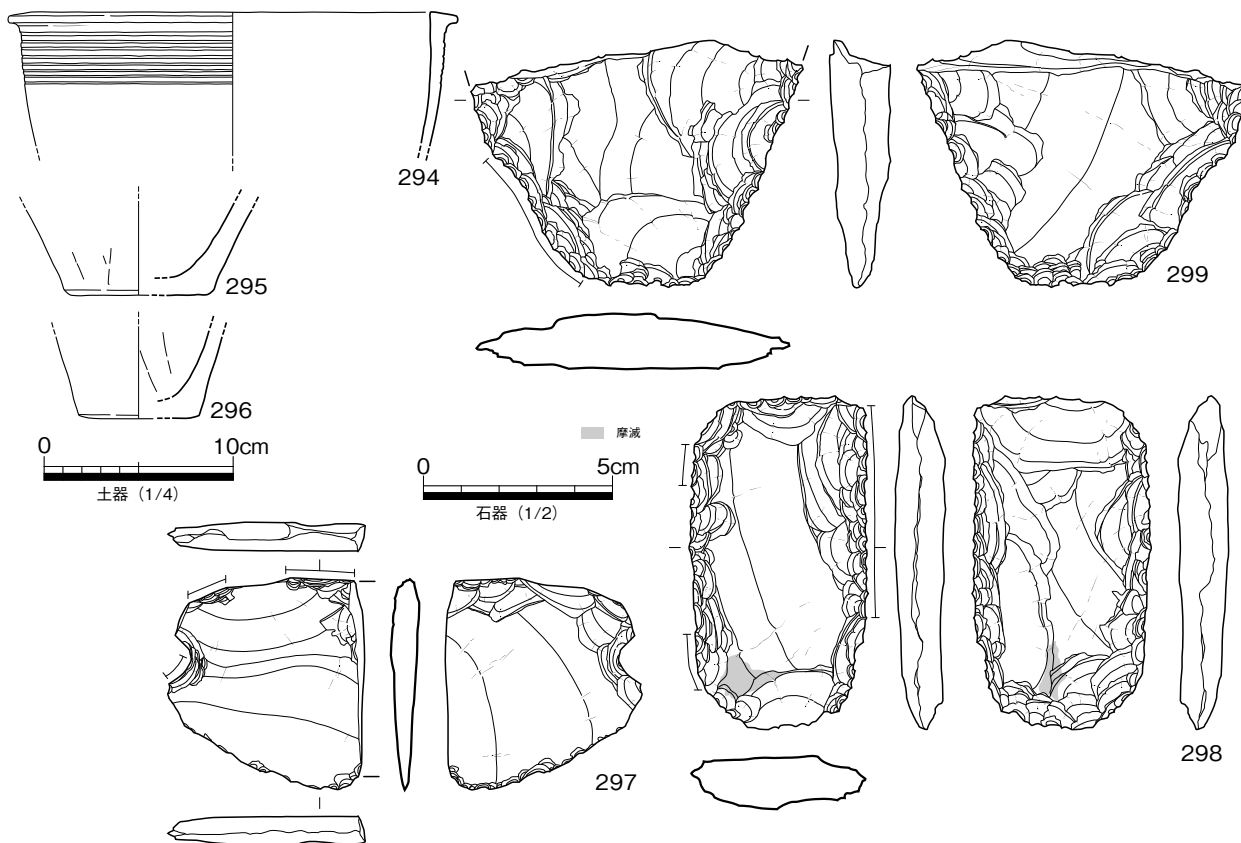
第47図 SR IV 01 出土遺物実測図

IV、V区旧河道

SR IV 01

II区のSR II 02が大きく蛇行してSR II 03につながると考えられるが、蛇行部の南岸部分をIV区で検出している。SR IV 01が検出された調査区は粘土取りが行われており、大半が遺構面以下まで掘削されている。このため埋土の上半が削平されており、黒褐色粘質土層、赤褐色粘質土層、青黒色粘質土層、植物遺体を多く含む灰緑色粘質土層の堆積層が確認されている。遺物は28¹/₂コンテナ1箱程度が出土しているが、大半は上位の黒褐色粘質土層から出土している。断面図や断面写真の検討から、黒褐色粘質土層はSR II 02の上層および中層に相当すると考えられる。なお、黒褐色粘質土層より下位の層は、縄文時代晩期のSR II 01の堆積層に相当する。

第47図286～293は、SR IV 01の黒褐色粘質土層出土の遺物実測図である。286は弥生時代前期の壺の底部、287、288は逆L字状口縁の弥生時代前期の甕、289は甕か鉢の底部である。291は打製石庖丁である。一端を折損するが、折損後に再び抉りをいれようとしている。292は打製石斧の刃部の破片、293は砂岩垂円礫の敲石である。



第 48 図 SR IV 02 出土遺物実測図

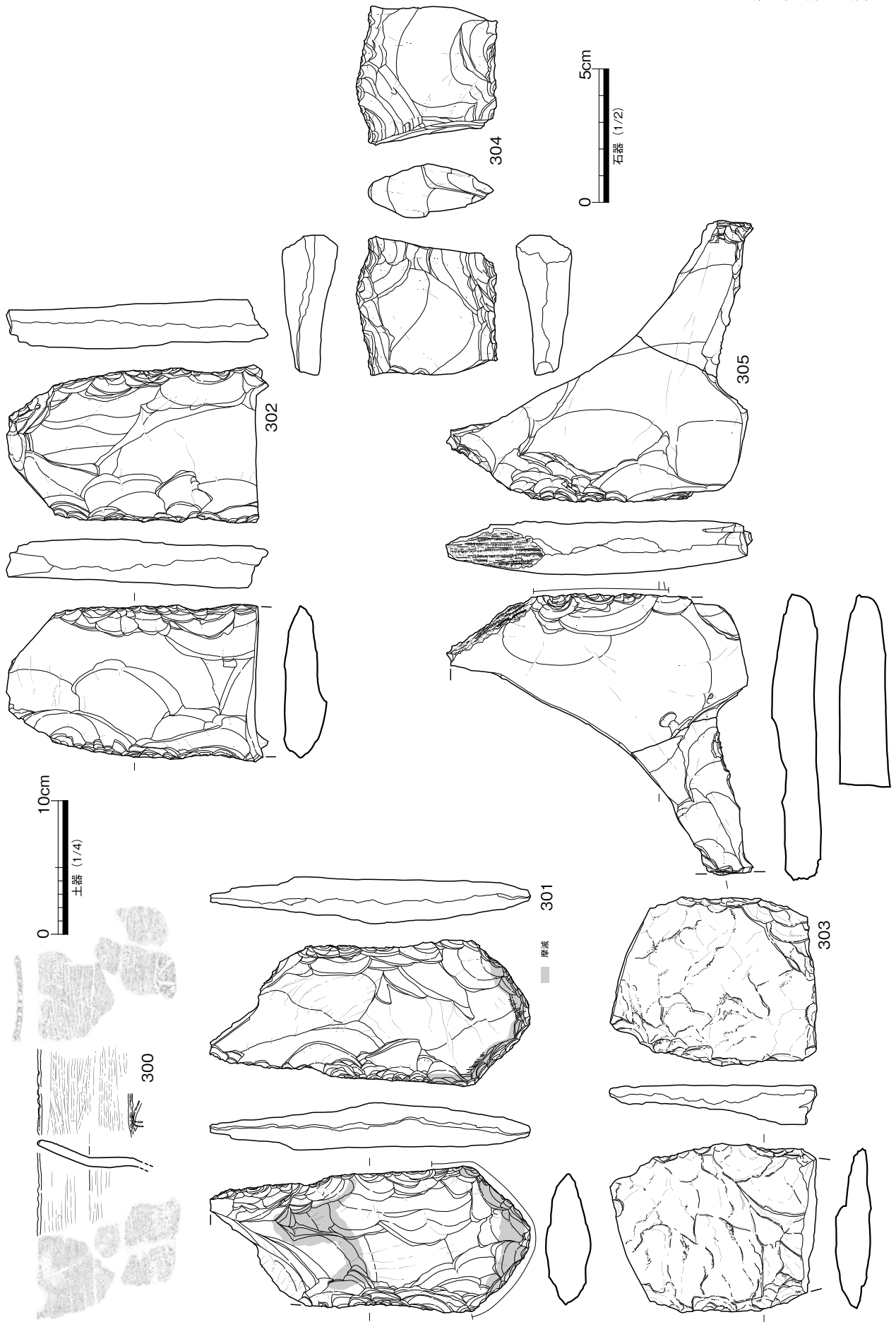
SR IV 02

Ⅳ区東北部の水路設置部分で検出した旧河道である。断面写真および断面図によるとⅡ区のSRⅡ01、02と類似する堆積状況である。28 $\frac{1}{2}$ リコンテナ半分程度の遺物が出土しているが、小破片で摩滅するものが多い。なお、縄文時代晩期に相当する堆積層には図化可能な遺物はなかった。

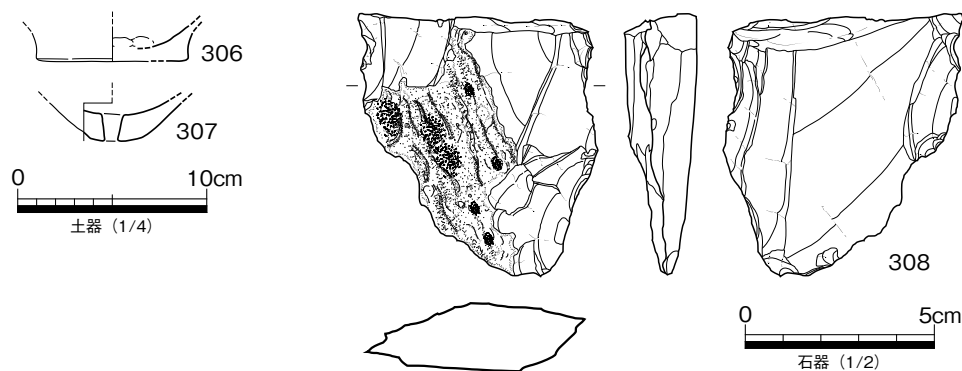
第48図294～299は、SRⅣ02出土の遺物実測図である。いずれも弥生時代前期の旧河道に相当する層から出土したものである。294は逆L字状の口縁で、口縁直下に8条のヘラ描き沈線を巡らしている。297は打製石庖丁である。剥片を利用し、わずかな細部調整で刃部を整形している。298、299は打製石斧。いずれも刃部に摩滅が認められる。

SR V 01

Ⅴ区東北部のスタジアム用地部分で検出した旧河道である。東側のSRⅣ03、Ⅳ04の断面図(第51図)に見るとおり、幅広の河道が埋没したあとに、新たに河道が切れ込んで流れていることがわかる。しかし、SRⅤ01では両者の関係が不明瞭になっており、調査では両者を同一河道と認識し、層ごとに遺物の取り上げを行っている。出土遺物は28 $\frac{1}{2}$ リコンテナ1箱弱である。SRⅤ01は最下層に砂礫層が見られ、Ⅱ区の旧河道の堆積状況とはやや異質な要素があるが、縄文時代晩期に幅広の旧河道が埋まり、弥生時代前期に新たに河道が流れているという点でⅡ区の旧河道と共通する要素が見られる。堆積層の様相の違いを、距離の離れた地点間の同一河川の埋没状況の違いと見るか、Ⅱ区の旧河道とは別の河道と考え



第49図 SR V 01 最下層 出土遺物実測図

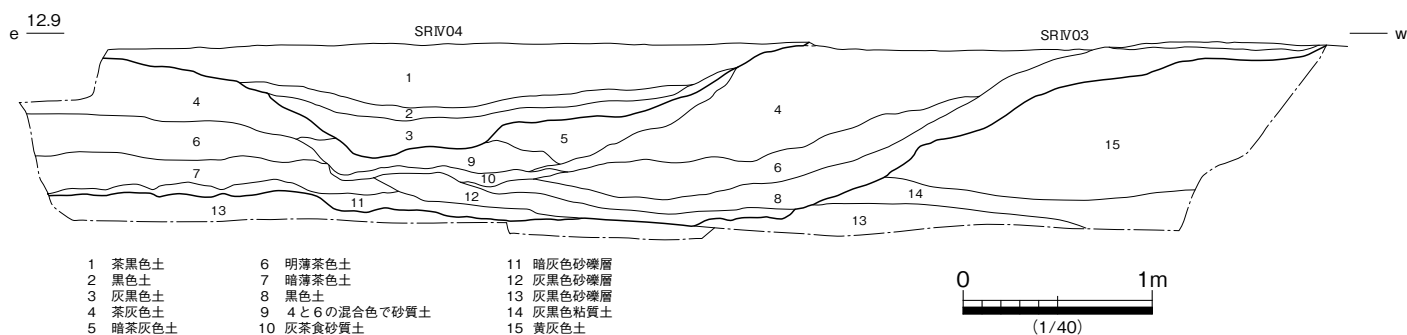


第 50 図 SR V 01 出土遺物実測図

るか判断しかねるが、河川規模の相似からみて本来はすべてが 1 条の河川に復原できるのではないかと考える。

第 49 図 300 ～ 305 は、SR V 01 最下層から出土した遺物実測図である。300 は縄文土器深鉢、口縁端部に粗く刻み目を施している。外面は貝殻条痕、内面はヘラミガキである。301 ～ 303 は打製石斧、303 は安山岩製（風化する）である。304 は形状から打製石斧を転用した楔形石器とした。305 の一側縁は両極打法により整形しているが、折損のため本来の形状は不明である。

第 50 図 306 ～ 308 は、SR V 01 出土で層位不明の遺物実測図である。306 は弥生時代前期の甕、307 は弥生時代後期の甑の底部である。308 は石核とした。

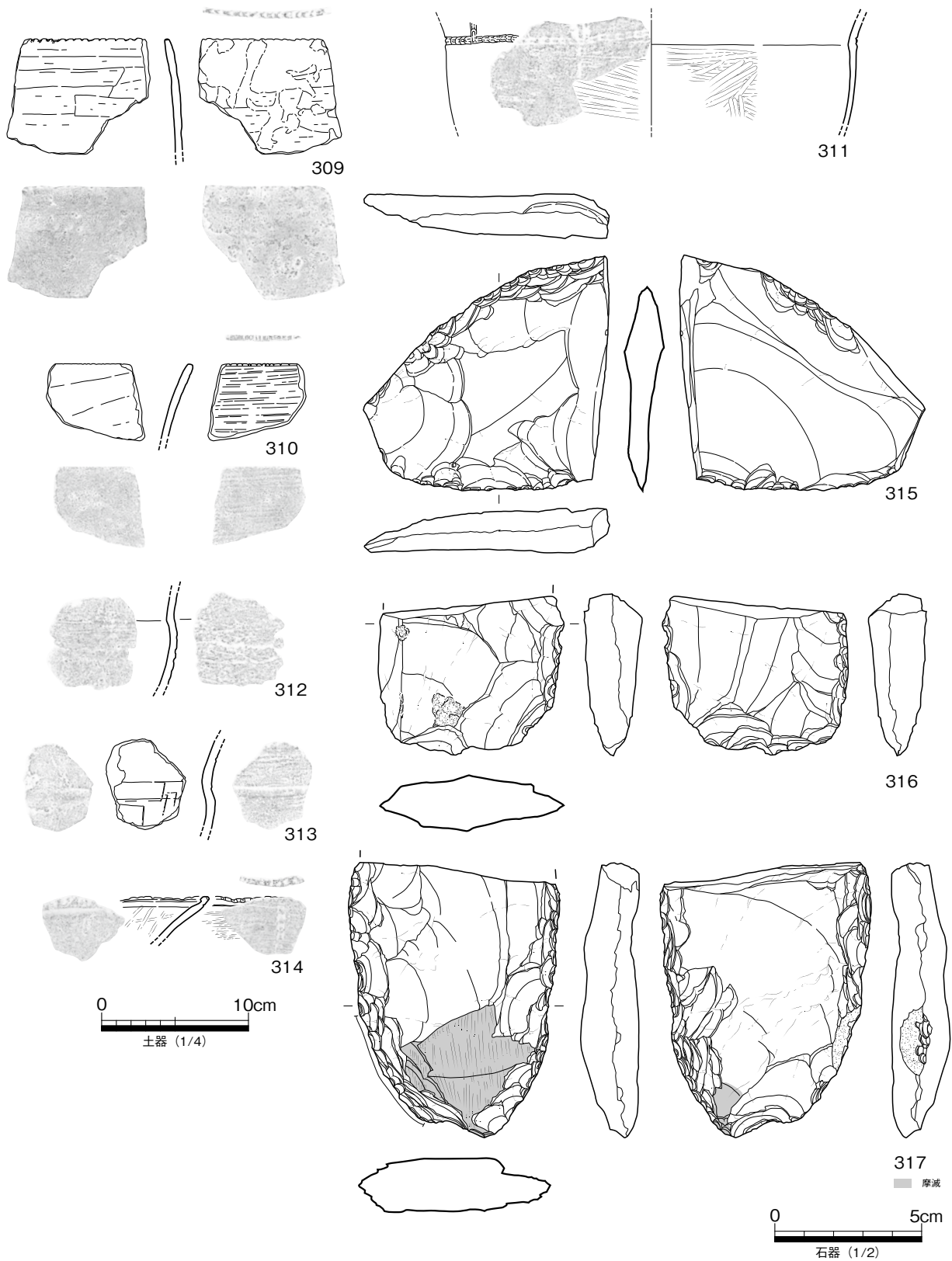


第 51 図 SR IV 03、IV 04 断面図

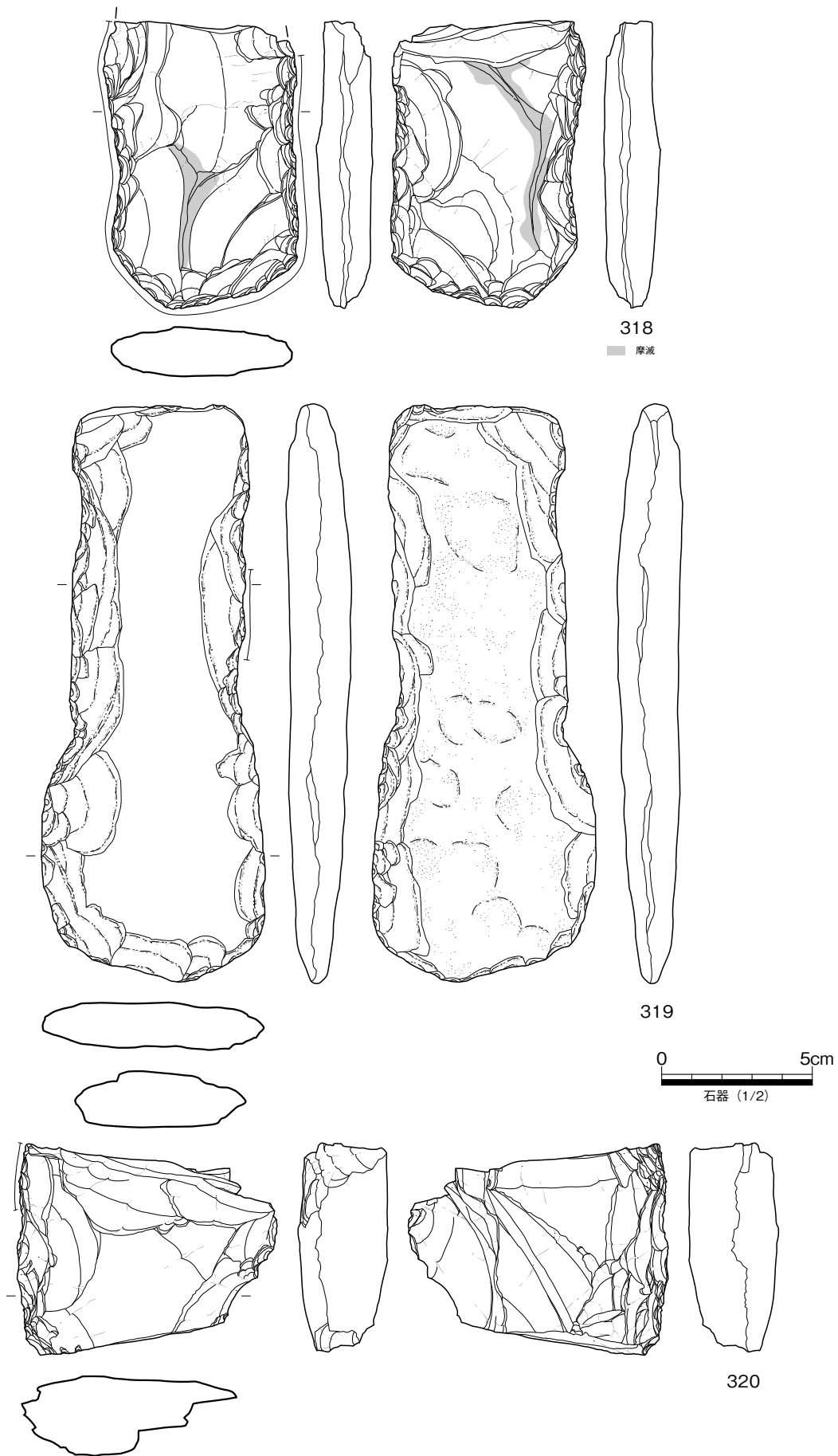
SR IV 03

IV 区東南部のスタジアム用地部分で検出した旧河道（第 51 図）である。SR IV 03 が埋没したあとに、それを切り込んで SR IV 04 が流れている。SR IV 03 には良好な断面写真がないため検討材料に欠けるが、隣接する SR V 01 とした河道を埋める堆積物の様相が SR II 01 などと類似することから、位置的に連続する SR IV 03 も縄文時代晩期の旧河道であると考えられる（ただし、最下層の砂礫層は II 区に見ない様相である）。また、同様に堆積層の類似から SR IV 04 は弥生時代前期の旧河道と考えられる。

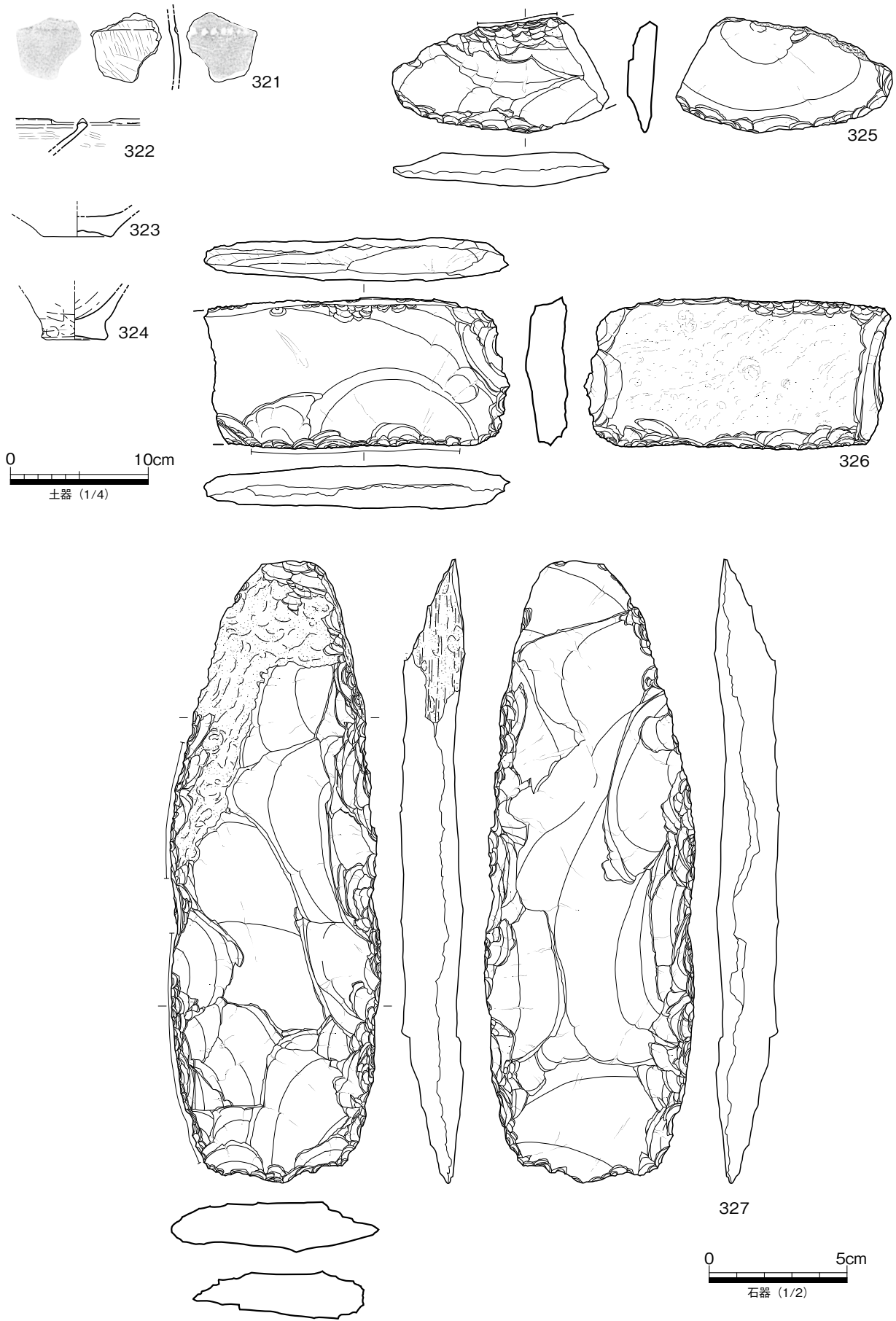
第 52、53 図 309 ～ 320 は最下層の砂礫層出土の遺物である。309 は口縁部に歪みがあるため図の傾きは不明確であるが、バケツ形を呈すると考えられる。口縁端部に「D」字形の刻み目が施される。外面に煤が付着する。310 の深鉢も口縁端部に細かい刻み目が施される。311 は深鉢の頸、胴部境界付近



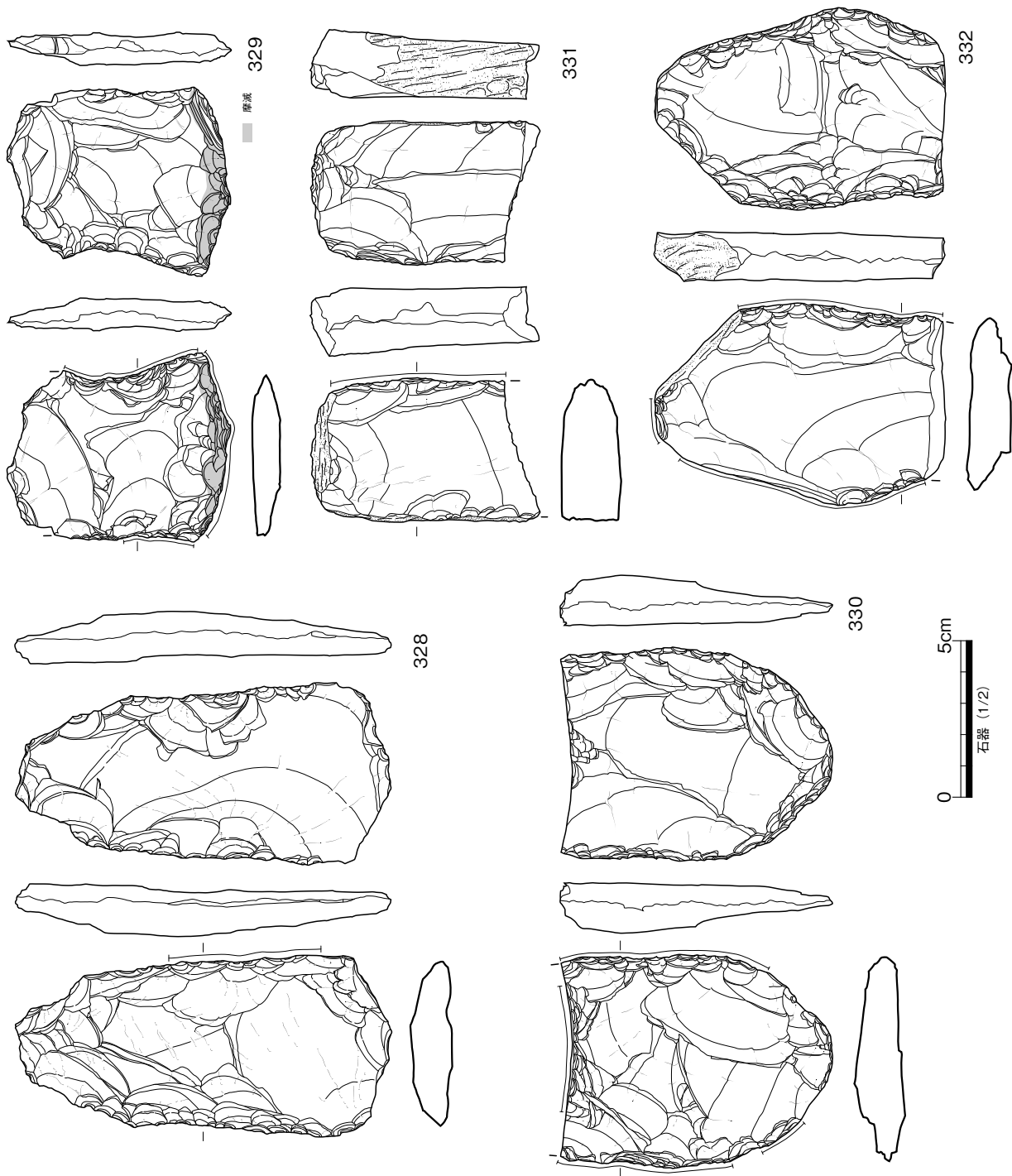
第52図 SR IV 03 最下層 出土遺物実測図(1)



第 53 図 SR IV 03 最下層 出土遺物実測図 (2)



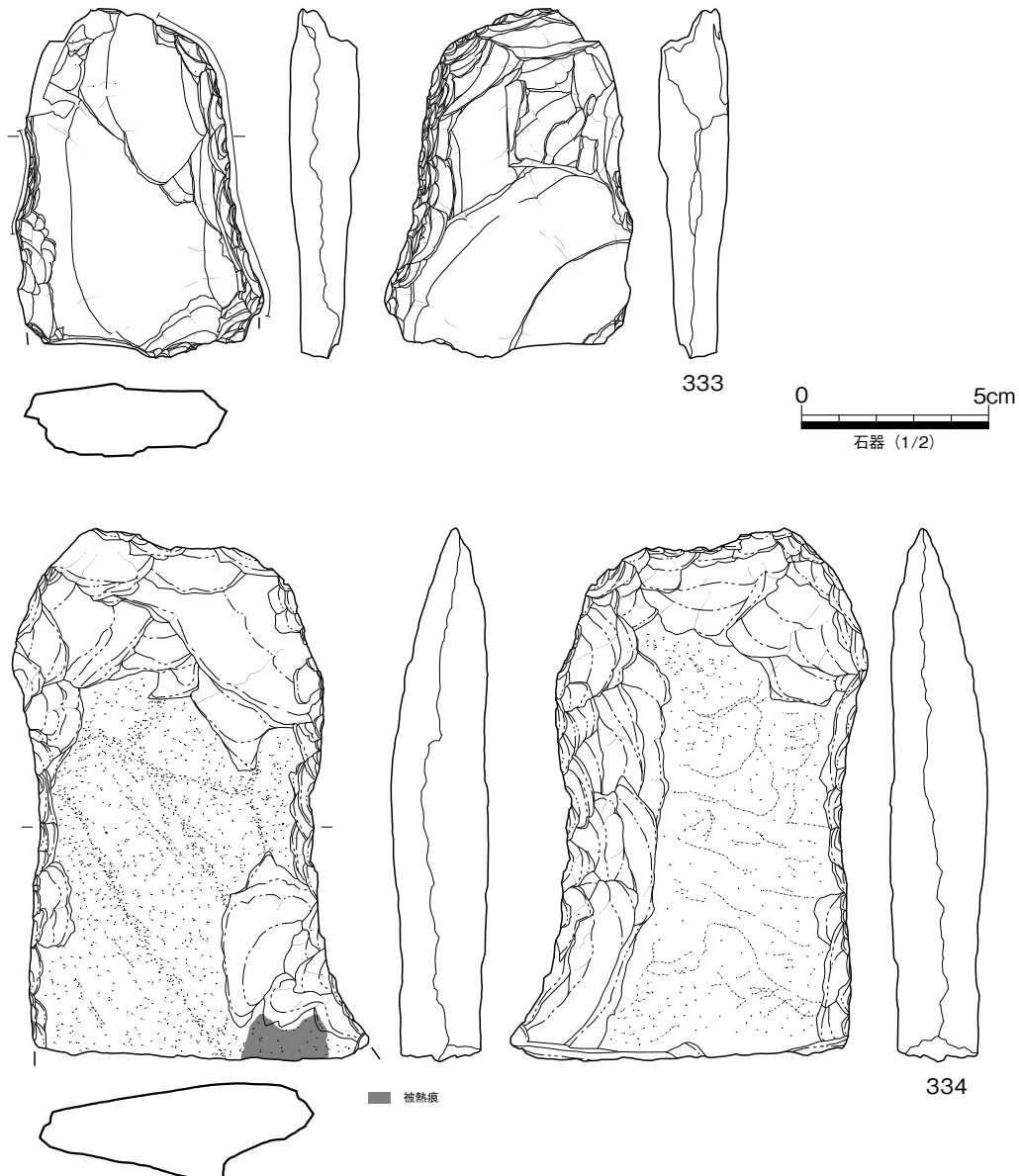
第54図 SR IV 03 下層 出土遺物実測図(1)



第 55 図 SR IV 03 下層 出土遺物実測図 (2)

の破片である。「D」字形の押引文を施す。また、頸部に縦方向の刻み目が施されている。外面の頸部はナデ、胴部は貝殻条痕、内面は頸部ナデ、胴部はヘラミガキである。312、313 も深鉢の頸、胴部の境界付近の破片である。314 は波状口縁の浅鉢の口縁部片である。端部は平坦に仕上げ、刻み目を施し、外面に縦方向の押引文を、口縁部内面に凹線状のくぼみを巡らしている。最下層出土の遺物は小ザル 1 杯ほどの量であるが、平井泰男氏による晩期Ⅳ期に属するものと考えられる。

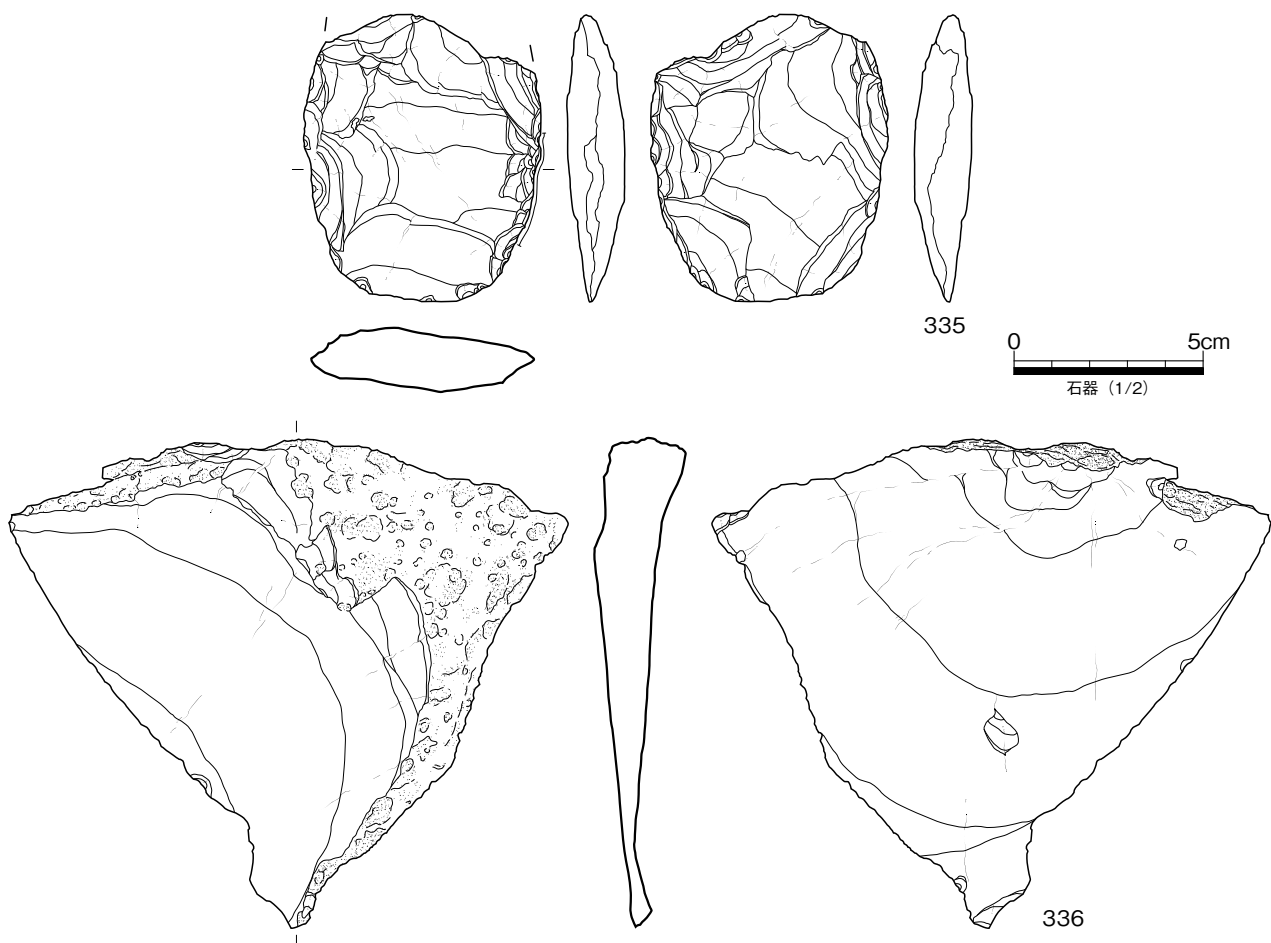
315 は削器、316 ～ 319 は打製石斧である。317 の刃部の一面は顕著に摩滅しており、縦方向の擦痕も認められる。319 は安山岩製（風化する）のものである。320 は、左側縁に階段状剥離が見られ、こ



第56図 SR IV 03 下層 出土遺物実測図(3)

の辺を下辺とする楔形石器の可能性もあるが、2次加工のある剥片としておく。

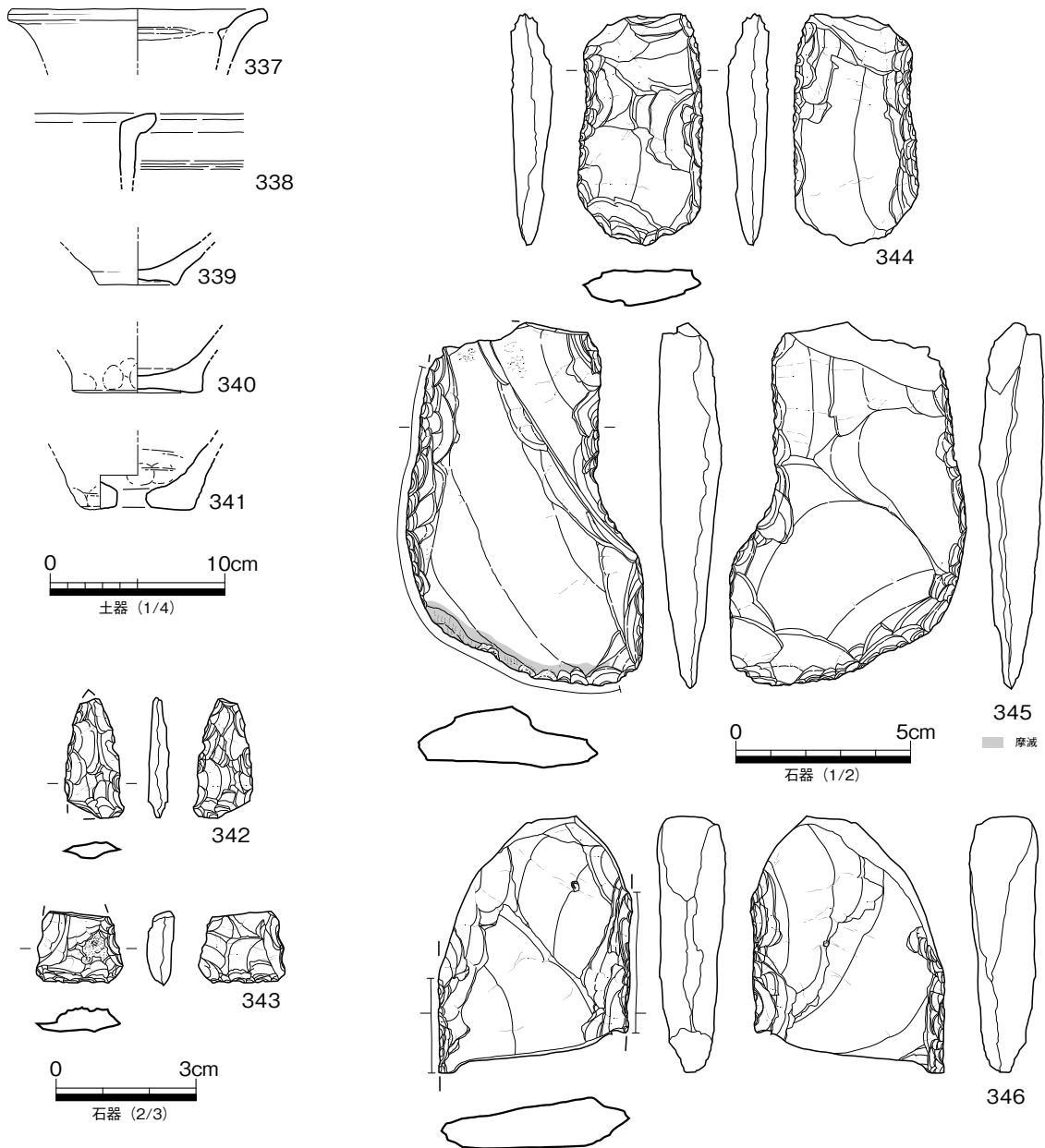
第54～56図321～334はSR IV 03下層出土の遺物である。321は縄文土器深鉢の頸、胴部の境界付近の破片である。「D」字形の刺突文を施す。322は縄文土器浅鉢、口縁端部を内面側に肥厚させ丸く仕上げ、部分的に粘土を足して突出部を作っている。323は弥生土器壺の底部、324は弥生土器の甕もしくは蓋である。SR IV 03下層に弥生時代前期土器が混在する理由はよくわからない。325は削器である。326は不明瞭であるが一側縁に抉りを入れており打製石庖丁とした。ただし刃部は厚く、潰れており打製石斧とすべきかもしれない。327は完形の打製石斧である。刃部にわずかに摩滅が見られる。328～334は打製石斧である。329は刃部が摩滅する。330の基部は欠損するが、割れ面の縁に微細な階段状剥離が見られ、折損後も使用されている。331は基部の破片、上辺と一側縁は礫面が残り2cm近い厚みがあるが、そのまま剥離を行わず利用している。一側縁は敲打によって整形する。334は安山岩製（風化する）の打製石斧である。一部に被熱痕が認められるが折損部分にも及んでいる。



第 57 図 SR IV 03 上層 出土遺物実測図

第 57 図 335、336 は SR IV 03 上層出土の遺物である。335 は打製石斧の刃部、336 はサヌカイト剥片である。

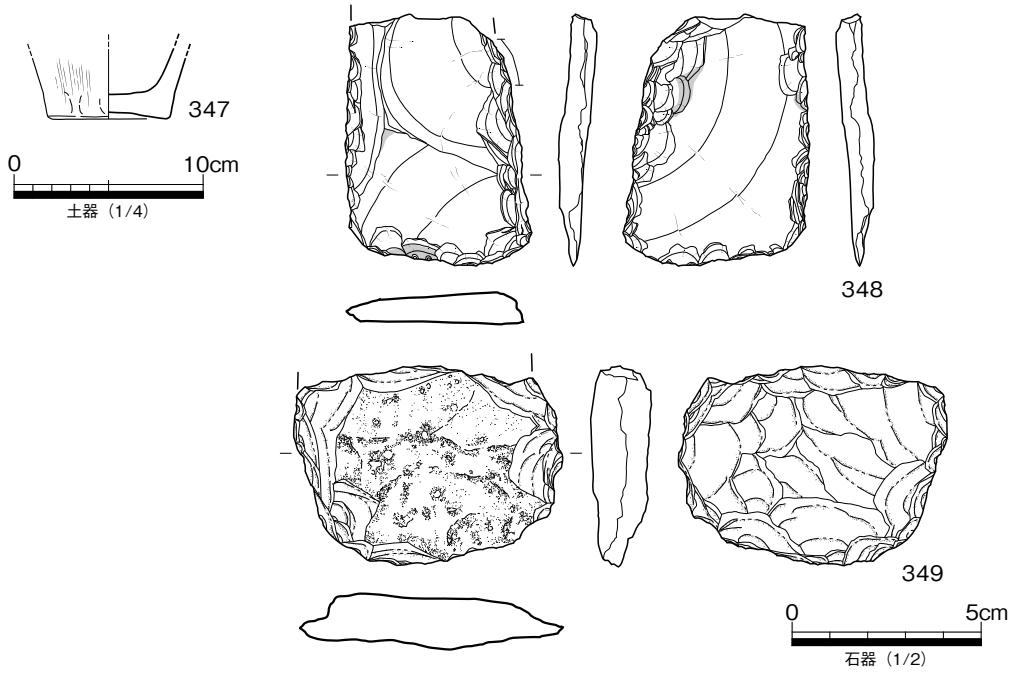
第 58 図 337 ～ 346 は、第 1 層もしくは北肩付近として取り上げられた遺物実測図である。これらは取り上げの日付からみて遺構検出段階の出土遺物と見られることから、SR IV 03 に伴わない可能性もあり、分離して提示する。337 は口縁部内面に突帯を付す弥生土器壺、338 は逆 L 字状口縁の甕小片である。このほか甌などの底部がある。345 の打製石斧は、側縁折損後に再調整を行って使用したと見られる。



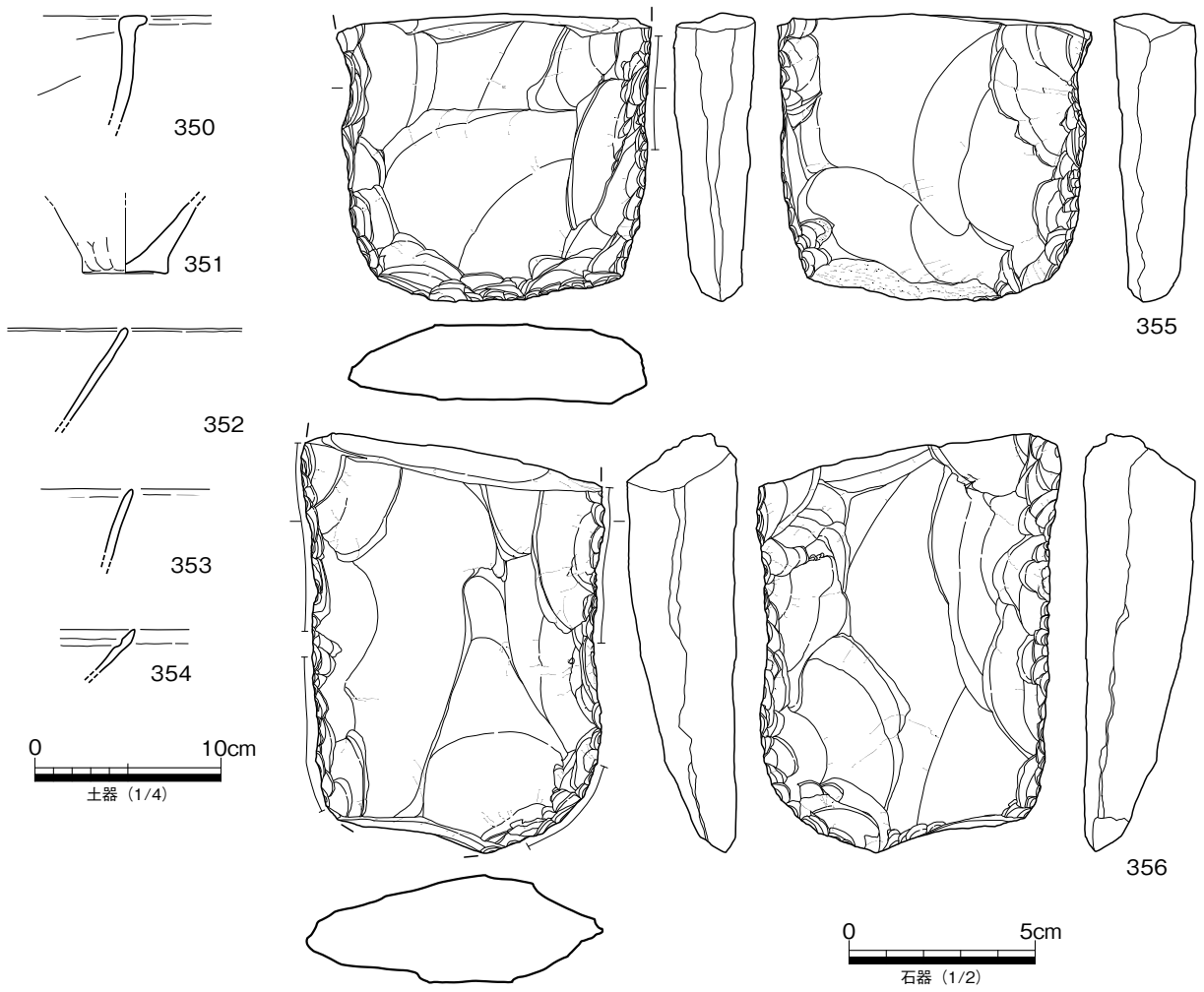
第58図 SR IV 03 検出時 出土遺物実測図

SR V 02

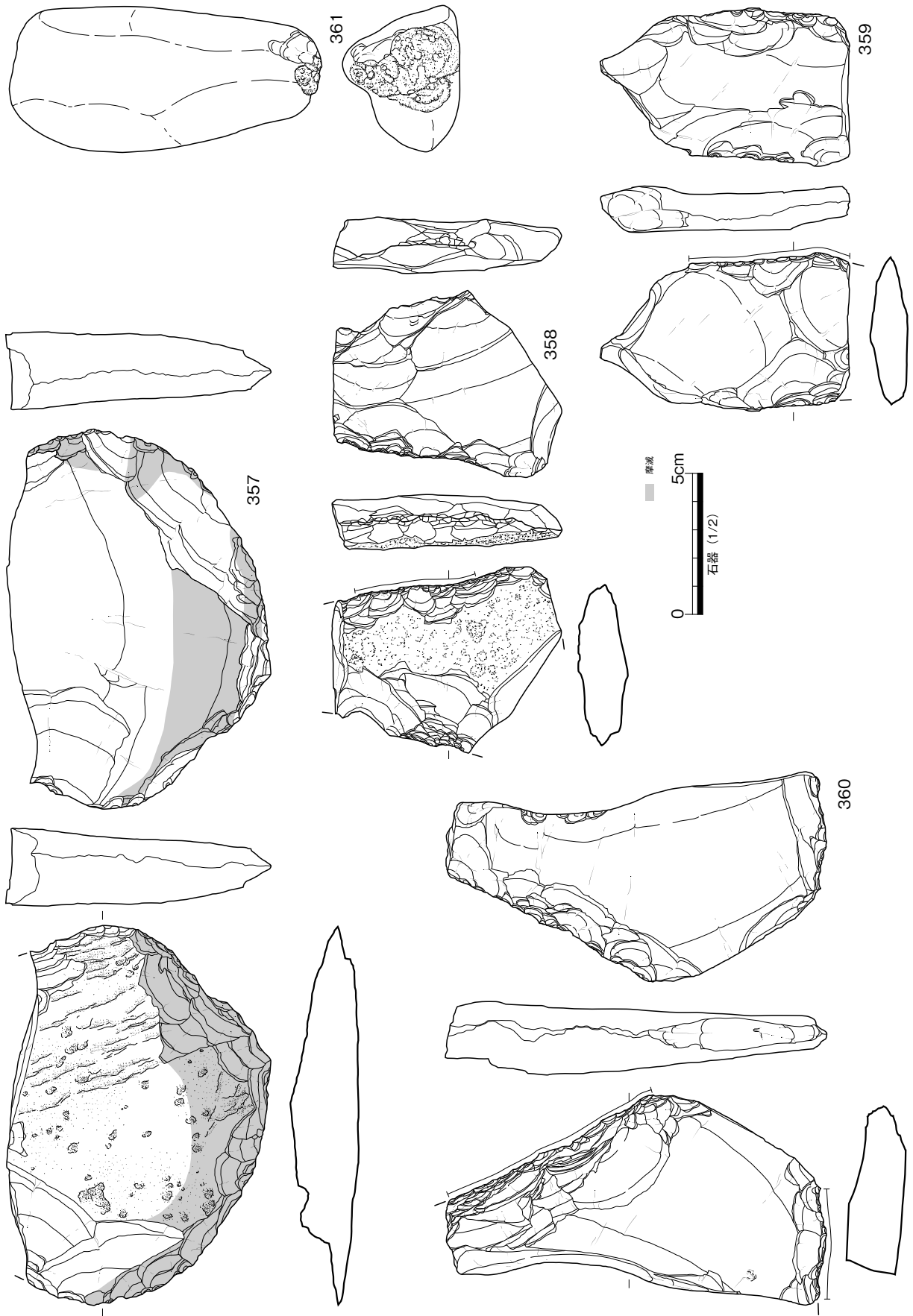
V区東北隅の水路設置部分で検出した旧河道である。上部を中世の溝状遺構で壊されていることもあり小範囲の検出にとどまっている。断面写真から上部に弥生時代前期の旧河道、下部に縄文時代晩期の旧河道の埋土が堆積していると判断できる。出土遺物は微量である。弥生時代前期相当層から第59図347と348、縄文時代晩期相当層から349が出土している。349は安山岩製（風化する）の打製石斧の刃部片と考える。



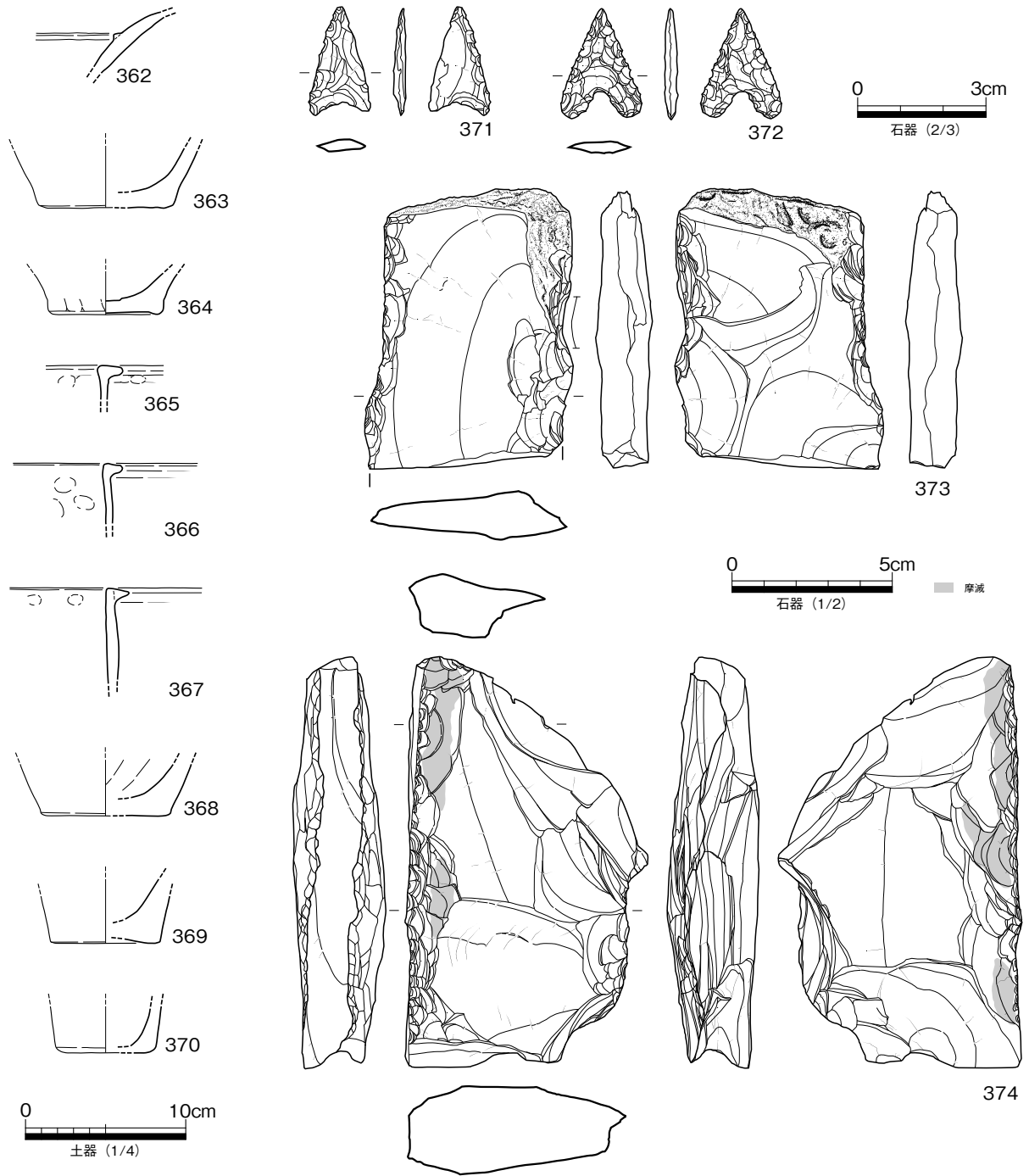
第 59 図 SR V 02 出土遺物実測図



第 60 図 SR IV 04 出土遺物実測図(1)



第61図 SR IV 04 出土遺物実測図(2)



第 62 図 SR IV 05 出土遺物実測図

SR IV 04

IV区東南部のスタジアム用地で検出した旧河道（第51図）である。SR IV 03 埋没後に、それを切り込んで新たに流れた河道である。28ℓコンテナ半分ほどの遺物が出土しているが、摩滅する小破片が大半である。第60、61図 350～361はSR IV 04 出土の遺物実測図である。357が2層から出土した以外は、すべて1層出土のものである。352～354は弥生土器鉢としたが、摩滅が著しく帰属する年代は不明確である。355～360は打製石斧である。358は基部と刃部の一部を折損しているが、一側縁を打縁とする楔形石器に転用している可能性がある。360は刃部にわずかに摩滅が見られること、側縁が刃潰しされていることから打製石斧とした。分銅形を呈すると思われるが、折損部分が多く詳細不明である。361は敲石である。握るのに手頃な大きさの砂岩亜円礫の一端に敲打痕が認められる。

SR IV 05

IV区東南部の水路設置範囲で検出した旧河道である。現代の里道や後代の遺構により明瞭に捉えられないが、南側のSR V 02とセットになると考えられ、断面写真からSR IV 05が周辺調査区の弥生時代前期河道、SR V 02の大半が縄文時代晩期の旧河道に大別されると判断できる。

SR IV 05は28ℓコンテナ1／4箱ほどの遺物が出土しているが、摩滅する小破片が多数を占める。第62図 362～374はSR IV 05 出土の遺物実測図である。362は口縁内部に貼付け突帯を付した壺の破片、365～367は逆L字状口縁の甕である。371、372は凹基式の石鏃、373は刃部を折損した打製石斧である。374は石核としたが、部分的に摩滅が認められる。

2 弥生時代前期～中期前葉

II区（第63図）

II区からは多数のピット、土坑や不整形の落ち込み等が検出されている。これらは弥生時代前期のものと同様に弥生時代後期のものがあると考えられるが、調査段階の精査により埋土から両者を区分することは不可能という結論に至っている。整理調査の段階で、図化した出土遺物はもちろん、未図化遺物も観察し、主として土器胎土によって前期と後期に分類し、遺構の帰属する時期を推定するうえで、堅穴住居や掘立柱建物の復原を行うことを意図したが、大半の遺構が明確な時期不明ということになり、積極的な復原は果たせなかった。以下に出土遺物の様相より弥生時代前期の遺構と考えられるもの（SP II 01～II 15、SK II 01～II 09、SX II 01～II 05）、やや消極的な根拠ではあるが、弥生時代前期の遺構と考えられるもの（SK II 10～II 18、SD II 01、II 02）の順に報告する。

柱穴

SP II 01～II 15

第64、65図はII区のうち平成7年度に調査した部分の弥生時代前期に属すると考えるピットから出土した遺物実測図である。

375、376はSP II 01 出土で、375は縄文時代晩期深鉢である。口縁端部に刻み目、端部より1cmほど下がった位置に刻み目を付す突帯を巡らしている。SP II 01からは縄文晩期と思われる破片に混じって弥生時代前期土器の小破片も複数出土しているため、375は混入と考えられる。